增補
改正
俳諧歳時記栞草
三

増補 俳諧歳時記栞草

江戸 曲亭主人纂輔
藍亭青藍増補

秋

漢書律暦志 少陰者西方酉遷也、陰氣遷落物於時為秋、秋襲也、物斂成熟、

少皥 帝禮月令 其帝少皥、注云少皥白精之君、金天氏也、

摹收 神月令 其神摹收、注云、摹收金官之臣、少皥氏之子該也、

白藏 爾雅 秋為白藏、一曰收成、注云氣白而收藏萬物、故曰白藏、

金商 秋五行屬金、五音屬商、故有金風素商之称、唐高宗九日詩云端居臨王宸、初律啓金商、

明景 元帝纂要 秋景曰朗景、朗明義同、

爽 月令 孟秋之月、其音商、其数九、其味辛、其臭腥、其祀門、其虫毛、其日庚辛、其帝少皥、其神蓐收、其色白、其畜犬、其穀麻與麻子、其器以金、其事以斬、其味宜辛、其氣宜涼、其病咳逆、其祭先肺、其牲用犬、其祭先以脂、其味宜辛、其氣宜涼、其病咳逆、其祭先肺、其牲用犬、其祭先以脂、其味宜辛、其氣宜涼、其病咳逆、其祭先肺、其牲用犬、其祭先以脂、

籟 猶秋声也、増韻爽清快也、爾雅吹物有声曰籟、

夷則 月令 廣義 夷傷則法也、言金氣始肅萬物于此凋傷猶被刑戮之法、

七月

立秋 節月令廣義孝經緯云大暑十五日斗指坤為立秋七月節

新秋 韓文是時新秋七月節初金神按節炎氣除初也共謂新秋也

初秋 中院通茂公御説和歌うら葉初秋ハ、七月十四日ごとい

孟秋 廣韻孟勉也始也又

處暑 中月令廣義立秋十五日斗指申為處暑瀆暑將退伏而潛處也、處上声止也暑氣止息也是七月中也

文月 清輔奥儀抄此月七日ふみつきとふるもとゝ文どもをひらく故ふ文ひらげ月といふと暑せう文ひらげ月有家○文月を暑〳〵ふつきともいふ、

機棚月 藏王鵲のよつたのえ〳〵もろせよ、たなばと月のこゝろ待えらり家隆

女郎花月 藏王なをそこれちぎりのつろふ

涼月 月令孟秋月涼風至

盆秋 經曰毎年七月十五日、為父母設盂蘭盆供十方自恣僧得庚則曰室相

相月 尔雅七月為相疏云七月

桐秋 淮南子一葉落而天下知秋隨甲書梧桐立秋之日一葉先墜

蘭月 蘭秋 纂要七月曰首秋上秋

肇秋 月令廣義提要抄云

親月 和尔雅此月諸人詣親墳墓故曰親月蘭月云云

餞月 餞字

餞月 餞月送行燕説文送去也餞と訓ぜ暑の去を送る意ろり、

八月

葉月 此月肅殺の氣を生じ百草葉を落す故ふ葉落月といふ今暑〳〵て葉月といふ

南呂 律礼記律中南呂高誘註云南任也言陽氣内藏陰侶干陽任其成功、

白露 節月令廣義孝經緯云處暑後十五日斗指庚為白露言陰氣漸重露凝而白生於午極於亥故酉其中分也仲

同上 白露後十五日斗指酉為秋分

秋ハ為陰中、陰ハ晝夜長短亦均焉、仲秋 月令八月、為仲秋、

纂要八月為中、桂月 同上八月亦曰桂月、○桂の花の商、又曰壯月、

ららく月 芒環ふ出せり、難月 芒環ふ出せり 唐類函

あきまづ、中律 出處未考、

八月乃難、以達秋氣、云難ハ難月の誤ふや、秋風月 藏王 荻の巣を露充

ふやらひちるを、難月の誤ふや、

みぐて音あらるや、身ふるを 月見月 藏王 名ふし

こゑ、しあき風の月 定家 あらば秋の半

の空をなて、をのつゝとあと

ある月とこるうふ長明

九月

無射 律 礼記九月律中無射、高誘註云、無射、陰氣上升陽氣下降、

萬物隨陽而藏、無有射出見、寒露 節 月令廣義孝經緯云 秋分後十五日、斗指

辛為寒露、言露冷寒而將欲凝結也 霜降 中 同上 寒露後十五日、斗指戌為霜降、言

氣肅露凝結而為霜矣、季秋 月令季秋之月云云 紅樹 通俗志 ふ出せり人

疑らくハ紅樹月の誤ふん 藏王 ありてこゝはあらぐ

ろ〳〵とて色ゝ紅葉の月の色とをゝ 後鳥羽院御製○

朱熹詩云秋山有紅樹、忽憶田野中○韓退之

詩云春風紅樹驚眠處、似妬歌章作艶声云

〳〵えとまゝ、紅樹とゞくハ、范蠡曰王姑待之

九月の異名ふ、ゝ、玄月 至于玄月註云玄

月九月也、長月 夜長月とも 素秋 素秋八九月ふ限らず

義之、秋の總名ふ、素ハ白

ふ、四時と五色ふ配もるふ、秋ハ菊月 又菊秋ゝらの、

白ふ中るゆゑ不、素秋の名ふ、 月令季秋月

菊有黃花、晚秋 對早秋 桐の秋 李吟云紅

故曰菊月、 曰晚秋 葉もる故〳〵

木き 紅葉月 證歌紅樹 寐覺月 藏王 たびつた

の下ふ出つ

月、秋ふ、 小田苅月 藏王 ふ鳴こゑ

家隆

堺昭　色どる月　稍の秋といふかおじ

七月

糸織姫　棚機七姫の内こ　異名分類　旧事紀ニ令天棚機姫神織神衣ニ是　いぬひめ

犬飼星　去の部二星の条ニ出　石枕　仙覚抄　いこ枕こ

八真の石ニあらぞ玉こたなむ　芋の葉に露　藻塩草　露

取草と八棚機の歌と書付　**曬衣裳**　星のうし物　小袖

るふ芋の葉の露ニこ書こ云　**四民日令**　七月七日麪を作こ藍丸及び蜀漆丸と合

し、經書及び衣裳と曝し、俗ニ習ふと然り　**世說**　郝隆

七月七日鄰人と共ニ皆衣物と曝す、隆仰き臥して

腹を出す、人其故をとふ、曰腹中の書と曝のこ、○星のこの

し物、衣裳と曝すも、物とすもセタニ巧ミと乞ん為

こ、**貫之家集**　世をこめて我うを糸いセタの涙の玉の緒と

やあるらん秋きても露ゆゝ袖のせいなれバなほこつゆふ何

どときまし　**丹内侍荒野集**　七夕よ物うをとも見ひし

越

へ、**池の坊し立花**　洛の六角堂頂法寺雲林院公三條の南ニあり、三十三所順礼の一箇所也、近世僧專光數品の花枝と一瓶のうちニ山水の景象と模ることを得ること、和俗ニ是と立花とこ云、今ニ至て代々ことと玩ぶ、僧俗此徒弟ニあるも甚多し、例年七月七日立花數瓶砂の物等こあり、人爭ひてこれをとる、ことと池の坊の立花とこふ　**伊勢踊**　滑稽雜談　多又二星ニ供ものの意あり、

といふ〜〜より侍ること

○世ニふれ坂音頭あり、**生身魂**　蓮の飯　閑窓　さし鯖　倭華

本朝の世俗、七月ニふれバ生る二親を供養して、生身魂と名づくこと、盂蘭盆の修行あり、**盆經**　願く、現在の父母

とて、壽命百年病なく、一切苦惱の患なく、是七月十五日、僧自恣の日、現在の父母の壽命長久と祈る願の文

なり、是生身魂の修行なり、**和漢三才圖会**　刺鯖中元の日

に俎し背より骨ニ傍て割開きこと鯖うて、

こと一刺とし、○同書ニ云蓮の飯考

ニて親戚ニ贈ると礼式とすること秘

の葉と以て蒸せる糯飯と包み、月てこれを結ぶ佛名と以て好とする、

稲

[和漢三才圖会] 秋の夜晴て電ひかる常に俗傳ていふ此時稲實る故ふ稲妻稲交の名あり、

稲の殿

[御傘] 稲光ハ雜ふり、稲妻ふ對して稲の殿といふ

[説文] 電ハ陰陽の激耀するなり、

稲葉の雲

[續猿蓑] 獨ふて留守もりかなと〜稲の殿 一束、

[詩三云] 多稼如雲〇秋凡ハ田面ふ多とさるふ〜つまりの雲の露ぞ〜ぐ

稲の花

[大和本草] 近年中華より來る、

[天水] ゆふぐれ〜ふ見るものなしふ我家の門田の稲の花の浪よる後久我内大臣

糸萩

[大和本草] 糸萩ハ花紅ふ盛ん、

隱元豆

春子と植秋の末ふ實多く花紫く、蔓生也、嫩きとき莢とともふ煮食ふ京都ふて隱元豆と云、筑紫ふて南京豆といふ〇此種黄檗隱元禪師來朝しく諸種を持來る其一種ふ、故ふ隱元豆と名づく、

稲眷虫

[和漢三才圖会] 蠶蟲、眷黍、和名以祢豆岐、古萬呂俗云祢豆按ずるふ蠶蟲、蠶蟲斯ふ似て小く、長さ一寸ばかり青色尖ていとる首兩眼の間廣く但し蠶蟲斯ハ兩眼の間狹しと以て異なりとするのみ、社人立烏帽子を著る狀ふ似るふ故ふ俗呼て祢豆とふ小兒兩足を捕へ身と伸して首と俯き仰く稲と眷形ふ似るふ故ふ和名稲眷とふ古萬呂とハ蠶の類の和訓の總名ふ、

蟲

冬蟲

[本綱] 蟲蟲ハ總名なり數種あり草の上ふ在ものを蠶ふ冬ふ至て土穴の中ふ入夷人炙てこれを食ふ辛く毒あり其類土中ふ乳し深く其卵を埋む夏ふ至て始て出づ〇按ずるふ蟲蟲方なる首形莎雞ふ似て小く青白の色田の稲ふ生る夜ハ珠ふあり朝ハ稍ふ上り稲の露と飲む故ふ稲子と名づくこれを取て炙て食る味甘く美なり小蝦の如し形同うして灰色田野ふ在て地ふ跳る者即ち土冬蟲也、

蝗

[本草綱目] 蝗蟲集解

[和名抄] 蝗 和名於波無之 天二云蝗亦蠶ふ類して方首ふ王字ありて冷氣ふ生ぜり所、入て飛ぶ性金の声と畏る一名ふ八十一の子と生ずるときハ土ふ入て死もの、

[和名抄] 天 管子ふ凶年の五害水旱風厲蟲といふ虫ハ

蟲と称もてまあり、蠶ふ似て小、青色あり、
春、らるう如し、稲葉と食ひて大ふ害を、夜松明
螢鼓とふ

芋虫

大和本草 蝎、又菜の葉ふ
由青虫と生も、葛藤ふ生
しゝてこもと送る
う八大なる拇指の如く、長さ三四寸あり、芋虫
とゝ人青色又褐色ゝり、後ふ化ゝて鳳蝶こまる、

蟷螂

時珍曰、両臂、斧の如く、輙ふ當て避ぎ、故ふ當郎の名を
得こゝ人、又螳螂、首と驤臂と奮ふ頸脩し大腹二手四足、
疑と以て鼻ふ代ふ人の髪と食ひよく葉と鬣こそ蟬と
捕ふ、深秋ふ子と乳房と作るふ枝の上ふ粘着を即螵蛸
也、房の長さ寸むゝう、拇指の如し其内重々こゝ隔房
ゝゝ房毎ふ子あり、蛆卵の如し、芒種の節後ふ至て一齊出
滑稽雑談 俗ふ鎌きりとゝ人、がの両臂、斧の如し、又鎌と
めこゝもゞとゝ、ようそゝるこゝ人、○時珍曰今人疣と
病者往々螳螂と捕へこゝと食しむ、

竈馬

こゝ
わうぎ ニ
名一物この部蟋
蟀の条ふ註も、

兼三秋物

居待月

藻塩草
十八日ゝ
万葉ふ座待いとすゝき 巣細く絲線のごとし、長三四尺

絲芒

一株ふ数百の莖叢生を、秋莖
月と書り、
と抽で花、

色草

秋の千
穂とふも、

芋

時珍曰芋花とも
草ふり、
ゝで或ハ七八月の
間ひらく者あり、莖と抽で花と生で黄色、茎の長蕚号
あり、こゝと護る半辺蓮花の状の如し、○粒芋、唐の芋、
青芋、繭芋、甘藷ふの種類あり、

田舎杵

形四く諸杵より大
頭字の部ふこゝろて註しあり、

犬殺梨

和漢三才圖会 北國
ふゝて渋し酢し杵
ゝゝこゝろめる塔杵ゝ、
最多し、奥羽津輕
秋田の産、他國ふ倍ゝて大あり、周ア一尺四五寸、俗呼で
犬殺と名づく、狗子樹下ふ有ゝとき、梨落もゞ撲ゝく
死ゝ故、

稲

禹錫食經ふ
ふ名く、
雅云稲ハ徐く

稲苅

字彙 刈ハ
獲也取也、

稲扱

古ハ麥稲の穂と扱ふ、二ツの小き管と以て繩と通し繋ぎ
こゝと握り持穂と挾ミ扱迫年稲扱と製ゝ其捷こゝ
扱ゝ

稲舟

古今 取上川のゝれ
ばくこゝる稲舟の、

國[illegible]ごとくして舟を引のおもむき舟のうしろの方を
ながく人の物といふやと言てかづりふるゝに似たれバいふ又一説に
稲とつとつる舟なるゆへ讀方物といふやといふ心と
稲舟になぞらへてよむなりと 藻塩草 に見えたり

稲莚 御傘 莚をしきたるやうに稲の面の平々とあるを申也よつて
夜分にも居所にも嫌ハず○又新蒙にて織たる莚をも又
むしろ稲とて木の枝などに刈かけたるをもいへり たゞしたるとも稲莚
とハあり 万葉 王の道行つかれ稲莚しきても人をみ
るよしもがな 人丸 新古今 秋の田のかりねの床の稲む
しろ月やどれともしける露かな 定雅○太るく是をよく心
得べし

鰯引 裂鱠 和漢三才図会 鰯 俗字 鰮、和名伊和
之、性柔弱故に俗字弱に従ふ 與
和之と訓るハ相通ス中略 群行して至る時海波稍赤し漁
人豫知て網を下し是を采る 鯨好て鰯を呪ふ為に逐
るゝ者數万群となして浪棲のごとし是を取て膾に作
て炙として食ふ又脂を取て燈油とす○鰯引とハ網
を引の義 裂膾とハ腹魚刀を用ゆるに及バず指を以て
さきと解故にいふ 本朝食鑑 一名御紫 或ハ紫といふ本朝
宮闈の兒女鰯の賤名を忌て御紫といふ

鰯雲 秋天 鰯先 鰯の塩糟 其内色紫黒故に名づくるなり
あらんとする時一片の白雲ありその
雲段々として波の如し是を鰯雲と云

八月

芋名月 つの部 月見の条にあるべし

十六夜月 既望 古今 君やこん我やゆかんのいさよひに槇の板戸
もさゝれねにけり○いさよひとハたちやすらふ意也十六日の
月暮てのちしばしやすらひていづる故也○ややもすると出ていさ
よふ月の雲 芭蕉○此句意ハやゝもすると月ハ出ながらも雲
のかゝるにいさよひてみゆるといへる曲節なり 蔡氏集傳 日月
相望むことを望といふ既ニ望む十六日之

羊肚菜 和漢三才図会 羊肚菜 今云発口蕈 八月の中湿地に
多く生ず其繖の表褐色端曲り捲 裏ハ黄白色細刻
ありしあみのごとくにして孔あり蜂の巣のごとし甚だ[illegible]

石蕈 同上 状木耳のごとし繖柄ともに黒色裏灰
白色 峯の頭巖の上にあり甚得がたし

稲

小屋 同上 守舎 禾を看守なり○田間に建て猪鹿を追ふ処也

稲木、稲掛

語篇 喬杆 伊奈加計 ○稲木、俗稲掛とのふ、禾

稲干

と掛る具、竹の長短相等しきの三莖を取て二ふ幾と用て、是と縛り、田中ふ於て禾と上ふのけて乾すなり、

稲束 和漢三才圖会 稲こ刈て束ねて一把二把ゑう是あり、又稲塚あり、苅稲を束ねて後積て堆くもて恰も塚の如しまと稲塚こそ、

稲負鳥 古今 我門ふいまわわせ鳥の鳴るつけさく風ふ鷹いきふりく」真洲翁云稲負鳥いとく考がまこそ考ぐと論ぜ、とるふ或ハ鵲し田夫しなどいへ此哥とよくも心得ぬ、て、詞をもらぬひごとも、皆いつふ足らぬ庭くきのことりもふくるいあれり、実ふ秋の半もぎて来鳴りのあり、綺語抄にいとと稲負鳥のとくもい人ハ悲路ふまぐふいざらもう、○鶺鴒稲負鳥、庭くきつ、ふまも色鳥とうきとつ、鳥ホの諸名けり、三才図会 鶺鴒 雀のごとく飛こきハ鳴行ときハ揺く太と鷃のごとく脚長く尾腹の下白く頭の下黒く連綴のごし、故ふ杜陽の人こ

御傘 いろく秋とくる小鳥をとの、雪玉 さらふ又わくるとと連銭とのふ、色鳥

もかふ〜山路ゆく秋やいうるが限りこの色鳥のこゑ改為、桑扈 和漢三才圖会 竊指 青雀 鷃 此用雀 伏鳩 ようく小く頂黒く腹灰青色羽の末黒く白き斑あり、嘴微曲て厚く浅黄色尾短く好て豆粟を食ふ故ふ豆甘美と名づく、俗以て豆畑しと名づく常ふ鳴て春月よく囀る比志利古木利とのふがごし、伊須賀 加鳥 正字未詳 同上 狀鸝鴣のごとくふ〜て頸背蒼く又腹臆最赤く紫あり嘴青くく〜〜翻語又とのふ、故ふ事物翻語と伊須加の嘴とのふ、

九月

生玉祭 九日

神社啓蒙 生玉の社ハ摂津國東成郡天王寺の辺ふあり、祭る神一座、天の生玉の命 社家註進記 明應年中本願寺の僧こゝふ来りて寺院と創し、神地と以て境内ふ接し、神其不潔と惡こて、彼僧と罰そ、僧おそれて神殿と今の旅店の側ふ遷〜ことゝく造営こそ、其後信長の兵火ふりて、殿社灰燼とあり、纔ふ神璽と別所ふ迁し、慶長年中、秀吉城廓を築くの日、今の地ふ迁そ、○例祭九月九日、神輿一基、遊行流鏑馬あり、社内ふ

十坊ありその内南坊と別當とす、

岩倉祭 十五日

八所明神の社八、洛の北長谷村の西岩倉にあり、王城の四隅ふ岩倉と置まこれ其一なり、

拾芥抄 大雲寺岩倉觀音○親長卿記ふ云、文明三年三月廿九日、岩倉長谷の觀音ふ恭る、十一面圓融院の御願、日野中納言文藏卿草創なり、○鎮守岩倉大明神、所謂八所とハ、八幡 加茂 松尾 山王 住吉 春日 新羅 大座是ふ太神宮 貴船 稲荷 平野と加へて、以上十二社なりと十二所明神と称ス、是大雲寺の鎮守ふして、土人本居神とす、例祭九月十五日、神輿遊行ス、神主八村中の氏子交るくるとと動む、大雲寺衆徒四人名代として公人法師二人供奉、夜宮ふ大炬火二ツ立、深更ふ及て角力五番あり、

潛研堂雜談 俗ふ岩倉の尻くき祭といふ、夜ふ入て神供を奉る、一村の内新婦ともらて、婚礼の服と着せ、神供の器を頭ふ戴き、神前ふ至ることあるも、一村の老若ちいさき枝木と持、新婦の尻をうつ、新婦うとまでことをるを、立まり、故ふ尻くきといふ、

一宮祭 十五日

○河内國文野郡北枝方村ふあり、祭る神牛頭天王八王子、北野の天神、摂社、帝釈天王、服立寄姫大明神、浅原大明神、鎮座年暦詳ならず、例祭九月十五日、今八十六日神輿出て神梨神湯ホあり、氏子八郷坂村小倉村 招提村 田口村 甲斐田村中宮村 禁野村 濃村是社僧神宮寺及社家岡田氏記ス處、又一説ふ一宮平岡大明神ハ、河内國河内郡ふあり祭る神天の児屋根命 姫大神、香取神、鹿島神若宮の社末社ハ社、神武天皇の御宇鎮座、例祭九月八日九日社務水足大炊下祢宜神子五六輩、皆農民ハ、てことと兼務ひとと、

紀事 九大

伊勢御遷宮

社造替毎ふ陣の義ありて、時日と定らる、勅使あ、伊勢大神宮、春日の社廿一年を經るときハ、造り替へ遷宮の時納る所の神宝、行事官、調進をこの月伊勢泰宮の人多く京師ふ出て、十六日の御祭會並ふ御遷宮ふあるとハ、九泰宮の人、光亜山の國阿の像ふ詣てその杖履ふ戴祥す、相傳ふ國阿深く太神宮と信じ時々木履と着柱杖と携て泰詣とす、終ふ行路の難ふ、故ふその福ふ徼んて以亜安と祈るく、○二十一年毎ふ遷宮あるが故ふ十五年

めふ至りてき末引ナとあり、三年ゐて木引成て又三年木苻のことあり、材木ハ木曽山並紀州大杉山より出ス○内宮御鎮座ハ垂仁天皇二十五年三月外宮ハ内宮鎮座の後、四百八十四年と經て、雄略帝の時並跡ゑ

色ふた風 九月の風あり 新古今 ものおもふころもの色ふた風ふくたびごとに秋のこころぞうつりにけり 久我内大臣

隱君子 菊の異名あり 范至能菊譜序 山林事者或以菊比君子其說以謂歲晚獨榮衰乃獨繼然秀發傲睨風霜此幽人逸士之操雖寂寥荒寒而味道之腴不改其樂也 愛蓮說 菊花隱逸者也

いもて草 菊の異名あり 藻塩草 長月の九日まさくいもて草花八重咲て丹代で毛在て未地ふ麼

毬栗 其實苞中に在て毛毬ふ似て和名以加ざるとりふ、毛毬、和名以加 無花果 和漢三才圖会 其實核ふ似て本窄く俗に唐枇杷ふ似てとりふ、一月ゐて熟す、故ふ一熟と名づく、その樹枇杷ふ似て小く、皆色淡く潤ふ文理隆明ゐり、五痔と治するとと

識て魚毒と治するとを考ふ、

櫟 櫟ふ似て花ハ栗の如し實ハ椎より少し〳〵大く木硬くして多く船の櫓ふ作る 藏玉 秋もゆ色もさびくく實と以て秋とも、

色見草 ころのいろ見草ちらまくき山風ぞふく、

色不變松 荀卿曰隆冬と經て凋まず雪霜と蒙ずて憂ぜず其貞と得とらゝべし 新拾 いろゝなもとの山のゝ岩蓮花の秋君とて千世の友とゝゝゝゝん 入道前内大臣

花 大和本草 岩蓮花倭俗の名之其草の形葉のゝゝ恰も蓮花の開るゝ如し異名之或ハ云佛甲草是ゐと非

鰯の黒漬 豫州の産ゐり、宇和鰯と称てその腸の中ふ黒汁あり、塩水ふ和して製両鰓と切削て鮓とす、鰯の性其魚黒〳〵ことを黒漬とのゝ、

道泰 九日 迎鐘 山城国名勝志 六道ハ五條の末北、槙賣 建仁寺巽の角ふあり、今の建仁寺大昌院管領也、藥師堂あり、是珍皇寺の本尊、○雍州府志 小堂ハ弘法大師の開基ゐて元葬場

小堂ニ地蔵ヲ安置シ、世ニ六道ト称シ、傳ヘニこの所ニ真達ヲ通ジ、故ニ小野篁この所より親ら六道ニ行て帰ラリシ、是ニよりて毎年七月盂蘭盆前九日ニ男女参詣ス。

紀事 今日諸人六道地蔵ニ詣て男女鐘ヲ撞て聖霊ヲ迎ふるといへ各槙の枝ヲ買て携帰る又新穀ヲ買て聖霊ニ供ス是ヲ是ヲ祖と称ス○六道参ふまゐで槙の枝ヲ買ひて家ニ入ル、霊前ニおくハ俗聖霊槙の業ニ乗テ来ルこと云ふ是聖霊ヲ迎ふる意ニ成べし、

古事談 珍皇寺の別當某云、当寺の鐘ハ慶俊僧都こゝに鋳る、慶俊入唐の時、留主ニ成る僧ニいへらく、此鐘土中ニ埋三年ヲ経て掘撞べし、衆僧三年ヲ待ニ堪ず、纔ニ一年ヲ過て掘撞ニ掛く撞ニ其声唐ニ聞ゆ、慶俊日我寺の鐘声ハ三年ヲ待て是ヲ掘撞上ふ云る時ハ撞ぎ〳〵て六時ニ声伝るべしと歎惜ス、○かゝるの所謂ふて、聖霊ヲむかふるゆめ撞ふ〳〵是ヲ迎鐘と云ふ、○六道ハ桓武天皇延暦十三年長岡より今の京ニ遷らせ給ふとき諸人の葬場と定めのふ

迂都記 ふ〳〵ふ、本尊薬師架傳教大師の作、七佛薬師のその一とぞ、

王劉鏘詩云、昊天清旦高秋風発初凉

墓参 七月朔日より十五日ニ至り て、各祖考の墳墓ニ詣るこゝ唐山の人、清明の日上墳祭掃ふ同〳〵○源順家集ニ、七月十五日ゆんもさせて山寺ニまゐる所ニ多くのくめとれる蓮の葉をひろゝ露おく山ふ我ハきゝ多り是盆の墓参ニ

和漢文撰 前文一家之暑之一家ニ

参ふ杖ニもゝ髪の墓まゐりハ白髪ニ成るこゝろのかゝゝ多ゝ芭蕉評三云故翁伊賀の西麓庵ニて、例の文稿をあらくむるそ今思ふ白髪の亮祭ハ其日の感情ハ演ずるで発句ハ祭る姿にあらぬ、此故ニ参の字と以て歩行の様と形容せ〳〵ふ當李の詞も惜ふ〳〵ぬ、増て切字の入所ハ此等や有様躰と云て可なるこゝろのゝこゝ多ゝらふと下の句と云い次て、俳諧の歌ハ多ゝるべきもの

蓮の飯 いの部生身魂の条ニ註ス、

花燈籠 造て花とゆて美〳〵餝べし、

初鳥狩、初鷹 燈籠ハ多ゝるべし、貞徳曰ふ出の鷹とハ初めてつゝふと、初鷹ともゝ初鳥狩ゝゝといふ多り、鳥屋出の鷹ともゝ夏の羽のぬけかゝるを鳥

屋よりあて形の出てろひくるを盆の聖灵の箸とする○小鷹狩夜鳥屋より出るを小鷹狩箸鷹とも申とそ○の条をも見合もべし

鳩吹

鳩をとるとて手を合せて鳩の声のやうふきあらもろ八雲御抄

歌林良材 藻塩草 袖中抄 ホ説同し

炭俵集 名月や誰が吹おそる夜の鳩 酒堂

花火

和漢三才蒔会

燈ふ代ふぎきゆれ之又夏月河辺の遊興とす

御鑒 正花と持ち、

萩

和漢三才蒔会 天竺花ハ花史ニ云ふ如し 梅ぢるふ枝葉長く垂地と蔽ふ狀糸櫻ふ似て一挺三葉棗の葉ふ似て又南天燭の狹ふ似て尖らぬ柔軟之秋小花を着淡紫色俗専ら萩の字を用ふ奥州宮城野方二里ばかり萩生茂ばかり山萩あり白花の者あり白紫開分の者あり○或書ふ宮城野の萩ハ草ふあらず木萩なり号ぞふ作る木あり梢ふ青き枝生てその枝ふ花さくなり○ちくあ一の萩鹿鳴草古枝草糸萩小萩さゝ萩ホ其頭字の部ふわつちて註也

萩の錦

錦ふ

萩もざの花のあしきの露のたてぬき 法皇御製

萩殿

萩の戸

禁秘抄 萩の戸ハ常の御所ニ 六要抄 萩ふ限らず色〻秋の花ふ成ることを栽らる清涼殿の西の方貳間の前 五社百首註 菊戸萩戸同しと、

蓮の實とぶ

孫頃曰其葯秋ふ至て黑くして水ふ沈む石蓮子ともと○山谷詩倒載収蓮菊云ともも蓮のこの房中より抜出る穴を載と見立し、

初嵐

和漢三才蒔会 山の氣と嵐とハ醫書ふ山嵐不正の氣と云ふ是なり今初秋以後朝夕山より吹風を俗ニ嵐と名つく 連哥新式秘抄 初嵐ハ七月末より八月中ごろまでの風なり、

絡線虫

六月の内ふ至て鳴初て七月中ごろまで野叢の中昼盛ふ鳴く其声ギイ〻スとふ如し一二声の内ふチョンと舌打を俗是を蜀と云て小籠ふ入て市ふ賣て小兒の翫ともそ形自蟲蟲ふ似て大なり是をおろしギイ〻とふハ機織の音チョンを筬打音なり又ギスとも云ふ 續猿蓑

蟋蟀

夏の陰合ふ砂を造ふ蘇の中の絡線のこと沾圃

冬蟲

蟲冬蟲の屬長サ三四寸身ふ斑ぐ変て方なる首両頭ふ眼あり目の上ふ二ツの鬚あり翅灰赤色黑

點あり、腹の下白く善跳て捕へがたし、○今の俗これをそうこらふ、

櫨 和漢三才圖会 黄櫨以て黄色を染む天子の御袍黄櫨染と称せ是なり、帛を深て上ゝ色水と用ふ暑染ては黒茶色とあらず其葉小く浅青色、莖微赤し三月小白花を開き細子を結ぶ秋ふ至て紅葉す、[illegible]漆の類ふて葉柳の如くして滑く元山木、今世子と採て専ら蠟燭ふ作る、依て多く平原の地ふ植て利とす、

兼三秋物廿

日亥中月 廿日の亥の正刻ふ出る故ふ也、

簇芒 袖中抄 花芒 芒穂と同じひきまり或ハ万葉裏書ふ云こと薄ゝ穂う出て簇をさげるやうなる薄といふて、能因申しけるとぞ云、

花野 千草の花の野ふ咲ゝ乱てるを云ふ、野の花とふときハ花体とあらずして野ハ用さう、花野とふときハ野、体とあらて花用さう心得し、

芭蕉 大和本草 本草に濕草ふ載せ敷ふる地ふ植て茂易し、春兼を生じ、秋ふ至て上ゝ多根莖枯ぶ年々発生す、冬と蟄て大ゝく黄花と開く極めて稀ゝ東鑑ふ其花と優曇華といふ、

葉雞頭 雁来紅をいふ、かの部見る べし、

薑 和漢三才圖会 生薑 音姜、今俗多く姜字と用ふ、剝我の音ゝて未其題をもつて俗名抄 生薑 久礼乃波之加美 蜀椒 奈留波之加美 蔓椒 以多知波之加美 呉茱萸 加波波此等と以て考ふるふ、往昔波之加美といふ、ハ辛果の總名也、

蓮芋 美あり、或ハ呼て栗芋といふ、

蓮 美あり、或ハ呼て栗芋といふ、梅ぎるふ水中ふ種るれと蓮芋といひ、園圃ふ種るものを栗芋といふ、

彈 の条ふ出づ、

班龍 鹿の異名

鮒鉤 和漢三才圖会 彈塗魚 俗波世川の末海近き處ふ多くこれあり、常ふ水底ふ潛り、行ふ蝦と以て餌とす、綸の端鉤と去ること二三寸許の處ふ鉛の錘と著、鉤と地ふ附ゝ微動の響と候て卒と撮く、秋月黄熟以て遊魚の一ッとす、形色鯽ふ似て小く細鱗體暑滑ふして口濶く腮大ふ眼上ふ向く、班點微黑と無尾ふも又小班あり、虎彈魚 納彈魚 飛彈魚ホの類多し、

八月 **八朔** 田の實の節 懸の節供

特牛の節 紀事 九月朔日を吉日として相賀ぶ事中田面の節 華と同じ、今日殊に八朔と称し、又特牛の節と称し、又憑の節供とも、或は田實の節と称し、又田面の節と号し、中世農民稲の初穂を禁裏に献じ、鼓ふ田の實の節といふ、世ふ又其訓を借用て、憑の節供と称し、蓋君臣朋友相依て類の義ふ取、君臣朋友の間互に贈答の義あり、今日貴賤各白帷子を著し、互に憂と修ま、公事根源 八朔の風俗、後嵯峨院潛龍の時、外戚源の通方卿の亭に在〻ふ、近習の男女密に斯義を行しく、閑素を慰め奉る、後皇位に即るに、永禄嘉事に、

初月夜

或説に四日五日六日迄をいふ害ふるべし、○書藍日、仲秋の月をいふ、

初月と賞するは三五の月を待てのよりいふ、猿蓑集 栗柿とめてくふやこの初月夜 芭蕉、十五日の潮といふ、一説に初潮の初の字は葉月の潮といふ、

初潮

五雜組 海潮八月獨大なるは何ぞや、潮は月に應ずるもの故ふ、月望にして潮盛なり、八月の望尤盛、

御傘 伍子胥は死霊、八月十五日夜に風波をおこすと云、

箱崎祭

十九日 神社考 筑前國那珂郡、此社は譽田帝の祠なり、傳多く迂し、○祭る神三座、中は應仁天皇、東は神功皇后、西は菟道稚郎子、仲哀天皇三韓を討んと欲しまひ、神功皇后に託宣給ひ、軍旅を催すの時、天皇崩御あり、この時皇后懐妊臨月なりしかども、自ら男子の貌とをり、弓鷲斧鉞をとり、呪して曰、請征伐の後降誕ありと、三韓をくだし平定し、筑紫に帰りてあり、その男子降誕ありしかば、應神天皇是なり、その地を呼て字弥邑といふ、胞衣を筥に籠めて地に埋み、松を栽て標ふ、その地を呼て箱崎と云ふ、醍醐天皇延喜廿一年六月廿一日、託宣によりて宮を筥崎の松原に建らる、例祭八月十五日、○古老傳へていふ、昔この松原に戒定慧三字の簀を埋む、故に箱崎と号す、松とその所に植て標ふ、その松猶在とぞ、緑起 昔白幡四流、赤幡四流、虚空より降其所に松を栽て標ふ、故に八幡の号あり、諸説送ふ異あり、

花畠

貞享式 御傘に正花あり、春細に穿鑿すれば種々の理

殊にあまたあるの分ちて置方がよきことあり、如何なる秘
事にやあらむ、今按ずるに花壇も花畑も、尖りて秋に定
むべきなり○花曽 初花初櫻といふに同
八草花なるべし、初紅葉 し新拾遺にあり山
木々の梢のまつゆかしげさこの
ちぐさにのあがげておもひする 宗良親王

薄荷 和漢三才図会 薄荷、菝蔄、蕃荷菜ホの諸名あり、本綱曰二月宿根より苗を生ず、
清明の前後に分つ、方なる茎赤き色、其葉對生す、初
時形長くして頭円し、長ずるに及て尖る、其茎葉莖
似て尖りて長し、冬を經て根枯れず、接ずるにおほく山城より出

花紫 花彙 大和地方多く蒔、春種と下す、長じて
苗の高さ一尺以来、葉ハ謝落金の葉に類し
てふあり、又俗にいふ琉璃草に似たり、差互して生ず、三月
花を開く、梢の葉の間にあり、形状円く瓣五出にして内
に蕋鬚あり、又瑠璃草の花に異なることなし、ふくろその
色白し、又粉紅及ひ黄色のもれあり、下に長甘男ありて
ことごとく実を結ぶ、その形円く尖りて、椽に類して
大なり、秋に至て熟して黄白色なり○按ずるに御傘
にの俳書に花紫と秋とし、若紫と春とせし、然るに本草花
彙ホの説、三月花を開くとあり、紫草と種て試る人あり
て曰、此草秋種るものハ春花を開き、春種るものハ秋花さ
くといへり、御傘に花秋なりとせるも亦據なきにあらず、
○絹帛を紫に
染る者此草なり、

花芒 かの部穂芒の条に出せり、

濱木綿の花

大和本草 和品 濱木綿、万年青に似たり、俗濱おもとといふ、
海辺に生ず、七八月白花をひらく、茎高くして只梢に
数花あつまりひらく、巻丹の花の形に似たり、好花なり
あつまり李秋実を結ぶ、花咲る跡に数顆ならびて一顆の
大さ胡桃の如し、内に核あり白肉あり、中略 馬信曰今按ずるに
西土にもあり、濱芭蕉といふ、紀州熊野に多し、甚だ雪寒
を畏る、宅中に植ては冬月藁にて厚く包む、或ハこれを以
てかわにへし、あらせさるハ枯る、盆に植て屋下の暖き処
におくべし、海濱にありては潮風温かにして雪早く消ゆ故
にもかずか、二種あり、一種ハ葉柔く薄く、其茎の皮多く重
なり、そとまきしあるべし、一種ハ葉つよくあつ

万葉 三熊野乃浦乃濱木綿百

ホ不相鴨人丸 滑稽雜談 此者
ことのへども古奇ふ多くあり、花を
以て李 和漢三才圖会 鼠茸ふ似て繊あり、
ふ用ふ、

針蕈

長さ二寸ばかり、灰白色平地ふ叢生

初茸 同上 浅山松樹の陰處ふ生ず、狀松茸ふ似て
小く、初生より傘ありて、内ふ細き刻あり、内外
赤黄色、立秋の初ふ出づ、柔ふして味
甘く、諸茸より先ふ出つ、故ふ初茸と称ず、

白雁 白雁、全体白くして、
翅翮黑く、觜と脚と赤色、其肉脂少し、凡中秋白雁先
来て雁金ことふ次真雁又ことふ次て遅し、春ハ真雁
先て歸り白雁ことふ次ぐ、

初鰍 和漢三才圖会 鮭ハ鯉の本字、
魚臭あり、正字未詳、狀鱒ふ
似て円く、肥太さ一の二三尺、細鱗青質赤章腹淡
白く肉赤く細刺あり、脂多く味厚美、頭の枕骨軟
ふして瑪瑙の如し、氷頭と称ず、味亦佳し 天和本草 本
邦東北州の大河ふ多し、南州ふいことまれ、和名抄曰鮭
和名佐介、俗鮭字、

鮞 鮭の子、 同上 其子二胞あり胞
と用ふ非なり、中數千粒明透上ふ一紅點あり、
鮞ともふ、又筋子
甘子と云ふあり、

放鳥 鳥の部ハ幡
祭の条ふ詳、

九月海廻 紀事 この月九日、小兒小石を以て海螺の殼
を穿ち、鉛を鎔して殼の内へ入れ、或ハ洲濱飴
と殼の内へ充て、其力を助け、各緒を以て海螺を繩
ひ、勢ふ乗して臺中ふ投入れ、運轉せしむ、その力つ
きもかハ其力弱きものを盆外ふ出せ、互ふ勝負を爭
ふ、これを海螺擊と云ふ、席の両端を巻てこれを盆と
いふ、 和漢三才圖会 いづれの時より始ることを知ず、田
夫野人の玩ぶ所なり、海螺の殼を用て、頭の尖ること
き平げ尻の尖りと摩て凹め、糸繩を巻て引てこれ
と席盆の中ふ舞ふ、二三の螺を以て勝負をなす、出
さるる者と負とをその先ふ入るものを甲加、この入ざ後ふ
入るものを乃字と云ふ、打合て同く出ることなれば、
張と云ふ、張のときハ伊加と勝とをなす、

婆利女祭 凡熊野より出づる海螺、厚く堅し、
廿日〇婆利女の社ハ洛陽高辻の北室町の西ふあ
て祭ル
りしを中ごろより九月廿日とす、

才天あり針才女と繁昌と、和詰相迫し依て諺傳ふ
あり、宇治拾遺むっし出雲の前司こゝ人のむすめ此
所ゆそうせうりふ葬とゝめとゝ鳥部山ふ見し行
くまぐそ、その死骸ゆとの所ふつゝ後ハさらく動ゝ返ぐく
もあらそせんこゝあくて此所ふとゝめ侍つゝふその塚の
ゆとゝ六七間むど八人も住つゝで荒地ゆそ有りゝ後ふ
何人やらん社と建つゝ侍て故有て辯才天と祭れ
篁蓋内傳牛頭天王娑竭羅龍王の三女と娶つゝ
その名と婆利女といゝ○安藝嚴島の弁才天女婆竭
羅龍王の才三女ゆるゝ　いひつゝふその弟ハ婆利女を
弁天といゝるもまゝ故ゆ死ふ[illegible]ゝ○大閣秀吉ゝの
社と東山佐女牛の八幡宮の傍ふつゝ且ゝ其ゝ
出つゝそゝふゝくゝふゝもゝの所ふ安置そゝ

花の弟

異名多類　花の才とゝふハかろく　の花ふ
おくゝとて咲ゆゝふとゝ　夫木ゆゝ草の
ゝゝゆゝくゝとゝふゝとゝ八重

榛

時珍曰榛樹低く
小ふゝて荆のゝ、
くゝゆゝゝみゆゝゝゝ菊、顕昭

生ゝ冬の末花とひらく、榛の花の如し、條ゝとゝし下ふ
垂る長さ二三寸、二月葉と生ゝ、初生ハ櫻桃の葉ゝゝゝし、
皺文多くありて、細き歯及ひ尖ゝあり、其實苞ゝゝ子、
三五相粘一の苞ふ一ツ實々ゝゝて榛の實の如し、下壯
ふ上鋭し、生ハ青く熟ゝれゝば褐ゝ其殼厚くして堅く、
其仁白ゝて圓く大さ杏仁のゝゝし、亦皮ふ尖ゝ[illegible]ゝ、
然ゝゝども空ゝゝゝもの多ゝし故ふ諺ふ十榛九空○その
葉ゝ[illegible]ゝ皺む、依て和訓ハしバミあり、実と以て秋季
と

柞

くゝゝゝ山木ゝゝ高き者二三丈葉ハ柏ふ
も、似て秋紅葉ゝ冬ゝ落つ城州柞の森名所ゝ、
耳奈良の西南ふ祝園といふ所あり、城州の内ゝ元柞
園ゝ後祝の字ふ改む祝園の神社春日大明神之此神の
森皆柞の木ゝて秋甚ゝ紅
葉ゝ他邦ゝゝ稀ゝゝ木ゝ、

番綿、番船

祺州　大坂
ふあり、江戸へ積出ゝ綿ゝゝ迴船ふ一番二番三番
ゝりて江戸へ着岸の遲速と以て損益と定む、商賣專
ら勝負を事ふ、

初鴨

貞享式　此名ハ全く新撰ゝ、或ゝ
賞翫ゝゝ加減ゝゝゝゝ今按ゝゝふ

秦勝式ゝと雁鴨と並あげら、賞する処ハ秋冬の差別あり、こゝ迄でも見聞の次第情と論ぜず、初雁とゝハ風雅と思ひ、初鴨といへハ凡味と思ふ愛と天眼とも天耳ともいへども、譬バ初雁と音ふ喚とも風味を充ふ思ふべき也、鴨の冬なるハ勿論ゆく初の字をこゝ〳〵秋とあまたあらん、

七月

庭の立琴

江次第 乞巧奠ふ御所うり筆一張を申正東北西北の机上の妻ふ置く、註ふ延喜十五年の例和琴と用ふ裏書ふ云柱と立るふ三様あり、常ふ半呂半律と用ふ秋の調子あり、公事根源頭書半呂半律とハ、樂書ふ云黄鐘調大食調ハ律呂の調〻半律の調也、

夫木 ゆふべとのあふ夜の庭ふ琴のあうふ引ハさくふの糸寂蓮

新綿

藻塩草ふ十六日あり、内裏の貢の綿あり〇俳諧ふ八貢ものぎらさるバ作者ちろうゑ〳〵、

二百十日

正月の節立春の初日あり、そへて二百十日とゝハ、此ろう秋の最中ふて、金氣殺伐の氣豪動する時〻故ふ必風雨あり、此時節中稲の花とそこあらんこと、農民恐る、續猿蓑 公親卿草二百十日の悲字 蕎麦

廿六夜待

江戸の俗今月廿六日の夜月の出ふ三尊佛の影向と拜むとて、高輪ふ群集も、此夜蔭芝居手踊或ハ音曲八人藝、うつし繪等と仕組者あり、是と一夜藝者とゝハ酒樓ふ月と待遊客是と招て與とて、又出賣菓餡餅いろ〳〵の商人来て賑へり、土人幇間虎八云、土人廿六夜祭と称ス其由来と尋るふ審ふまでむり〳〵近村の民此處ふ来て海岸ふ生さる菰と苅取圓座こゝて月のいでると待〻とゝ、今聖天棚ふ敷さる菰と敷物ふ賣ハその名殘なるべ〻と云云此外田安の臺、湯島の社地、群集をなゝ、高輪の賑ひふ及ども、

兼三秋物

似柳

御所柳ふ似て肥満扇あらぬ味大ふ劣ると、

八月

庭たゝき

鶺鴒部 鶺鴒こせの

濁酒

醪ハ汁滓の酒なり、

和名毛呂美今俗濁酒といへ、

九月

鬼箭

良安云衛弟和名久曽末由美

其業秋ふ至て無業す、面色丹の如くして青赤相
襍錦の如し、故ふ俗錦木と云ふ、子と結ぶ一顆ふし
て炎て小正りして紅あり、信州野州の山谷ふあり、

七月

星合、星の契大

齋諧記 天の河の東ふ織女あり、乃天帝の子獨居て憐て、將ふ嫁せんとして、河西の牽牛と夫ふ與ふ嫁して後竟ふ女工を廢て、天帝怒て責て河東ふ歸らしめ、惟一年ふ一會せしむ、

星祭、星の手向

周處風土記 七月七日の夜庭を洒掃して、露ふ几筵を施し、酒脯時の果を設く、香粉を河鼓織女ふ散し、云々、注云二星辰会をるふ當て、夜を守る者皆私願を懷く、或云天漢の中を見るふ奕奕たる白氣あり、光曜五色あり、此をもつて徵應とす、見る者拜して願ふ富を乞ひ、壽を乞ひ、子多きを乞ふ、唯一を乞ふを得、兼求ることを得むと、三年ふして是を試ふ、頗る其祚を受る者あり、○牽牛、犬飼星織女祭、河鼓秋さり姫薫姫さらふ姫、百子姫、糸織姫、朝顔姫、梶の葉姫、ともし妻、梶の葉、天の川、秋去衣、石枕、九枝燈、庭の立琴、紅葉の帳、火取香、願の糸、衣裳と曝す、芋の葉の露、素餅、銀河、銀漢、雲漢、烏鵲の橋、紅葉の橋、年の渡、二星の屋形、乞巧奠、乞巧針、乞巧瓜、七箇の池、百箇の池、妻迎舟、妻まし舟、七種の舟、以上各頭字の部ふ載て詳ふ、

星のかし物

いの部衣裳と曝す といへる条ふ注そ、

星合の濱

増山の井 伊勢ふあり、星の逢ふ所なり、

本願寺の籠花

七日 昨六日 紀事

の晩、東西の本願寺末流並家礼、花數種と以て船の状と作り、又槽の形と作り、中ふ草花數品と建て、御門主ふ献ぜらるる、壹上ふ載つべ、

盆市

草市 荷の葉賣 麻から賣 盆太鼓賣

紀事 凡七月街市ふ太鼓團鼓、大小、加伊羅木、三尺半拭、寄特頭巾、作鬚、金銀箔の紋所ふと賣、是盆踊必用の具、又盆前截子燈籠、蓮臺燈籠、金灯籠、草挑灯、ふ行灯と賣、是皆中元の夜点をる所、又索麺、素

乾瓢茄子角小豆空閑梨木酥材鼠尾草荷の葉麻とら大小の土器供饗膳破子うんあうけホと賣是民間聖是会

穂屋 みの部御狩山祭の條ふ出づ

鳳仙花 時珍曰其花ふの處用ゝ頭翅尾足具まり翹然うして鳳の形の如ゝ故ふ名く

二月子と下し五月再ひ植べし苗の高さ二三尺莖ふ紅白の二色あり大指のごゝ中空ふして脆し葉長くして尖ゝ桃柳の葉ふ似て鋸齒あゝ椏の間ふ花とひらく或ハ雜色赤麦易も狀飛禽の如ゝ夏の初より秋の尽まで開謝相続て実を結ぶ

木瓜の子 時珍曰其實小瓜の如くして皮あり津潤ふ味不木ふ

ゝのもこ木瓜ともこ皮ハ乃チ花の落ゝ處臍蔕ふあらず

木瓜灰ふ燒て池中ふ散す以て魚ふ毒をべし

和漢三才圖会 世ふ木瓜と称ものめ本草の註ふ合ず是木桃ニて木瓜ふあらず武州江州より多くこれを出す

藥肆以木瓜ふ充ル近頃唐木瓜とゝふ者あり人其花を愛も是真の木瓜あり

穂掛 藻塩草 田舍の稲のとり初め新らき藁のすりぬとゝふものを穂と組合せ門ふかゝと倉ふも掛て神ふ奉るを

灯 和漢三才圖会 酸漿酒 五月小花を開く純白黄も赤白色ふして蔕ハ青ゝ宿根より自ら出る小兒中ふ白子と鑿去空殼ゝて舌上ふ含て戲ふ

兼三秋物鬼 ふ

音あり○今の世ふ夕の童のわらづと吹てふ 采花物語

初花の巻寛弘五年の所ふ御色白くうるはしう

あゞと吹くらあて 源氏物語 野分の巻

いふめる中ふふくらうふて

いとふるこ事ふ

南瓜 時珍曰南瓜の種南蛮より出ず三月種を下し沙汰の地ふ耳し四月苗を生ず蔓と引て甚ず繁し一蔓十余丈迤邐く節ゝふ根ふり地ふ近ず即着其莖中空其葉の狀蜀葵の如く大ず荷の葉の如し八九月黄花とひらく瓜と結ふ正圓ゝて大さ西瓜の如し皮の上ふ稜あり甜瓜の如し一本ふ數十顆と結ぶべし其色或ハ緑或ハ黄或ハ紅あり霜を經て收む暖處ふ置けハ留て春ふ至るべし○一種 南京瓜 一名東埔寨 一名唐茄子 本草南瓜の下ふ所謂陰瓜

是螺芋形螺ふ似て大
く、螺芋し故ふ名つく、**ほど鶴**志の部鳴の条ふ出ル、**星**

月夜　[つくよ世ヒ]闇ふ星の多くて明るき夜といふ、
あり只秋季あり、[東花式]古抄ハ星月夜の名と
あげて只秋ありとぞ云捨て月ふ去嫌の論あるまでも、
是ハ秋ゆて月ふあるゆゑ、発句勝才三ゃぞふ此名目ある
ときハ其三句ハ素秋ゆゑ、七句目の月の座ふ他の季
ふて異名ときべしこれらハ例の好ありしごとこもぞこハ故
翁芭蕉の遺訓なり

八月

譽田祭　十五日　河内國長野山護國寺地蔵院
の縁起ニ云当社ハ八皇十六代應神天皇の御陵ふ入
母后神功皇后の御胎内ふ宿りゝて三韓征伐の後、
筑前の國ふ於て降誕御腕ふ鞆の形あゝ故ふ譽田別
の皇子と号し奉る是弓矢の家と守ゝ神ふ坐ことゝ、
此時ふ頭ふてゝ治世四十一年仙齢百十一歳の春、大和
国豊浦の宮ふ崩ぜ、玉躰と瑪瑙の棺ふ納め、河内
国藻伏の岡ふ葬り奉る、三十代欽明天皇の勅ふよ
りて宝殿と營ミ三所の神明と祀る、所謂中殿ハ八幡
大菩薩、左ハ仲哀天皇、右ハ神功皇后ゝ世ふ神祠多し
とゝ雖ゝ当社ハ王躰と納め奉るの霊廟ゆゑ八幡
宮の根源威験深きことゝもるべし、元〇神祭八月十五日
ゝ、先ッ十四日の夜奥の院の御廟前本堂ハ鳳輦と行幸
ふ、翌十五日午の刻還幸舞樂あり、四月八日若宮祭
申桑兒舞隔年ふ行ふ放生会ハ当社ふ行ふ
よし、但社説の趣と記、**放生會**　やの部八幡の条ふ出ル、**菩薩祭**　廿二日
肥前國長崎ふ於て来舶人船神と祭る、八月廿二日これ
を[ほうさまつり]といふ[和漢三才画会]舟の神と媽祖娘々
といふ俗ことと舟菩薩といふ、唐船長崎ふ来て往々祭
る所の神是なり、船中の品物と水揚
して四ヶ寺あり、福州ハ石灰町崇福寺漳州ハ下筑後
町福済寺南京ハ寺町奥福寺、この三ヶ寺昔ハ唐僧
住ゝ今ハ看主持ゝ外ふ目付寺ゝて筑後町ふ聖福寺と
いふあり、昔より和僧持あり、ぼさ祭の日ハ和僧も唐僧
東ゝ法事修行あり、本尊ハ観音なり、此日来舶人を
その寺院ハ恭詣ゝ其異体とゝんゝて諸人群集ゝて

い、四箇寺ニ花芒 芒の穂と尾花といふ、穂とふくらむる形獣の尾
ふ黄蘂流ふ、尾花 穂

ふ似こう、故ふ名く

牡丹の根分

和漢三才圖会 夏月川の辺と採晒し

まと花芒しもの、乾し、古き畑の土と細き沙と以上三品等和八九月紅き芽と出ると移し栽べ一ことと培ふふ糞溺と用ふへ、しぶ冬月油渣と用ひて少し根の傍ふ入ふ、或ハ鮮魚の洗ひ汁と灌ぐも亦佳ふく

頬赤鳥

正字未詳 和漢三才圖会 状雀より小く背の色も赤雀のごし、其頬赤く眄白くして嶋鶉の文あり、声青鶯ふ似て細く高し、

畫眉鳥

同上 俗頬白鳥 状ち鶯より大く、常ふ蒿間ふ棲む、灰赤色眉白く畫くが如し、頬赤白くして間黒し、背上ふ黒点あり、翅尾畧黒く、尾の両端ふ白もあり、腹微赤黄色臆下ふ赤き斑あり、其足赤黒く其声四滑みして多く囀る、小鈴の音ある者其声と謂て行鈴諸鈴の名あり、

九月

星見草

菊の異名あり 藏王庭りせふさくてふ

異名ふ星ふ見せてよむふ 古今 ひさかたの雲の鵲上ア うくゝ色ヒ 人家の庭根ふ自うゝふてゝる菊ハわまつ ほろし ほゝしとぞいやまくれる、

鬼目

然ふと生ぜ蔓草ゝ葉朝顔ふ似て小白花と開き秋実と結ぶ秋季ゝとゝるもれハ其実と賞して、暮秋その実甚ぶ紅ゝ鶏好んてこれと啄む依て名ふ、

○時珍曰 白英ハ其花とゝひ鬼目ハ其子の形象

菩提子

校量類珠功德經 諸陀羅尼及び仏名と念誦ふ

とあり、木患子ハ千倍あり、浄土ふ生ぜんことを求めゝ、山珠と受よ、水精ハ百万倍あり、菩提子ハ無量倍ゝ

うくゝせヒ 昔洛東建仁寺の千光国師宋ふ入此種と得て帰朝し、筑前の香椎報恩寺ふ植つ、傳ふゝ云ふ、後其種と京師の寺々ふ傳ふことと植、泉涌寺六角堂叡山の西塔ふみあり、宇治の興聖寺ふ子ことと見る、一樹ふ葉二色あり、一ッの葉ハ標ふ似て厚く大く、又一ッの葉ハ木犀ふ似て、其葉ふ莖あり、莖より嫩き細枝と出しそこふ花さき実と結ぶ、

其実淡黒堅硬して念珠とも成す氣芬芬たり、興聖寺の僧曰、是経に説る菩提樹なり、天竺此樹下に於て佛成道正覚したまへり、樹の高さ一杜ばかり、枝極のふり百日紅に似て甚だ奇樹なり

鵑草

大和本草 和品 葉は紫草に似て短く小さく筋多し、又篠の葉に似たり、春は筆の如し花秋開く六出あり、中より蕊出て又花の形とあざやかなり、蕊ごとに小紫の點ありて、杜鵑の羽の形に似たり、ちぢり染のごとく、莖の高さ一二尺ばかりなり、

兼三秋物

辨慶草

和漢三才畜会 景天和名以岐久佐俗に云ふ、辨慶草本綱に景天極めて種多し、枝を折て土中にさしぬれば生ずるなり、二月苗を生ず、晩き莖微赤黄色を帯び、高さ一二尺、もとを折れば汁あり、葉淡緑色にして光沢あり、柔に厚く狀長き匙の頭及び胡豆の葉に似て尖らず、夏に白花を開き実を結ぶ、連翹のごとくにして小く、中に黒子あり、粟粒の如し、人皆盆に盛て屋上に養ふといふ火を辟べし、故に慎火草の名あり、按ずるに景天佛甲草に似て大なり、こゝを折取て磨間に飼ふに懸多ふ出て經て凋まざる後地に栽るに亦活す、馬歯莧に勝れり、蓋辨慶は源の義經の家臣にして、女童相傳へて强勢の士なりと、故に相比してこれを名づく、以岐久佐も亦活の字訓なり、

布瓜

時珍曰、六七月黄花を開く、五出微胡瓜の花に似たり、蔕辨具に黄あり、其瓜大さすべく、長さ一二尺、甚しきは三四尺、深緑色、皺の點あり、瓜頭鼈の首の如し、嫩なる時皮と共に去る、蔬に充て老るときは大さ杵のごとし、

八月

紅蕈

和漢三才畜会 陰處に生ず、其皺紅色裏白く細き刻有て毒あり、

蛇蕈

大毒あり、故に人近あらず、

蛇

穴に入

月令 仲秋、月雷始収声、蟄虫穴を〇和俗春の彼岸に出、秋の彼岸に入といふ、

七月

とゝ〜妻

あゝこゝの稀なるとゝき妻、故に織女年に一度まれにあゝとゝとゝ妻とよゝとする哥あり、くゝと

増山の井

序

環】をべて活法の書に、織女の異名のやうに
出せるハもろしからむど織女のわたりハ有べし、

年比渡

織女の年に一度天の川を渡る意なり、【万葉】玉葛不絶物可良佐宿者年之渡尓直一夜耳、

燈籠

【一切経音義】燈籠又爈に作る、火の居所也、凡火を盛の器を爈といふ【紀事】凡中元燈籠を用ゆること、寛喜前後に起て、今に至て相續て故事となる【定家卿明月記】近年民間に長竿を建て、その末梢に燈籠を設け、紙を貼し灯を挙て遠近これあるを見る、流星に似たり、【五雑俎】宋の初に中元下元皆燈を張ること上元の例の如し、太宗淳和年中始てこれをやむ、○本邦の俗、中元の夜家々燈を張て廿四日乃至晦日に至る或ハ朔日より三十日に至るもあり、又白き提灯を出せるもあり、○高燈籠、掛燈籠、花燈籠、禁裡御燈籠、キリコ燈籠、以上各頭字の部にいだして詳也、舟燈籠、影燈籠、鉾燈籠、揚燈籠、【増山の井】にいでたり、其形容未考、

燈籠踊

【紀事】洛北岩倉、花園、両村少年の女子、各大灯籠を戴き、八幡の社前に聚りて、男子大鼓を撃笛を吹踊をなさしむ、是を灯籠踊といふ、頭上に戴く所の灯籠踊る女子の家々、春の初よりこれを作て、互に其作る所の模様を秘すと云

鳥居の火

せゐ部施火焼の条に詳

鳥屋勝

鷹新毛を生じ羽翼全く備りて鳥屋と出るの時、逸勢特に殊なるべし、これを鳥屋勝といふ、○去年よりハとやまさりまさる片かへり狩ゆくすゑの秋ぞこひしき、定家

蜻蛉

秋津虫　あきつむし　ヤンマ

【桑華紀年】神武天皇高きに登て、此邦の形蜻蛉に似たるを以て、秋津州と名づく、【和名抄】蜻蛉　和名加介呂布　【和訓栞】かげろふのあるかなきかといへるハ蜻蛉といふ中略　水辺の木葉にすまてその飛貌数々と水に点じ、閃々と電のごとくなれバ、陽炎に比していへるなり、【和漢三才図会】蜻蛉ハ總名なり、大也て青色なる者紺蟹、一名天雞、大にして玄紺なる者胡黎一名江雞、小にして黄なる者馬大頭、最大にして身緑色、赤卒ハ小にして赤きものなり、

富草の花

【風俗哥】おらくさふおちるとみくさの

もふてふつゝ入てゝゝと（まる）らん、云ハ稲の花といふしゝ、頼桐 天和本草 俗名唐桐 といふ高サ二三尺ふすぎゞ、夏紅花とひらく、花繁多ゆゑて盛り久し、美ふして愛ゝ可し、苘麻 已 ぐ

ゝゝ 和名唐荏又ゝらぐゝハ、葉ハ大麻の如し、甚ゞ大ふり、夏冬の間花穂と抽て色黄ゝ、高さ丈余ゝ及ぶ、實ふり大毒ふりとぞ、

兼三秋物 番椒 天井守 和漢三才圖会

番ハ南蠻の義ふり、俗ふ云南蠻胡椒、今唐芥子、二月種と下し、美柳の如くふして小、亦胡椒の木の葉ふ似て和く五月ふ白花とひらき、実と結ふ、數品大小長短尖りくるし四きとの種ふり、初め青く熟ゝれハ紅ふ、秀吉公朝鮮と伐ゝき、彼國ふり渡る故ふ俗又高麗胡椒いふ、○天井守、番椒の一種、とぐゝ上とむく故ふ名くとぞ、

猿蓑 附 てんぐさう

まゝりいろゝ色つく葉

唐の芋

芋と連禅紫芋といふ、蘇恭曰毒少し、煮て食ふべし、時珍曰連禅芋魁大ゝて子少し、○堊紫色と帯ゞ味美く栗のごし、

烏芋

部宗山子の条ニ出ず

八月

富賀岡八幡祭 十五日 名所記江戸

戸城南深川ふあり、祭る所鶴ヶ岡ふ同じといふ別當大栄山永代寺 台宗 深川才一の大社ゝ或ハいふ神体ハ菅公の作ふり、源三位頼政深くゝゝと崇む、其後千葉家ふ移ゝ、足利高氏ふ傳ゝ、基氏持氏ふ至り、後上杉ふ傳ゝて、太田道灌ふくくゝゝと信仰ゝ、横石集寛永元年、長感法印夢のゝゝありて、永代島ふ宮居を建立し、同八年成就ゝ、○深川の土人本居神ゝ祭礼八月十五日放生会ふ、二三十年ふ一度ゝ祭ゝ行ふ、

豊浦祭 神社啓蒙 長門國豊浦郡亀山ふ祭る神、中ハ應神天皇、左ハ神功皇后、右ハ仲哀天皇ふり、三十一社註式 人皇五十六代清和天皇貞觀元年、男山ふ遷座の時行教和尚行宮を造ゝこれを勸請ゝ、後土御門院文明年中建立ゝ、○今八月祭ゝ、三月十四十五日の両日亀山祭ふり、ゝゝと先帝祭といふ、安德天皇の御祭礼ふゝ、阿弥陀寺ふ御陵ふり、海辺ふ宮ふり、この祭前後四日の間鳥飛ゝと得ゝ、又平

家蟹赤間ぶ関の海辺ふ上る、常ハこのごとくなれ是先帝の御祈月こと里民いへり、又九月十四日十五日、八幡春日両社と祭る、國主より馬二疋と牽き競馬あり、是ハ幡祭也、

烏頭 燕須曰附子其苗高さ三四尺、莖四稜と作、葉艾ふ似て其花紫碧色、穂と作す、其實細小糸櫑の如し、黒色本附子、一物と種成熟をるふ至て四物あり、天雄烏頭側子附子是こ

黄蜀葵 時珍曰二月種ゑ下し、或ハ宿き子土ふかりて生ぜ夏ふ至て始て長ぜ、葉の大さ蕁麻の葉の如し、深緑色、岐子と開く五の尖てあり人の爪形の如し、旁ふ小き尖あり六月花と開く大さ椀の如し、鵝黄色、紫心六瓣ふして側てり且ふ開き午ふ収ぶ暮ふ落、亦呼て側金銭花とす、其莖長きもの六七尺、皮と剥ぐ繩索とをもべし、

木賊刈 南錫日本賊苗の長さ尺ばかり、義生ぜ根毎ふ一幹花も葉もあり、すべふ節あり色青くして冬と変て凋ぜ、四月こまと採、○時珍曰木骨と治る者、是と用て磋擦をハ光浄あり、木の賊とのふが如し、

和漢三才畜会物と磋と砥の如し故ふ砥草と称、○本邦秋月こを採る、

胡黄連 十振和漢三才畜会苗の高さ五六寸、一根ふ数莖其莖細くして淡紫色、葉地曹草ふ似て小く、七月花とひらく桔梗の花ふ似て小く黄色、○千振 大和本草 胡黄連ハ黄連ふ似て大こ黄ふらぎ味苦し此草日本ふかりや未詳、千振とて秋白花とひらき、葉細ふ味甚ぎ苦き小草山野ふあり、たうやくこといふ、

酸醨酥 大和本草 酸醨花の條下ふ云本邦のハ白花千葉菊の如し、依て筑紫ふて菊ぐらとのふ中花ふ黄色ある者ありと農政全書ふ記せり、故ふ黄色の酥と酸醨酥とのふ、

唐黍 江戸の俗あわとのふ 春の日 待意こぬ殿と唐黍このしらうこん 荷分

九月 杼の

實 燕須曰三四月花をひらく黄色栗の花ふ似 ろくがつ 山木あて大木あり葉の大さ七八寸、実ハ栗より少く大こ餅ふ作て麩として、山羊の食ふ、木ハ斑文あて、諸の器ふつくり箱とも甚美実、

木曾の山中ふ多し、是と麪とをまるふ、其粉と熱湯をこ弥調へ温飽のごゝ棒ふ捲て温ある内ふ急ふこを伸て、冷まハ堅く縮つて伸ぎ、其手廻ハ甚急ある故ふ、俗諺ふ掾麪棒ふるといふハ是こなり、

罌子

桐實

大和本草 荏桐とも油桐とも云、ダモと訓ぜるハ非なり、桐ふ似たり、其實大毒あり、食ふべからず、實ふ油多し、民用とたもく、此油とぬりて青漆の如くもる法あり、○時珍曰罌子桐の實を荏桐と名く、罌子ハ實の狀罌ふ似たるふ因てなり、荏ハ其油荏の油ふ似たるゝ、和漢三才圖会 濃州江州多くこれを種、油ゝ搾りこれを販る其功荏の油ふ同じ、煉成て漆ふ代ふ、桐油漆と名く、五色とぬるべし、常の漆ハ白色を塗ると、あとそぎて又松脂とくもへ、船槽と塗るふ水を漏さぬこと、チヤンといふ○羊浪草ふ桐油、ダモ、同物とのゝるハ、ろし

唐柳

いの部ふ見ゆ

團栗

くろくぬぎ 擬

ドングリハ櫟の一種小楢といふ木の實ふ、椎ふ似て大あり、味淡く食ふべし、楢の形狀ふの部ふ見ゆ

七月中元

十五日 修行記 七月中元ハ大慶の月、道書ふ云、七月中元の日、地官下ふ降りて人間の善悪を定む、諸大聖普く宮中ふ詣、道士その日夜ふ於て經を誦し、万の大聖ふ奏し、天篇を録し、餓鬼囚徒とゆふ解脱を得せしむ、五雜組 道經ふ正月望を以て上元、七月望を中元、十月望を下元とす、遂ふ三元三官大帝の称あり、是俗妄の甚しきなり、

地藏祭

日本紀事 洛外六所の地藏詣あり、加茂御泥り池、山科、伏見、鳥羽、崔太祭、九一日六所の行程十四里、文德天皇仁壽三年、小野篁地藏の像六体を造て、木幡の法雲山大善寺ふ安置せ、故ふこの所を六地藏村といふ、その後保元二年平清盛、六ヶ所ふ堂を造て、こゝことわりを置く、七月廿四日供養西光法師これを奥て行ふ、今ふ至りて七月廿四日諸人六所ふ詣てこれを地藏祭といふ、洛下の兒童の又各香花を街衢の石地藏ふ供してこれを祭る、又今日六齋念佛の徒も又六所の堂ふ詣て、大鼓を擊鉦を鳴し、以て踊念佛をなす、俗これを六斎太鼓と

称を、洛東光福寺千葉の寺し、ふく風やさむからんかくれ[風]ぬいかこよるる声のぬ、

ちろ〳〵虫 きろ〳〵もの異名[異名分類] ちろうむし夜

兼三秋物 芽 ちろ[大和]

本草 白茅、本艸ふ蘇頌ガ云春芽を生ぜ、針のごし、俗ふこゝと茅針といひ小児好て食ふ毒ふ〳〵、血を破て、血を止む是之、

九月

重陽

潛確類書 重陽、魏ノ文帝の鍾繇ふ與る書ふ歳往き月来て忽ち復九月九日、九と陽數ふて日月並び應ぜ故ふ重陽といふ俗其名を喜〳〵て長久ふて宜〳〵んず、故ふ宴して高会ふ享を、

重陽宴

公事根源 九月九日ハ節日ふて侍ま〻菊の宴行ハるゝこゝ〻と重陽の宴と申、九月九日ハ月と日と九陽の數ふ叶ふがゆゑふ重陽といふなり、むかしハ天子南殿ふ出御ありて、節会行はるゝ上達部、御子達あり始て、其道のいられ探韻給り、文つくり文臺ふむて講ぜらる、十月の旬のゝふあゝ〻ぜけるも永魚さまふ例あり、又羣臣ふ菊酒を賜はる大〳〵ハ五日の節会ふおなじ〻、御帳の左右ふ茱萸の袋をとりけ、御前ふ菊瓶をあゝ又茱萸の房を折て頭ふ挿めゞ、惡氣をさるといふ本文あり下畧

千代見草 ちよみくさ

菊の異名あり、慈童八百余歳の後出て彭祖と名を替へて、長壽の術を魏の文帝ふ傳へ奉て、文帝百歳の壽と成るあつり、和歌ふも菊ふ千とせの秋を詠ぜるを珍しくゝぞ此意ちぎりぐさ

契草 菊花の異名こ[藏王]陸奥國ふ兄弟あるもの世ふあて名付侍るふ、

ゝ〻ぶて、弟ハ筑紫へ行るりとゞへふ名残を惜こ別れるるき、兄庭前の菊と、一本を二つふ〻けつ、意〳〵えとりハとゞひふ此きくをとてあぐるむ〻〳〵いかゝ、弟筑紫へかちつく下向して此きくをとるるり、この菊二ふ分しまくふかゞ枝ぞるゝ花咲々るこなん、

の調 索隱曰按ぞるふ律十二あり、陽六を律こゝ

兼三秋物 律 り

黄鐘 大簇 姑洗 蕤賓 夷則 無射 陰六を呂こゝ、大呂 夾鐘 中呂 林鐘 南呂 應鐘是也、名づけて律こゝ、〇貞德日ゝ〻れ〻ちぐべ秋こ〻ゝるを

呂の声ハ春ふるべき道理なり」共其さこなるべ呂と雑ぢる、

八月 龍膽 えひこ 勢りんどう

和漢三才圖会 其葉笹の葉に似て厚く、九月花を開く、花紫ゆして鈴鐸の形のごとく、上ふむく、花中ふ蒼子あり、又正白花の者あり、笹龍膽ともあづく、八雲御抄 えひこ草 ちんくさ 云云 ○思ひ草 八重垣 龍膽といまさ露こさとの八通具卿説「道のくの尾花ぞもとの思ひ草今さらふまでこ物とおもふ」○ことふ 真淵翁云ハ木丹ことふきて云字書ふ木丹ハ梔子の花也と出る是ニ、源氏をこめの巻ふ四季といふるその夏の方ふ花橘撫子、さうびくさふふまどゆりの花くさぐさうもてこあり、是ニ紅夏くさふいくちれ〜ふるこ思ふらく〜、○尾花 げもこの思ひ草ハ龍膽こ定家卿の御説なまこ也ぐ〜ふ〜ふ〜にを龍膽と呼ぶハ誤ともるべ〜、

九月 鯉魚風 りぎょふう

流水 汗慶道、鯉魚風起、芙蓉老、 李賀詩門前

ぬ 兼三秋物 零餘子 ぬかご

野山藁や草蘚と蔓草蘚亦零餘子あ草の形状混雑して分別ぞ〜〜、

アて山藁のごと〜、故ふ諸説草蘚と以山藁とし、山藁ハ其蔓紫色と帯ぶ其葉四くして尖り且薄とふ〜て下ふ垂る草蘚ハ其葉四くして尖り且薄あり、其蔓青色淡黄の小花とひらく、暗て莢と結ぶ、三稜あり、山藁もまこ莢とむをぶ故ふ見易ふらぞ、

九月 白膠木紅葉 ぬるでもみぢ

時珍曰 櫨木、木の形椿穂とあ子、一枝ふ累さこう、七月實と結ぶ鹽膚子こ名付く葉の上ふ虫あり五倍子と結ふ成こ、

る

八月 縷紅 るこう

蓼 ちくせい 如し、蓼より蔓と出し、八月ふ紅花とひらく、形丁子ふ似て長さ六七分の花あり愛まべし、

瑠璃鳥

和漢三才圖会 碧鳥 俗云留里大さ雀のごく〜ふして、頭背翼上翠色頬頷臆下ふ至て純黒胸腹白く、脚尾具ふ蒼色、其声圓滑あ〜て清く囀る、

と

七月 鬼の洞念佛 おにのほらねんぶつ

七日

滑稽雑談 洞ハ八瀬河の西の山中ニあり、俗鬼のまぐ洞といふ、口狹く中闊し、高さ二丈許、深さ三丈、昔酒顛童子、此洞に住り丹波の大江山へ移りしとの人、或ハ昔叡山に一童あり、僧徒其美しきを愛し、勸酒交歡の時、時人と盃血をとり、酒に和してこれを飲む、一旦魅を受て此洞に入る、此話羅山詩集酒顛童子の洞に題するとゝる序に見えたり。

雍州府志 毎年七月七日より十五日に至るまで村中の兒女、此洞に聚まりて鉦を鳴らし、大ニ弥陀の号を唱へこゝに先祖祭といへり、

踊

書言故事 王子淳こゝに憑可と平遂に世を甚だ行はる、子醇西人と對陣せり、時、軍士百余人に命じて訝鼓とゝ、隊に軍前に出でゝ虜見て驚き慌く、遂に之を擊破る、注云訝鼓戲ハ樂人雜劇とあり、跳羅とまるゝに世人皆こゝに效ふ、○本朝の俗、七月十四日より晦日に至て、毎夜大人小兒街頭に踊とあり、○懸踊、念佛踊、題目踊、燈籠踊、伊勢踊、木曽踊、小町踊、七夕踊ホあり、各其頭字の部に入るもの詳なり、

折のけ燈籠

用捨箱魂

祭に用ひ、折のけ燈籠と江戸に絶しなり、中略 **續** 貞享四年 **親** 八鬼子八口とゝき蓑虫よ其角 折のけもらん月の支月 野馬 中略 竹藪と折りけて、その俗垣に、もるゝと折りけ垣といふ、此燈籠と竹と折りけてつくる故の名なりしかれども、いまく家にもてつくるとゝ、よく竹とおしなめるゝとゝ又名のごく折りけて上もぐく形のごとくなり、聖霊祭に供ふる一ツ一ツに異なりしとぞ、

麻柯の箸

箸と **續** 蓑 ふ麻木の箸もとゝふるし 惟然 ○時珍曰大麻其稭白うして稜あり、輕虛燭心とゝ、

送つし火

じの部迎へ火の条に注す、

女郎花、荼花

和漢三才圖会 女陪之山麓に生も高さ二三尺莖に稜理あり蒿の莖に似て枝兩々對生し、節の間に葉と生ず其葉三七及前故の葉に似て細く長し、七月穂と生ず花とひらく最細小正黄色愛もべし、本朝文粹に源順の詩云、如蒸粟俗呼為女郎者是なり、隨て子と結ぶ花白き者男倍之と名づく、

大和本草

敗醬 藻塩草に白花あること俗に

といふ又オホトチハ女郎花ふ似て花白きあり、とゝ、
をこちなの花とも云ふ、敗醤と名づけしハ、此花葉の臭
醤の損じたるごとし本草ふいへり今試るふ然ア、
○此花と女子の艶姿ふとゝ(て)讀と歌俳諧とまふ
同じ、古今名よめでことゝるむうぞどこをへしわれはち
ふきと人ふうゝれ、僧正遍昭 續猿蓑ところ〳〵鶯坂

荻

荻の凡 荻の声 馬蓐

の杖ふとゝ

大和本草 荻ハときゝゝし
いふ淀川其外處々ふ多ア、
山野ふと水辺ふも生ず、中実こよしたゞし、少ハ其中とわ
ア、葦とはちう生じ似たるもれ、水草ふ、○荻の葉ふ風
ゆうて音ありと荻の声 大和本草 麥門冬の一種

翁草

ふて葉ハ大葉の麥門冬
とも荻の上風とものふ、
ふゞ暮春及び夏の初め純白あり、故ふ翁草とのふ、後
漸く青くなる、根ふ門冬あり、尤大葉麥門のごとくふて
異草ふ、滑稽雑談 按ずるふ、和名鈔ふゞ白頭翁と翁
草と和らげあり、然ふゞ本草綱目と考ふふ別
種ふ、白頭翁ハ俗ふいふ猫草ふ異似たり、今云翁草ふ
あらず、翁草ハ初生の葉純白あり、秋月紫花とひらく、
穗の如し、猶考ふべし、又はゝ草とのふ、
とのふ、混ずべからず、九月の部ふ註を、

第切草

和漢三才圖会 初生地膏子の秋ふ似たり、西々羽葉し枝
ふ桠あり、莖葉こゝとと接めて汁あり、須臾ふして紫色
ふ變ず、六七月小黄花とひらく、單五瓣あり、中ふ細子あり、藥ふ用ふ、瘡傷
あり、莢と結ぶ三稜あり、細き藥
ふ花山院の朝ふ鷹飼あり、晴頼と名づく其業ふ精しく
神ふ入鷹傷と被ふる時ハ葉と接てこゝふ薄る
ときハ愈也、人草の名を乞ひ問ども秘して言ず、然ふふ
家弟密ふこゝとと露洩晴頼大ふ怒てこゝと又傷ふ、
こゝとり鷹の良藥とも、弟切草と名づく、○又藥師
草と名づく、慈鎮和尚鷹鳥百首 秋の野ふまこゝとあるる
青くをりうて鷹 旋覆花 蘇頌曰二月以後苗ア
やゝ〳〵えあらうん、 生ず、多く水の旁ふ
近し、長さ一二尺以来柳葉のごとく莖細し六
月花と開く菊花の如し深黄色七八月ふ及ぶ、 兼三

秋物

鬼芒

時珍曰葉芽のごとくふて長さ四五
尺甚ア快利ア人と傷ふ鋒刀の

如と

芋生の浦梨　芋生の浦伊勢にあり和哥にふとへの浦梨をとこえさまそよ　古今　とよのうらふることえさ　ゆちいかる

小田守、晩稲守　山田守　九田と守て稲と守る人畜の傷殘しと防ぐたるなり、

八月尾花の粥　大内記田原康富日記　文安五年八月朔日乙卯　尾花の粥の事、その由来何事ふるや、自然見及ぶのよし問しかるあいまゝ見及ぶ者その子細とをらぬこと也　返答　異る　海人藻芥　八月朔日、小花の粥、内裏仙洞以下令用給　良菓云　彼粥調法、薄黒焼ヲ粥ニ入合也　後水尾院當時年中行事　八朔の条ニ云、夕ゝとの御いもひ、初献よ　鬼のもと草　そへてとぎ物のうゑ　きのもしくと供ぜ云云

紫苑の事しる　白粉の花　和漢三才圖会　白粉草の部ニ云べし、正字未詳、春苗と生し冬枯る高さ二三尺叢生し葉淡青ふて柔く白雞頭ホ似て微小く四〇其花朝以後萎ミ夕陽ホ出て開く深紅色五出單葉ホ出て粉の長さ一寸余、亦紅花の中ホ紅の蕊と出て細く糸の如し、蕚の本ホ子と結ぶ灰黑色、皺胡椒の如くホて中ホ白粉ホ入て子と採て婦人の面ホ塗光沢鉛粉ホ優る、〇中華の書ニ云ふ、外國の物ホ入て、大和本草ホ云ふ、

車前子　藾頌圖経　春の初め苗と生ず、葉地ホ布く、匙の面の如し、年と累ル者長さ尺余、中ホ數莖を抽て長き穗を作す、鼠の尾の如し、青色微赤き実と結ぶ、葶藶のごとし、今人五月苗と採て七八月実ノ採　滑稽雜談　此者苗或ハ花と実とむ、古来より実と以て八月の部ホせり、故実ホ准べき、

尾花　ほの部穗花の条ホ出ス、

思草　ソウスケ　卜呂二の条ホ云べし、黄蜀葵　名一物、この部ホ云べし、

落穗　詩經　此石滯穗伊寡婦之利注云滯ハ遺ス穗ホ、寡婦ホ之ホ利ホ云ふ、穗ホ拾ふ、寡婦ホ之ホ利ホ云ふ、収成の際ホ滯漏の禾豊成餘ホ有て尽く取らず、又鰥寡ホ之ホ得るし、此鰥寡ホ共ホ云

とと思えるを、列子拾穂者行、歌

落鮎

渋鮎 和漢三才圖会七下簗 八月最長さ尺ふ

道し、此時鮎芥子の如き者腹ふ満、其背斑の文と生じ、刀刃の鏑くるぶ如し、故ふ鏑鮎しいく、八九月湍の水草の間ふ子を生て後漂泊して流ふ隨ひ下て死て、是落鮎なり、其下ニ落るあるを待、簗を設て以て是を捕へ名づけて下り簗しいへ、

九月

岡崎祭 十五

九月より肉痩一味甚劣る、

日或ハ東天王祭、九月十五日、洛東岡崎ふおゐて、名勝十六日 志九月十六日祭礼云 紀事東山岡崎正一位東天王祭、神輿一基鮮七本、その内一本の鮮劔下ニ埴と以て鷹二連、獵犬一疋と造て、彩色を施す、是と犬鷹鮮とハ其傍ニ感神院の三字と彫刻して、疑らくハ旧感神院の鮮ニ云 當社ハ聖護院の杜ふあり、故有て吉田の地ふ移て、然るふ同神社亦岡崎ふ有て故ふ東西と以て之と分つ、雍州府志 犬鷹の鮮ハ、村人神宝と称して之と崇む

豺祭獣

月令 此記、戌月之候、祭獣者祭之於天、獣者食之也、

弟草、少女草

菊とも松とも、ふ住吉の里ふ五位の松とて、

梅と花の兄といひ、菊と花の弟といひ、故ふ色、〇古野露草

公羽草

菊とも松とも、ふ住吉の里ふ五位の松とて、

年ふ成る松あり、ふの神やあらんけん、後ハ化して公羽ふ成て住り、常ふ心とを傾て拳とゝらべ、又庭ふ菊を植て愛し、人公羽が三の我庭きし

の松蔭ふ、そもむ公羽が草の花もさかりあん、〇此故事ふ、翁草とゝ、

老母草の實

三四月一茎と抽で淡黄花と開く、穂の如し、其茎高ふして、隨て実と結ぶ、生ハ青く熟すれバ真紅、累々として天南星の実ふ似て可愛 三才圖会 万年青、葉芭蕉ふ似て隆々として衰へず、其多寿と以て万年青と名く 大和本草

栗

自ら裂けて地ふ墜る物是ふ、

落

唐ふハ一切祝儀ふ用るよし、花鏡ふこれあり、熟せんとして子出て其苞

遅稲、晩稲

時珍

日粳稲早中晩の三収あり、六七月収る者を早粳と
も、八九月収る者を遅粳ともいふ、時珍
曰十月収る者を晩粳ともいふ、元元是遅稲あり、**落水**
苧環拾遺 田のおもを
ー水とゝり、畿内ふ
ふ、元元是晩稲あり、
ハ所々稲と苗て後、田ふ菜種を植るゝ、故ふ
両作所といふ、田の水を落てハ菜種を植用意、**おもを**
すゝ
くくせゝ 飲憩の木と日事紀ふ載るゝ
是あり、秋甚紅葉も、立花と好む者秘蔵して
ゝゝと
挾も、
充べ
し、

七月

早稲 時珍曰、六七月収る
者を早粳といふ、食

童相撲 扶桑畧記 延喜元年七月廿八日
丁丑、童相撲廿番を御覧、綾綺殿
よおゝて此事あり、古今著聞集 延長六年
七月六日童相撲廿番終て舞を奏も、

兼三秋

物 **木綿取** 桃吹 和漢三才畜会 其実桃の如
し、四つふ裂て中ふ白綿と出
す、ゝゝと桃吹といふ綿車と以て中の子と繰り去も
竹と以て小弓と作る、弦と牽て綿と弾くゝし、

若煙草 和漢三才畜会 煙草 相思草 淡婆姑 淡苞菰 羅山文集 佗波古
希施婆、皆番語也、元元 按ずるふ天正年中ふ南蛮の商
船始て此種と貢も、以長崎の東の土山ふ植、二月種を
下も、五月移し植、新芽を摘去て芯と除くゝ、毎日
怠るべからずで、高さ三四尺、葉高薩ふ似て長大、七八月
葉と采て、藁莚と覆てことゝねるゝし、盒一宿して取
出し、一葉ゝゝふ繩ふゝゝゝみ、編るゝゝゝゝゝて晒し乾し、
一夜露病ーて、後晒ー乾も、黄赤色ゝゝる、
敏を擴げゝゝと収む、元元 若煙草是るゝ、

八月

楓菌 和漢三才畜会 これ
ゝゝゝで笑ひて止で、

渡鳥 此月諸鳥異国
ふり群飛して、
山林江湖ふ来る
是と渡鳥といふ、

九月

度會新嘗會 日 外宮
十六日、内 内裏より初稲と伊勢両宮へ奉らせ給
宮十七日 ふゝ大嘗会といふ、御即位の後日本国中
の神々へ御饌と奉らせゝふといゝ、
新米と奉る故ふ早稲米の御祭式、

吾亦紅 陶弘

景曰地榆其花子紫黒色鼓の如し故ふ又玉鼓と名く云云是花ヨ果ふいふワレモカウ本名玉鼓一名地榆比叡山嶽馬及び近江道ふ生ず宿根より二月苗を生ず初生地ふもく独茎直上高さ三四尺對し分て葉を出す榆の葉ふ似て稍狹く細長くして鋸の齒の狀ふ似て青色七月花をひらく榿子の如くして紫黒色

か

七月

梶の葉姫

棚機七姫の内ふり

異名分類 梶の葉姫

八八雲御抄ふ梶の葉ふとの書も皆由緒あるう云云漢雲間答ふ芋の葉の露と硯の水とふ梶の葉七枚ふ歌一首づゝ書きつらねて人ふ是等ふようふ皆二星ふ祭る具專要の物と以名付たるえう

梶の葉

年浪草 和俗七月六日市中ふ穀の葉と貫明夜詩歌と書て以て二星ふ供する所あり又短冊ふ楸の葉と用て書て以て二星ふ供する所あり

和漢三才圖会 和名加知俗式加 按ずるう楮の皮今多く紙ふ造る又布ふ織往昔木綿と称て今も亦祭祀の人木綿鬘ふ被る上古の衣服ふ象る歟今二星ふ供する時詩歌と數の葉ふうくて牛女神と祭るの故ふ木綿の義ふ象るう○菅章長詩話家朗詠抄ニ曰昔余吾の海ふ天人下て羽衣を獵師ふ盗まれ心あらずして獵師の妻となり人年月と經て羽衣を取得て天上し再び人界ふ下りて獵師と共ふ天上ふ女八織女となり男八牽牛となる其再び天へ上るの時梶の木の上より糸をおろし是ふ取付て登る故ふ二星の手向ふ梶の葉と用ひ願ひの糸として五色の糸と用ふと云云暑して爰ふ記ス此事淡海志ニ云云

梶

の鞠

あの部飛鳥井鞠の条ふ出つ

河鼓

志の部二星の条ふ出つ

烏鵲

橋

藻塩草 鵲鷺記ニ云史記ふ云瓊ふ夫婦あり夫を遊子といひ婦を伯陽といふ偕老と契て子八二人の候陽八三四の旬也と云云此文のこゝろハ遊子十六歳伯陽十二歳なる夫婦となる互ふ志切く共ふ月と愛ずるを限りなく夕ふ月の出ると待て里ふ行曉ハ月の入るとを惜て高峯ふ上る伯陽九十九ふして死す遊子深く歎て月と形見とするほどふ或夜伯陽鵲ふ乗て空と飛ぬとなるを遊子殊ふ歎きて百三歳ふて

死せり天の星とあらて、烏ふ乗て天と飛行て銀河ふ望て川と隔てなりさ迚ごと帝釈毎日此河ふて水とあび給ふ故ふ水けぐ迚二有て渡ることを許さるもこと然りといへども七月七日ふハ帝釈善法堂へ御参ての日もれば水とあび給ふことをゆるして渡ることを許さる、年ふ一度とゝども人間の為ふハ一日一夜あり此ときゝ烏と鵲と羽とをらべ橋として彦星織女と通ふ是と鵲のたゝしいふあり云云

大和本草

鵲ハ畿内東北の國ふとまる筑紫ふ多し、朝鮮より来らふや高麗烏と云、鳶より小くつぐみより大し、門羽ふ黒白あり尾長し、本草ふ載る鵲あふく合り、

茶

せの部摂待

茶の条ふ注ス

縣忍躍

紀事十四日より晦日ふ至て夜ふ入、大人小兒街頭ふ躍と催し、或ハ又各同列して相知處の家ふ至て大ふ踊躍とす、是と懸踊とゝふ、掛らるゝ所の家再ひ踊躍と催して、ゝゝふ酬ゆ、是を返しと称ス、

蜻蛉

うの条ふ洗

蝗蟷

鎌切同物

こいの部

柏ちる

御傘

柏ちるハ夏ふあり、無言抄ふ秋と有ゝ解事ふ分やうの常盤木の散ハ夏ゝ中略今此國の人の申柏ハ初秋ふ紅葉してちるものとゝゝ此注ふつきて無言抄ふ云ふるゝこと、ゝゝゝゝさう、

増山井

夏の部ふ貞徳説夏あり、又一説秋ゝ、

貞享式

此柏ハ御傘ふ説ありて論語の松柏と證ス、と、妻竟ハ雞とふ世ゝとも爰ふハ散字と結ひて決て秋と定へきこと下略

兼三秋物

桂

つの部月の桂と

男

いへる條ふ出づ、

鳩來紅

来雞頭時珍曰雁来紅、莖葉穂子とも雞冠と同し、其巣九月鮮紅ゝゝと望ふ花のゝ〳〵故ふ名く、呉人呼て老少年ゝゝ、一種六月来紅の者あり十樣錦とゝゝ、○雞頭や雁のくる時猶赤し芭蕉

増山の井

雁来紅、一説うまゝのの花云云

杭草紙ふうまゝのの花

柳

時珍曰、柳高樹大葉圓ふて光沢あり、四月花をひらき黄白色、實と結ぶ青緑色ふ九月熟す○烘柳、酥柳、白柳、胡盧柳、樹練柳、木淡柳、似柳、伽羅柳、円座柳、筆柳、田舎柳、君遷柳、樽柳、榑柳、

柳鮓

藏春日柳鮓黄柳ふ以上各頭字の部ふ入て注す、米粉を和して糊

蒸て小兒に與ふ食して下痢下血を止む、

案山子

聚云、古者三皇の世に人死して未棺槨殯葬の禮を畏ふ白茅を以て屋を覆ふ中野に樓を構て孝子其禽獸の食ふを視るに忍びず彈を作て之を守り鳥獸の害を絶つ、按ずるに俗に案山子今田圃の中に草偶に弓を持せ以て雀を防ぐ、備中國湯川寺玄賓僧都迹を民間の奴に晦まして田に入稻を護て鳥雀と懼を芻靈と僧と驚して勢を成す、今に至て鳥雀を懼る芻靈と僧都を

續古今　山田守僧都の身をそうぞくべし　秋　玄賓

和訓栞　傳燈録に云ふ案山子あり、山田のそをづとも云ふ、鹿ぶしあるべし、山田のそをづと云ふ豆がらをそなへ節分の夜いとり豆がらを手に持て鬼ぶしらふ燒ぶしの義、埃囊抄に多久串と名く、とそえうぶしと焚に鹽鹽の異なると傳ふる意もあり

增山の井　そをづに添水と書て水辺に置て水のちらと添て音を出を鹿おどしと云ふ畧かぶしとそをづに別の物もあれども玄賓の山田守そをづと僧都はそをづとよく給

つる故に鳥おどしの人形と心得て古哥にそをづと多し、然るに実に別の物に、石川丈山費斎集竹筧人餘上短く下脩し、桔槔に形て首と上流に矯さ尻を故尾尻石を敲く、旋轉俯仰我巨々の声と発揮す、蓮心院云我巨巨竹筒の鳥声韻凡ふるべし、

元元集　添水　鎌帛

物と立て、又それに鎌帛との人物とたてて、菅笠をきせて立てまぶ鹿の田をそまぬとそをれと鎌帛と云ふ歌に我宿のうほめ立るそをづあやぶふ山田に鹿

鹿火屋

年山紀聞　説々あるに、山田に猪鹿のかよるを、つく所に小き家を作て、壁塊何くれとの嗅きものを火とくやし、烟をそそぐ鹿をやらひやると心得べし、或は香火屋又置蚊火ともに字とりて書る所もあるふりてまぶに人もあるべし、用ふべき子又火の字濁りそをして顯昭の飼屋の説に迷ふべし、元元

かせぎ

鹿の異名、

玉葉　山ふ人にあるかせぎのけぶりきに世に遠ざかる法どで去ぬらん、

赤染家集　朝ぼらけ夢とあくるにそつるはうをもぎのちうくたてるくらん、

肩掖鹿

匡房卿哥　加ぐ山のそをづに下ふら

こけて宵ぬく鹿ハ妻こいまをせて、日事紀才二三云復令中
臣祖天兒屋根命忌部祖天太玉命内侍天香久山之
真牡鹿之肩而取天香久山之波波加而占矢、古事記
の説ことなるおもゝ、神代ゆゝ鹿の肩骨を抜てうらなへ
ゝ、そもゝかの木ハ和名抄ニ云櫻桃和名波ゝ加一名ホ波佐久良 延喜
式ニ云九年中御ト料波ゝ加木皮ハ大和国有封の社
ふ仰て採てこ
れを進らしむ、

片鶏

夫婦相そゝぎて離
れて居るといふ、

駈鶏

藻塩

八月

草鷹狩ことはハ馬上ゆて鷹を居
てうり立て鳥ふ合するといふ、

菅大臣祭

十六日 雍州府志 京四条の南、綾の小路西洞院
の東ふあり、南北道ゑ隔て是善公の宅
地、なの内北ハ菅神の祭あり、是菅神降誕の地、故ふ
社を建てこれを祭る、神社啓蒙 或人云此所昔菅家の
舘、一夜飛梅の天神といふハ是、今ふ飛梅の跡ふ地ふ
存ず、又説ふ文子の宅ゑて菅神もゝめて上座の地、
洛の人阿米神と称ず、例祭八月十六日、社辺の氏子是
を祭る、神輿一基、童子素袍供奉、社僧ゝりふまゝ人、

亀戸天神祭

○江戸本所の末亀戸村ふの
ゝ、祭る所筑紫太宰府の神
建立ず、祭礼八月廿四日、本所牛の御前ゑ隔年ゝ当社の
神室天國の剣といふあり、この外後水尾院の宸筆安
樂寺の額、もみぢの文臺 大閤秀吉公の文臺ゑ連歌師昭叟ふくこまゝとゝ、紅葉の蒔
絵有等神庫ふ蔵、祭の日奉幣ふ、まの部間多
神楽ホ行ず、近来正祭ふ、

貝割菜

菜の条ニ出、

苅萱

大和本草 霜草 莖葉節穂皆葦の如くして
小ゝ宿根より春苗と生ず、葉ふ青白のこと筋
多くまゝ有て本末ふ通ず、四五月穂ゑ生ず、中華の
書ふいまゝ見ず、菅茅の類ゝカルカヤともいふ、新撰本草
崑ゝ岡辺ふ茂る、かるかの上葉の露ハまゝこれ、
衣笠内大臣（萬葉集ふ苅萱とよめるハ後世の人一種の
苅萱ふあらず、秋苅ゝうる萱とゝ、
ゝぶ、和訓栞ふ雀麥ゝとゝ、

萱川、萱蔔

萱の軒端

倭名抄 茅和名萱 加夜 大和本草七
長短一種あり、短き者ゝカヤ

御傘 萱草、萱草が軒端植物なるあらざ、秋ふもふるまでき道理ぶらかゆうの名草ハ秋の季大切なる故ふ用ゆるよきこゝ〳〵 つくらせる 卿傘編集の時、事甚ご無数よつて、如興了簡多し、屋根ゑ苫て何十年ゑるるもの秋季植物ふハ用ひごゝし、宜しからざる式ふりとご蕉門の徒ハるるとと用ふべらべ、

桂の花 木犀

南方草木状 江南の桂、八九月花をひらい、子ふ、此木犀ふり、

本草綱目 菌桂 嚴桂の二種あり、菌桂ハ巣状の葉の如くして尖り狹く光沢あり、三縦の文あり、鋸齒迄其花ハ黄あり、白いろと、嚴桂ハ其葉ゑ鋸齒あり、枇杷の葉の如くして粗溷める者、俗呼て木犀 燕頭 醉ひ 熏盃草 日蓋

とは、○木犀の花、香気高く人こして 草ハ葉竹ゑ似て細く薄し、亦田ふ小こ荆襄の人者ゝく黄色ゑ深ち極て鮮好ゑ、

和漢三才圖会 多く越前よゑ出ち、以て染家必用の物ゑ、按ぎふ倭の萱草竹の葉ゑ似ぎ芒の類ゑ江湖大浦の辺山中最も多し、

老鴉瓜 王章草 ○時珍曰王瓜 一名土瓜、其根土氣と作し、其實瓜ふ似くゝ故ゑ土瓜と名く王の字何の義といふとゝ瓜雹子ふ似て熟まるとき赤色赤し、鴉喜てこれと食ふ故ゑ俗赤雹老鴉瓜と名く三月苗ゑ生し其蔓髮多し其葉回くして馬の蹄のごゝ、六七月五出の小きゝ黄花をひらき蔟とあすゝ子と結ぶゝ累々こゝり、熟するときハ紅黄の二色あり、

天和本草 其実まゝ〳〵長し王章と云王瓜の実ハ文ともすぐるふ似こゝり、故ふ王章といふ、

籬豆 本草と考ふふ人家の籬垣の側ゑ三月種と下す、蔓生して延纏いて籬と蔽ふ故ゑ沿籬豆と名く又和俗破墻豆といふ、此豆一粒ゑ植ゑ八豆八升と得るゝ、破墻と八升と音近し、故ゑいふ、

芥菜蒔 時珍曰芥最種ゑ皆八九月〳〵種と下す、

鴈 月令 仲秋月鴻雁来賓 ○時珍曰雁の狀も、鵝ふ似て亦蒼白の二色あり、二人白くして小なるもゝと以て雁ゑ、大きなるものと鴈ゑ蒼き者と野鵝ゑ、雁ふ四德あり、飛ときゝ序ありて前ふ鳴て後ふ和ふ其禮也、寒きときハ北より南の衡陽ふ止る熱きときハ南より雁門ふ帰る其信也、偶ゝ失ひて再

び配がも、其節也、夜群宿して一奴迅敬鷺を畫ハ蠱と
啣て繒繳を避く、其智あり、捕る者ことゝ拳て爆とし
て以其類と誘ふ是一愚之南ふ来る時、春変て食ふ
へくもも北ふむく時肥故よりまと取べし、○白雁、鴻
鵠、海雁、たのむの雁、代りて雁、二季鳥、以上頭字の
部ふわりて注を○ちらゆぐらふ一種あり、目ふち黄
ゆ、て其外ハ雁の如し、○雁の書 漢書 書之則漢の
新方雁ハ頸長、関東にあり、 蕉武字ハ子卿
杜陵の人武帝の時節を持て匈奴ふ使を單于ことを降
うんと欲し武と幽し、大窖の中ふ置漢武と求む匈奴詭
て言武死ぬと、常惠漢の使者ふ教てそらむ天子上林
中ふ射て雁を得うり、足ふ帛書を係く武其澤中ふ在り
是ふ由て還ることを得きうり、 古今 秋風ふ初うゝるを
きこゆるたゝ玉つさをとりけてきゝけん 友則 曠野落
者ハ荷分の文や 雁陣 本朝無題詩 雁陣数行
天川雁 其角 微月冷虹橋ノ道遠天晴
茂りぬ 雁金 和漢三才圖会 所謂雁金といふ雁之鳴也
明 方葉集ふ多く此三字を用ふ然ども文雁

鳴者今者来鳴沼と詠むるときこゝ自ら雁の名となるふ
ふ似ふ〻〻〻〻雁金の二字と用ひて本意を失ふ云云
雁字 山谷詩云雁字一行書絳霄 ○談林 槿
流発句 阿闍梨の文字ハ横くふ天つ雁、
鳥 和漢三才圖会 好く槿樹ふ接む故俗呼て槿鳥
とふ又懸巣鳥と名く形鳩より小さく頭背腹
共ふ灰赤色眼の辺ふ白色あり翼及黒其小羽ふ青黄
の斑あり、嘴二寸許稜ありて黒色脛亦黒し能鳴て諸
鳥の声をまねぶ又人の言をまねぶ商家除夜
元旦ふ炙て食ふ以て借て取の義と祝ふ、 河鹿 雕 蕭
歳時記 蛙ハ好て山川ふあり、夏の季より秋ふ至り
て鳴哥ふかくつとのをよくしてかくうとい詠せり、俗傳
ふ西行ふ哥ありといふものハ臆説ありて考ふる所 鯉
あり、その声鹿ふ似ふ故ことゝ、俗呼て河鹿と言ふ、
同書云正字ハ黄頷魚杜父魚の魯ふ水底ふあり、鳥魚
あり故ふ此魚と誤りて河鹿と称て諸国ふあり、伊勢
越前越後加賀近江山城ふ多し、その土地ふよりて
名ゆゑり、形も声も大同小異ふ、 石伏 コリ 石ゑヒ 石モチ

又川オヨビ伏見クヂ十ハドニヨリ伊ヂ一ル嵯峨ムコ近江アラシ魚市地

この外わも猶あり近ごろ山海名産図会ニハ書よ麥しく論じ〻ものいこふ畧記も○青蓋玉ハ焦門の先哲のよめるこうゝハ蛙ふあること藤蔓あやまりてききうるものゝ

鯖れ嵐葉

九月

桂の宮相撲

八日 拾芥抄 六條の北西洞院の西九月八日桂の宮相撲 今昔物語 天暦の御時ふ震旦より渡僧長秀こゝあんいい久る元医師ふあんめりる桂の宮の前ふ大ある桂の木あり日ハ桂の宮とぞ人いふる長秀唐の桂心ふまさるとこゝ 雍州府志 桂の宮一町五六〇神社第宅詳ふ

神田明神祭

十五日○神社江戸湯島ふあり祭る所の神二座 神社啓蒙 大己貴尊鎮座ましも将門の社ハ本殿と去ること百歩ばかりなり○大己貴尊ハ人王四十五代聖武天皇天平二年鎮座〻将門の霊ハ六十一代朱雀帝天慶三庚子年二月十四日将門滅亡もその後怨霊ふ祟ある依て延久のころ一遍上人三世真教坊将門の霊を以て神田の神社ふ合せ祭る當社ハ今の神田橋の邊ふあり此所いふ〻ハ芝崎村〻今は至てこく祭礼の日神輿とゝまらく此所ふ留まて奉幣ありて祭礼九月十五日 糀町山王 と隔年〻神輿二基引上三十六本踊屋台堂太神楽ふこゝ〻ハ従ふこの祭の練物ふ頼光大江山入の形状を摸して三間余の鬼神の頭を造て臺ふのせて数人ことゝ荷ふ引山の外今ハ是ら神事ふ預るのとゝ〻めらる町内神田外神田大傳馬町宝町辺日本橋通り町前後都合三十六町〻神幸の町々ハ夜宮ゝ桟鋪と構へ種々の趣向ありて甚賑へり神輿渡御の町ハ本社ゝ麹町通り飯田町より田安御門ふ入 上覧所前常盤橋十軒店通り筋違御門と過て本社ハ還御〻大抵祭式山王祭ふおるべしゝゝハ神事能あり今ハなし

神主芝崎大隅守社家五人巫女ふあり

上難波祭

廿一日○摂州西成郡大阪博労町ふあり祭る神三座才一稲荷倉稲魂神第二祇園素盞嗚尊第三平野仁徳天皇後三条院延久三年勅請俗ふ仁徳天皇の祭とい〻毎年九月廿一日神事神湯ふあり氏子醴を醸して互ふ相贈る〻社説ふ仁徳帝の社ハ元大江橋の東上

町の内にあり。是ハむかし皇居の跡なり。秀吉公の時上難波に遷る。

桂川の御稜の部野の宮の別ととなへる条に注す。

かはらよもぎ

和名抄 菊 和名加波良与毛木 又云加波良於波岐

菊の異名なり。天和本草 頻に和名抄にかはらよもぎと訓ず。但野菊なるべし。

たかさみ草

名なり。藏玉 めうもいせずいつとなくのこる草ならしも秋とおもふ名残ぞ此菊ハ奥州新妻の里にありて因縁無常の新妻といふ物語にあり。業平作是ハきくといへるハつきて秋に入らぬから。彼物語ハ十月十五日とあり。然ば冬を中略

榧

時珍曰。其木文木と名づく。斐然として章采あり。故にこれを榧といふ。信州王山懸の者を佳とよんで

按ずるに羅願爾雅翼云。彼ハ杉に似て杉に異し。彼ハ美しき實ありて木に文采あり。其木桐に似て葉杉に似たり。絶て長じ難し。木牝牡あり。牡ハ華さき牝ハ實る。なりし嚢のごとし。其核長くして橄欖のごとし。核に尖る者あり。尖らざるものあり。稜なくして殼薄し。黄白色。其仁生にして食ふべし。亦焙て収むべし。一樹數十斛に下らず。天和本草 其木殿を焼て蚊退く。かやりの木とりの字を呼せり。

櫧の實

時珍曰。三四月白花を開き穂をなして栗の花のごとし。実を結ぶ。大サ櫟の子の如し。小苞あり。霜の後苞さけて子墜り。

雞冠木

和漢三才圖会 本草綱目に楽をる楓ハ岐あつて三角となる。霜の後に至て葉丹し。變をへし雞冠木も赤楓の属なり。然し楓の花ハ白色実大にして鴨の卵のごとし。雞冠木の花実と迥に異なり。猶朝鮮の松の子大にして常に異なるが如し。雞冠木ハ數種あり。高き者二三丈。葉尖アして岐あり。蝦蟇の手の如し。大抵七八岐或ハ九岐又十二葉の者ありこれを十二重といふ。三四月嫩葉紅色にして滿山に映ず。五六月青葉に復て深秋其葉黄に落つ。蔵て經るものハ五月に小黄花をひらく。状飛蛾のごとし。梢頭に実を結ぶ。中の子牛房子のごとし。和州竜田。雍州高雄山最多くこれあり。秋に至て葉丹く赫耀として天下に冠と賞美す。凡草木秋紅葉する者多くありて蝦手の樹の葉勝れてもそ。故にたゞ紅葉と称するハ即蝦手

の葉あり、**柳紅葉** 八雲御抄 紅葉の詠をる木、柳云云 是柳紅葉あり、一説に実の赤きを柳もぐぐしとよるいと弱し、夫木 秋くれば山の木の川葉のいろふかん國生の柳はもしぐらおけり 為家

の紅葉 紅葉の川水なりとぞ、又きて流るるともいふ、

枯草 枯野枯草は冬なれども、露とおちすびては秋なり、

路

よ **九月** **淀祭** 廿三日

神社啓蒙 伊勢向の神社は、山城國紀伊郡淀の駅小椋の東河中にあり、祭る所の神一座、天逆向津姫尊室基文図に云天照太神なり 石清水社家説 八幡迁幸の縁によりて、伊勢向と号し、こゝに祠まる、○一説に淀姫の社、祭る所今三座、淀姫の神千観内供の夢、神天神以上三座、傳云千観法師、肥前国佐賀郡、淀姫の神とこの地に勸請し、淀姫の明神は八幡宗苗の祖母、神功皇后の御妹と云、

紀事 淀大荒木の社、祭ること廿二日、或は淀水垂淀姫大明神の祭廿三日と、何まろ是まろや、土人云淀祭と称する者是なり是淀の鎮守と、神輿一基、淀の堤路狭く、神輿還幸の時、行列と立ぐくしよりて跡を先へ振うて同じ堤を帰るなり、故に跡を先へとるとは此祭をいふ、

齢草 ちの部千代見草の条に出、

夜寒 傘 夜寒秋に寒き夜 夜と寒と夜の寒きを皆名づく、

七月 **織女祭** 牽牛 或書に云牛女の天河に会とは此流俗の雑書に出て云ふと、経史に尋ぬるに未典據なきもあらず、詩經に睆彼牽牛、跂彼織女とよるとは説者以為三星名あるて賢ふし、夏小正に言ふ七月初昏織女正向東十月織女正向北 五雑組 牛女の事 舜諸に始り、武丁の妻言に成て博物志に成る、槎に乗の浪説千歳の下に婦人女子傳て口實とせること可ふり文人墨士乃習て常語とせ、天上の列宿とせ横に汚蠛と被らるゝ亦怪むべきの甚しきこふあらずや、然ともの詩哥連俳の道浪説とそ、用ひべき有べらべ、

薫姫 織女の異名 異名分類 公事根源に乞巧奠に机の上に火をふ

短冊竹賣 短冊竹賣 六日市中穀の空焼物あり云云

葉とらふ明夜詩哥を書て二星ニ供じ或ハ短尺ニ撒
の葉を用ひて詩哥を書くし今ハ民間の児女五色の紙
を翦て短冊とし、とをぐふ古哥を書、さうれ葉ニ結ひ高く
屋上ニ出すとを竹竿の五綵糸ニ換るものか昨今市中
短冊竹賣多くし又近来
五色の短冊紙を賣ありくん

七夕踊

小町踊

迯魂紙料 正保の頃
の画巻ニ七夕踊の圖を載せ〳〵ふ其詞書ニ云さて〳〵
七月七日ハ中略乞巧奠とて人〳〵な今宵ハ七夕祭せる
もなきのめぐのしごてふ七ッ八ッなどのりあの小姫〳〵ら美
しく出立太鼓を手毎ニ持つ〳〵面白くうらひ踊ま〳〵
るめこ〳〵是七夕とかめぐさむる事昔今ニ息らぞをや
〳〵 云〳〵七夕踊とて別ニあるニかららそふ女の人情ニ
盆をまうらう後て七夕より〳〵るる故の名あるべし愚案
問答ニ云享保十七年著七月七日七夕を祭る中略面白く歌を
うらひ大内の小町の小路〳〵友達のこ〳〵へ出ぬ踊となげ
たりむうしより小町と呼ぶ人毎ニ美人のやうニ思ひ名う
けて小町踊と名付くり云〳〵○七夕踊を小町踊ともいひ
踊ともうし小街踊といへる説をあろし

題目踊

洛北修学寺村の老嫗法華の題目を
唱へ踊とあるを是を題目踊と云松か崎か同じ

高燈籠

用捨箱 昔々物語新見翁著ニ昔ハ死去して其年より七
月高燈籠とてあるを七回忌まで立つるもあり又
立るハ六月晦日長さ五六軒の杉丸太上ニ三角のい
うを結ひ杉の葉ニて包四手ときりて付燈籠ハ辻
番の行燈の形ふちらひさく作上ひらき下を屋上ニ付る是
も板ニてうしらく玄関と臺所の間の廣ニ建て七月朔
日より晦日まで毎夜暮六ッより明六ッまでともし一向
宗ニハ〳〵他宗ハまれ〳〵のごとし哀ニこゝろあるをり
とゞ且享保十八年ニ記さるれバ既ニ當時在家
の高燈籠の絶るハ明らかなるをとうらの頃までありしと思
らるゝ下略○嬉遊集 高燈籠
ひるハものうき柱の郷 千那

霊祭、霊棚、棚經

掛索麺、麻柯の箸、枝豆、枝豇豆、根芋、青蕎麦、粘米
瓜、茄子、此類聖霊を祭る意あるも秋とくるべし 青蓮
云むかしハ在家ニ佛壇を餝ておくとあらり、故ニ
七月十二日二度魂棚を餝て設け聖霊をむかへ祭りし

ありしまうるふ邪宗門御改の砌我家ハ何宗ありとゝ
うあ〳〵ふ常ふ佛檀と設ることゝいまわり 四季物語
魂祭るとい一年ニ二度あるかのゝらゆきて此月の祭を
年のとらりふとゝ也やそひてこれ〳〵おもろ 徒然草
十二月晦日の夜のことゝ也ゝる条ハ亡人の来る夜とて魂祭
るゝゝさい此頃都ふハあきとゝ也つまのゝこふハ猶をゝ
とのあくしをて哀あまと 枕草紙 ゆゝう巣と師走の晦
日ゝ也ときめ紀てあき人の喰物ゝ多く云云 ○ 棚經
菩提寺の僧来ゝて牌前ふ誦經すゝもとゝ棚經 大
とゝふ○うの部 盂蘭盆会の条ゝゝ〳〵べゝ

文字の火 せの部 施火

の条ハ出つ、

鷹の塒出

会 四月羽毛と易んとまる時、章繙と解き去て、鳥屋の内ふ放
つ日と逐て脱落して還新毛と生ゝ七月中旬ハ四のゝどし、
ゝゝと片鳥屋とゝふ二歳毛と易ゝを両鳥屋とゝふ三
歳と両片鵰とゝふ○鷹ゝ過ぬゝ
今ゝくゝゝとゝ

鷹め山別

定家 或鷹書曰鷹の山別ハ七月廿五日ゝ鷹の

巣と立父母ハ別ゝ〳〵とゝふ 下学集 鷹ハ猛惡の鳥ゝ
子生じて巣ふあり其子成長てゝしきハ親と食ふの義
あり父ゝ母と畏て居ハ巣ゝ一尺枝と去て
子と養ふ也ゝ一尺量と呼て鷹秤とゝふ

鷹打

九七八月巣ゝ以て鷹と取ゝと呼て鳥屋持ゝふ鷹
の雛巣と離て飛翔ゝて自食と求る時常ふ絶生新
巌の喬樹と度る其巌窟の辺ふ小芽と結びて居ゝ
鷹の至ゝと窺て羅と樹間ふ張死鳥と以て媒とゝて
ゝと捕ふ此と 河賀記 とゝふ

鷹祭鳥

月令 鷹乃祭鳥處暑
或ハ網掛ゝ作る是と鷹打と云

王ゝりき

天和本草 其実ハ梅嫩ふ似ゝ
候七月之中也

立花

とこのむ人七月七日
花瓶ゝ其巣と去て其実と のこ
ゝて多く挾む此時其実粗熟ゝ

兼三秋物

龍田姫

民江入楚 竜田姫ゝと称ゝるふ春ハ佐保山
の神より事ゝをゝうゝさわ山の霞の色ふよせて春
とゝひる神といひ秋ハ竜田山の神より事ゝをゝうて紅
葉と詠ゝる故ふ秋とゝひる神とゝふ又其ゝ神の名ゝ

玉兎つの部月の蟾と いゝる条ゝ註も、立待月 新撰六帖 我明と
ちゝこさゞたちまちの月もこるらん 衣笠内大臣○十
七日の月ゝ山の端ゝづる月と立ゆもらんて すつゝゝと、
鷹の羽芒 白き穂ありて鷹 の穂ゝ似とり、 樽拔桙 是酬 桙考、
関東の俗ゝと樽拔とゝ、酒樽 田の色 許慎ゝ 說文曰
の中ゝ入置て渋と拔の謂あり、
稻二月始めて生じ八月熟す 云云 ちゝる時ハ七月と
ハ青黃半熟する時あり、故ゝ ゝと田の色と云、 田
の庵 御傘 田を守る時ゝ作りて居る庵 ハ秋ゝ多ゝ 後撰 秋の田のうゝ海の庵の
とあらゝ我袖ハ 露ゝぬるとつゝ、 八月 田の實の節、 特
枯れ節 その部八朔 の条ゝ出づ、 端正月 冒乘月詩 三
出東溟 事文類聚 前輩中秋の月と名づけて端正の 秋端正月今宵
月とも、○李吟云 端正の月八圓滿ゝ ゝ多ゝ、

竹の春 竹譜 竹八八月と以春と 荀譚 竹八八月
ゝと小春とゝ、熟去んと欲し寒來んと
欲ゝ故ゝ 吳響集 客又曰、檀特花と
小春とゝ、 檀特花 いゝのあり、花炬火の如し、
ゝも亦芭蕉の類ゝ、答ゝ曰是亦芭蕉の別種
ゝ、 和漢三才圖会 高サ三四尺葉芭蕉ゝ似てゝく、
甚柔ゝ、又薏苡ゝ似て大く甚硬ゝ、長サ尺ゝ
餘ゝ闊サ三四寸、冬ゝ枯ゝ春生ゝ、七月莖ゝ抽んで
花ゝ開く、深赤色、形穗最も愛ゝべ子ゝ結ゝ圓く
黑色甚硬く用て念珠ゝ作る、木西南外國の草、性最
寒ゝ畏る、 龍舌草 多識篇 龍舌草 今按多豆乃之多 大和
本草 水中ゝ生ず、葉ハ車前ゝ、
水中ゝ花ゝ生ず、花白く菱のごとくして大きり、處々ゝ
もあり、本草水草の類ゝ載ゝ西土の方言ゝ云ゝ
と云、水加ゝけく葉枯る、又水葵と云、葵の葉ゝも似
ゝり、花ゝ三出あり、八月ゝさく、實ハ三角あり細し、 煙
草花 花鏡 烟花 一名淡把姑初て海外ゝ出ず後種
と漳泉ゝ傳へ今地ゝ遍てゝとあり、 禾春不老

ふ似て、葉、菜より大あり、紫白の細花とひらく、和漢三才
蕃会 八九月茎の頭ふ穂槌とのごゝ小白花と開く、赤
色と帯ぶ碧紫苑の花ふ似くり、かの部王瓜
子と結ぶ内ふ細子あり、黄褐色、王章の条ふ注ス、

蓼の花、蓼の穂 和漢三才蕃会 三三月繁
茂し、秋ふ至て穂とるす、細
花とひらく、紅白色数品あり、花穂と種瓢九瓢の
なり実と結ぶ、俗ふ云ふこと穂蓼と云、種子と
そ、ぎものハ採収て是と搗の下ふ鋸ふ或ハ火爐の上ふ
鉤て水氣と去て、乾き過して褐色とある時、種子とう
出し蓄へおく、

種茄子 時珍曰、茄中ふ瓤あり、瓤の中ふ子
あり、諸茄老ふ至て皆黄色あり、

茸狩 木の子取 尔雅 菌ハ形蓋ふ似くり、木菌土菌
石菌あり、○茸狩や鼻の先ふる三かゝと其角

大根蒔 和漢三才蕃会 蘿蔔大抵八月
種と下し、彼岸ふ苗と出を、

蓮の実

丸雁 伊勢物語 そうのゝことのしの雁中ひとぶふ君
かゝらあだとあくれる 八雲御抄 基俊ハ類

特て東人隣家相ゝふ鹿狩事ゝ、俊頼ハ田
面の雁ゝとゝ、諸抄雁と用ふ田の雁の事ゝ、

太刀魚 時珍曰鯖魚、江湖の中ふ生を、魚の形物と刑裂箋
刀のかゝし、故ふ鐵魚 鮒魚の名あり、常ふ三月ゝ
始て出づ、狀狹ゝして長ゝ、薄ゝて削まる木片のごし、
亦長く薄ゝて光る刀の形の如ゝ、細鱗白色、吻の上
ふ二の硬き鬚あり、腮の下ふ長き鬚あり、麥芒の如し、
腹の下ふ硬き角刺あり、快利刀のごゝ、腹後尾ふ近く
して短き鬚あり、肉中ふ細き刺多し 大和本草 綱目ふ載る鱗魚ふ相似て同じ

九月

高きふ登る きの部菊酒の条ふ出つ、

醍醐祭 九日○歳
治郡小野の南、深雪山醍醐寺ふあり、紀事 九月九日
醍醐天神祭、能あり、又昨日夜ふ入て、清滝權現の社前
ふ於て能三番あり、ごゝと夜宮能とゝ、○神妻三基才
一長尾天神、才二清滝權現第三勝間明神、以上三社ゝ、
當寺縁起ゝ云、祭る所清滝權現ハ沙迦羅竜王の子ゝ一女
ゝ、長尾天神ハ延喜帝の御願ふよりて、御願寺とある

故ふ勸請あり、勝間明神ハ神縁社記詳らかなり、糸切歯

例祭九月廿三日ふ記を誤りて廿三日ハ同所笠取祭あり、

當寺の伽藍ハ山上山下ふゆりて上醍醐下醍醐といふ、土人長尾天神と以て本居と崇し、

すの部住吉相撲会の条ふ出づ

玉の市

廿日、洛東建仁寺の門前ふあり、今九月廿日ことを祭る相傳ふ建仁寺の千光國師宋西帰宋の日、船中暴風の難あり、くまゝ蛭子の像波濤ふ随て漂ふかのあり、栄西ことを収めてことを祭る風やと波静りて恙なきことを得たり、栄西寺ふ帰てこの社ことの今社夷の宮是なり、今ふ至りて西海ふ赴く人此社ふ詣て風波の難あらんことを祈る、故ふ旅夷と称ず、祭礼の日宮川町辺の居民、邊物造物ホと出もて、

旅夷祭

大般若

神輿一基持鉾ことふ從ふ、

黄大般若万重

みて花葉凡六百葉、故ふ大般若六百巻

だもれ實

よりて名づく、白色の者又ハ

大和本草 方土ふよりダ〻ともダモともも云、漢名未詳、

桂の類ふ三種あり、一種ハ白タブと云、葉ハ桂樹ふ似て香

氣もく冬赤き實あり、ツバノミことふ鳥好んで食ふ

其實の大さ木蓮子ふ似て小ふ肉を去まバ其肉ふ四き

實一ツあり、一種クスタブと云、其葉白タブふ似たり、最よく

桂の葉ふ似たり、桂葉ことクスタブの葉ハ共ともに本こと

とする凡世木ハ其葉のもぢり中ふ一條ありて桂葉ハ三條ふ

て本艸ふと如ふいてクスタブの葉も桂葉と同ク三条ふ

あり、白タブを中のことそもぢより又枝ともぢ處々ことの

クスタブの實ハ冬熟して黒しことも肉を去まバ其肉ふ

實あり、クスタブの葉の形ハ桂と同じ味も桂ふ似て香

氣ふもく多く白タブよりハ香あり、味辛し、木理クス

の木ふ似たり良材ふ、白タブ、クスタブともふ大木ふ中

白タブクスタブの實ハ油ふ火ふ用ふよくもも油多くて

こと力ふ肉と去中の實の油とをとりて燭

燭ふ作る、○荏桐とダモと訓ずハ誤り、

橙

秒の部ふ載たり

黄熟するとりあり、正月の部ふ載たり

嘉祝ふ用ふる故、委しくハ二月の部ふ載、

荔支

時珍曰錦荔枝本名苦瓜一名瀕蒲萄

及び蓮葉相似たるを以て名と得、五月実と下ル

八月

苗と生じ蔓と引茎葉巻鬚並ふ葡萄の如くして小し、七八月小黄花をひらく五瓣捩の形の如し、瓜と結ぶ長者四五寸短者二三寸青色皮の上ふ毳あり、熟するときハ黄色自ら裂け内ふ紅の瓤あり、子を裹む瓤味甘くして食ふべし、形扁ふして瓜子の如し亦痢渫あり、南人生皮を以て肉及び塩醬を煮て蔬ふ元苦く渋

蓮雀 和漢三才図会 今處々ふあり、形雀の大さのごとし、頭背胸赤色翅黑し黄白の四文あり羽尾の端畧紅其尾短くして黑し頂の上ニ毛冠あり眼頷の辺ニ黑く常ふ林ふ棲むふ群とゐて形美きことを以て人ニ愛と樂中ふ言ふ或ハ尾を抜き舞ハゞとし畧孔雀の形勢ふ似ると但し声好らず、比伊比伊といふ

九月 例幣 九

ど蓋練鵲と字同音ふて物異ふ

月朔日より十一日ふ至て伊勢例幣の諸家門前ふ注連を引門外ふ榊木を建て僧尼及び軽重服の輩門内へ入べからずその字ともるまでそれと前斎とハ十一日の朝幣使発足 公事根源 例幣とハ伊勢大神宮へ御幣を奉らせの人毎年のごとくれハ例幣と申す 続日本紀孝徳天皇天平始て伊勢大神宮へ幣帛使を遣はさるる詔て今より以後中臣朝臣と差して他姓の人と用ふるを得ざるを命ずのふ依て大中臣藤波家祭主ニてこれを掌ら

ゑむ最上所と神祇官代とそるる

ゑ

兼三秋物爽氣 連言の新式

漢和の篇ふ云爽ハ秋のすゝやけしとゝ爽ハ清快ニさやかふハ即ち清く快きの義 増韻 蔡松年詩 爽氣染出千林赤

袖の露 袖の時雨ともいふ如し袖の滝 瀬ハ涙ニ袖の露ハ涙ふの限るなる

添水 かの音案山子の条ふ出

八月 獻脂 せの部歌 奠の条ふ

注

蕎麥の花 時珍曰蕎麥一名荍麥莖弱く翹然として長し易し枝易し易し易し磨て麥のごとくもの故ふ蕎と名ふ麥と名と同ふ

うもるゝ立秋前後種と下し八九月収め荊ふ性最霜と畏る苗の高さ一二尺赤莖緑葉葉烏桕樹の如し小白花をひらく繁密粲々然として實と結ぶ累々として

羊蹄の實の如し三稜あり老る時黒色、

九月

蘊我菊 黄菊をいふ、蘊我とこの八名の説あまたどれもあらぬ、拾遺集雑「かのこの色のてこらさ」る池辺ゆとてうそが菊のちげこさそこの色のてこらさ」

袖の霜 繁き小枝こ、よこ人あらこ〇ちぎりきさそこ八繁きこ、いろのてこらこ八色のてりてきさゆとつへこ、

増山の井 拾遺古 **糸衣** ホふ出しこうこ、この部衣打袖の霜こいつる糸ふ注も、

七月

机洗ひ 硯あらひ 児童七月六日ふ机硯をあらふこと、

北野の神事ふふらふふるべし北野の社ふおいて六日ふ松風の硯る掩の巣と添て供ま、兒童の手跡と学ぶもの專ら北野を崇信ま故ふ机硯を洗ひ清め、北野の神ふ掩の巣あじ手向るるべし、つまこ、又二星ふ手向るものを書為もとり前説まるべし、

妻迎舟、妻あし舟、妻送舟 万葉 ひさかたの つまむかふぶね ぎ出らし、天のうらふきりしし立しーハ 新勅 天の川うきまりあらふひとぼしめつまむかふぶね今やこぐらん 新八帖

ひさかたの天の川門ハ明ふりつまむかふぶねのまやいひらん 續猿蓑 舟ありの雲ぎどもとあ汀しの影 東湖

辻相撲 公事ふあらぎ、ひづくとあるとつへ壁ハ禁裏御神楽ふ付て民間ふあるこ里御祭まこ勢州山田ふ行りしゆるい世人山田のつと人といふ傳ふ、むかしハ諸国ふありしこあり、惣て家財の類こ玄田ふハ、貪欲の道あるゆるいこ、と懺悔のこあふ、今世ハ絶てふ

衝突入 天和きこ、

爪紅 本草 女児鳳仙花と酢漿草の葉こ、むこ合こて爪こ染ふ、紅色こあるこ云 故ふ名く、

秋

蕭三秋物 露 露ひき 露の玉月令章句 露ハ陰液こ、釈て露こあり結びて霜こあり、〇増山の井ふ出せる波の露ハ、ふこぐの露の誤ま也〇

白露、袖の露、上露、以上頭字の部ふ達、**露の身**　露の身とい、露のごとき
もろふた身とのふ、ろ之、
曠野集　露の身ハ泥の　**月**　物理論　月ハ水の精、潮
やうなることのおもひ荷兮　ふ大小あり、月ふ新盈あり、
説文　月ハ日の照き処より生ず、故ふ哉生明といふ、魄ハ
日の蔽ハ処より生ス、故ふ又哉生魄といふ、日ふ當る時ハ
光て盈ツ、日ふ就ときハ明盡　○桂男、さらえ男、照月
次、新月、弦月、三日月、王兎、銀兎、玄兎、在明、哉生明、
既望、既生魄、いさよひ、哉生魄、暉素、金波、月夜、暁
月夜、夕月日、朝月日、立待月、居待月、臥待月、ゝゝ
月、廿日夕中、更待月、常娥、真如の月、心の月、胸の月、
盃の影、まつほし、朔日ごろの月　なまちの月、以上各
頭字の部ふ　**月の霜、月の雪**　杜甫、仲秋詩、
わかちて註ス、　満月飛明鏡、
帰心折太刀、轉蓬行地遠、攀桂仰天高、水路疑
霜雪林巒見羽毛、此時聘于兎直欲数秋毫、　**月**
の桂の花紅葉　桂男　酉陽雜俎　月中ふ桂あり、
高さ五百丈、下ふ一人あり、

常ふ斧ふて砍る、樹創ふ隨ひ合て、其人姓ハ吳名ハ剛、仙
と学ふ過ありて謫せらる、樹と伐ること○桂男ハ吳剛と云
ふ、八雲御抄　月の桂ハ光といふ、古今　久方の月の桂も
秋はあれど　もみぢすらしも　忠岑　冬の日
附り　西南ふ桂の花　**月**
の注ひ時　羽笠、　**の桂ノ子**　蘇詩注　杭州の天
竺寺八月十五夜
常ふ桂子ありて落つ、本草綱經　江東の諸處多ハ商
路の間ふて桂の子と捨ひ得、まと破ハ辛香、古老相
傳ふ是月中より下る、御彙　桂ハ木の名三五の　**月の**
秋と詩ふと侍ふ、実とハ秋ふ定ハきるゝ、
鼠　山説譬喻經　黒白の二鼠あり、互ふ樹の根と齧ふ、
乃至樹根ハ命ふ喩、黒白の二鼠ハ晝夜ふ喩ふ、
奥儀抄　無常の喩ふ人虎ふ逐ハ、野中の井ふ陷ハん
として岸の草とひくへ底とをんハ毒蛇口と開きてのまん
ゝ、又黒白の二鼠、のまゝ〳〵この草の根と食ハせん
まゝ〳〵ありて、毒蛇の為ふ害せらるゝ、是虎ハ平生造
惡の罪業、黒白の鼠ハ月日の過ゆく、毒蛇ハ地獄
ゆく〳〵是ハ月の鼠といふ、**樵炭經**の文ふ、　**月**

の剣 三日月の状と刀剣の形ふるくさるあり、

月の都 日言殿太平廣記 羅公遠傳云、中秋の夜時ふ玄宗宮中ゐて月と戯ふ公遠奏して曰、陛下臣ふ従ひ月中ふ遊んや、宮やの乃ち袂を取空ふ向ひ擲つ化して大橋となる其色銀の如し帝ふ請て同く登る、約まるふ行こと数十里、精光目ふ奪ひ寒気人と侵こと遂ふ大城闕ふ至る、公遠曰此月宮也仙女数百皆素練寛裳して廣庭ふ舞ふと帝問こと曰此何の曲ぞ曰霓裳羽衣の曲と、玄宗密ふ其音調と記して回る顧ふ橋歩ふ随ひて滅ぬ、

月の蟾、月の兎 玉兎 五経通義 月中ふ兎と蟾とあり、何ぞや、月ハ陰こ蟾蜍ハ陽こ兎と並ひ明こ陰陽ふ係るこ○杜甫詩云搗藥兎長生、○白居易詩云照地幾許人斷腸金蟾玉兎遠ふ知○蟾ハ月中三足の蟇、こと玉蟾とふ、

月の蝕 天経或問 星月皆日の光を借、日ハ月天の上ふあり月ハ日天の下ふあり朔日月行と日天の下ふ在て、日の光と掩ふ人地面の上ふ在てこと

き視こきハ其月の日と掩ふこと

が如し、然も寔ふ常と失ひざるこ人其光こそざる故ふ

こと日蝕とりハ月蝕ハ朔より望月ふ至る一向ハ立

度ゐて日月望む中間ふ正對まるとき地球障隔を、

月地影の上ふあり、日地球の下ふありて日光

こと燈こと故ふ月其光ふし是と月食去

月讀 拾穂抄 月よこ男、月讀月夜見皆月の名

男 こ日本紀ゐこの月ハ男神故ふ男とつふ、

月の出潮 性理大全 余襄公宴道云、潮の漲退ハ海ふ増減こるふ故こ蓋月の臨む所こ則水往て

こもふ随こ日月ハ右ふ轉り天ハ左こ轉る一日一周こて

西極ふ臨む故ふ月卯酉ふ臨むこと水東西ふ漲る、

月子午ふ臨むこきハ潮南北ふ平こ

彼竭き此盈て往来絶こ皆月ふ繫る

月の秋 御傘 露水ゐこふ結

夜こく花の春こて

植物ふゐこふ同じ、

月の宿 御傘 月とこる宿の

事こ居

月とあるじ 御傘 人倫ふあるこ、月

所あり、

月

の友 [御傘] 人倫之但し旬体ふるべし、月と友人倫ふあらず、朔日頃の月 [源氏浮舟の巻] つゐくちごろの夕月夜云云 [炭俵集] 細くつゐくちごろの宵の月 利牛○月のちゞめとつゐくちごろといひ月のさゝりとつごもりごろ、月の舟 半月をいふ、月のこぐみ 満月をいふ、蔦 蔦紅葉 時珍曰蔦ハ松蔦ぶら 柏の上ふ寄生、文蘿ハ是松の上ふ浮蔓ま○地錦 [大和本草] 葉ハ衣の紋ふ付るツタふ似て、冬月も葉ゆちも皆本草ふいつゝぶとし、和俗壁生草といふ、秋ハ紅ゐし、又常のツタハ是ふ似くう、冬ハ葉おち、[和漢三才畫会] 烏蘞莓 俗云本綱ふ埴墾の間ふ多し、藤 藤ふ花あり、一枝一房九十葉、葉長くして光いと、疎齒あり、面青く背淡し、白蘞の葉のごとし、故ふ烏蘞と名づく、七八月莖と結び簇をなし青白色、花の大さ粟のごとし、黄色四出蜜と結ふ龍葵の子の如し、生青く熟まれば紫く、内ふ細子あり云云是大和本草ふいへ夏蔦ハ秋ふ至て葉深紅愛まべし、

甘藷 [和漢三才畫会] 仏書に薯蕷葉顔の葉ふ比もれハ甘く頗黄狐の葉ふ似て蔓ハ其根の状仏手柑ふ似て肥り、大く攫渡者の如し、故ふ名づく、鎮江府志ふ所謂佛掌薯ことなり、

粒芋 其莖ふ紫の理あり、小く四くして味美し、

白栃 渋汁を以て枝と連ね曝し乾て、或ハ糸ふ繋て晒し乾す、初蕎麥稽稿と用て包宿して、よく糊と生ず、豫州西条の産甘美し、備州ふとふ次く、濃州及び尾州の産ハ長さ三四寸ぞこのつ、

妻梨 是さふふハ軒のつまなどと、

八月

絲雀 名の部繪行器の条ふ出り、

敦賀祭 甘氣比大明神ハ越前敦賀郡ふあり、祭神 仲哀天皇 [風土記] 気比の神宮ハ字佐同体ふ八幡ハ應神天皇の垂跡気比ハ仲哀天皇の鎮座ふあり、例祭八月十日○今月二日ふ十日まで、近国廿里四方の諸商人放下師狂言師等来つ集つい二日神輿洗あり、敦賀紙屋町と云所ふ例年紙細工の家墨燈篭竈ゝ出し、京の祇園囃と模

も三日神事四日と後宴と称し、町々の氏子東番西番を
ろ〻と引山と出し、地車をして町中と引廻る、山の上ハ一丈
ばかりの松と立、四方錦繡の幔幕、水引ハ洛の祇園祭の
山の如し、上ハ武者人形と飾る、山の數或ハ五、或ハ六、祭礼
當日ハこれと出る、天神の森と
いへ所、御旅所にて神輿遊行、

鶴が岡八幡祭 音

相州鎌倉ハ一名ハ雲井ノ峯、上の宮三座、中ハ應神東
ハ神功、西ハ妃大神、姉神下の宮四座、仁德天皇東ハ久礼
宇礼の二神、西ハ妹比呼、後冷泉帝の御宇、伊豫守源頼
義朝臣、安部貞任と伐時、丹祈の旨ありて、康平六年八
月石清水の神と相州鎌倉郡今の下若宮の地ハ勸請、
永保元年二月成就、義家朝臣修覆と加ハ治承四年十月
右大將頼朝卿ハ小林の郷ハ迂ハ今の宮ノ岡ノ、
毎年八月十五日放生会並ハ祭礼奉幣流鏑馬角力ハ有、

司召

敎隆卿記 司召ハ秋の除目ハ縣召と号
も、春の除目ハ縣召と号て、各拜任の輩ハ
と召、春ハ大政官の廳秋ハ外記の廳ハ於てこれと召、御
司召と称も、○司召定考同儀なれども猶この部定考

の条とも見しるし、今もこれ也、

月見

名月 今宵の月 八月の月 芋名月 望の月 十五夜 三五の夜 月華

事文類聚 歐陽詹亂月詩序云月之為氣久則繁
霜大寒、夏則蒸雲大熱、亦云蔽月霜侵人敵與侵俱
害、就秋之於時、後夏先冬、八月於秋季始孟終十
五之於夜又月之中、磐於天道寒暑均取月數則
磐宅四、況埃塵不流、太空悠々、嬋娟徘徊博華上
浮、身東林入西林、肌骨與之凜冷、神氣與之清冷
○名月 湖東問答 去来云三五十五夜月を以て名月と
いふ、このうちいづれの月もいづれも名月といふ故あるとも
きこえず、然ども今日名月の詩哥と作らんハむずかし故
實ハ限るべきもの、尤故實ハよろしく佳なるべし、又明の字
と用ゆるハ和漢とも三五の清光と賞し来る故ハ明
と名と通じるともいふて通用もべし、○今宵の月、今
日の月、以上十五夜の月ハ限るといふことなく且ハ今
宵と賞するとも旬中ハいづれなりとも「續藤蔭」
ふるこあるべしこうひやせんゝふの月 智月 ○芋名月
ハ芋むしり高盛て 歳時
御湯殿記 名月御祝三方ハ芋

拾遺 浪華の俗十五夜と芋名月といへ、十三夜を栗名月
といへ、○三五の夜、白樂天詩、三五夜中 新月色、○月華
五雜組 人いへ八月望月華あり、或ハ夕人夜半、或ハ人微雨
後、或ハ山谷八月のこゝろ、秋後の望とも云ふこと、あり、或ハ
いへその五采鮮明旁眼數十丈、金線の如きよの百餘道、
或ハ但紅雲こゝ、と思し繞るのゝ、臨川吳比部摘譚少卿し
時一度こゝと見るその景象鮮妍十態、きっこと見さ。所の奇〻、

月草、露

方媚真ふ人間いまゝこゝと見さ。所の奇〻、

草

時珍曰鴨跖草花と碧蟬花と、人三四月苗と生ぜ、
莖葉ふ〻て葉竹ふ似さり、嫩き時食ふべし、四五月
花とひらく、蛾の形の如し、内黄翅のごとし、碧色愛すべし、
巧面其花と採り汁と取て畫色と作す、青碧ふて驚の
如し、倭名抄 鴨跖草 和名都久佐 仙覺抄 鴨跖草、月草と称
す、月草ハ露草ゝ方の花ハ朝日影ふゝて咲と、此花ハ月影
ふ咲けバ月草と云ふ、

土茵

和漢三才圖会 土中より生ず、

月夜茸

大毒ありる

格物總論 燕春社ふ来り秋社ふ去る、故ふ是と社燕と云ふ、

人近よらぬ、

燕歸る

鶺鴒

和漢三才圖会 百舌、反舌、鶯鶯、馬鳥、俗ニ云真豆久見
飛鶺鴒のゝ〻て灰黑色、京師除夜毎ふこれと炙て
食ふを祝例とす、

九月

津村祭

廿七日○津村の御灵社、摂及西成郡大
坂津村ふあり、祭神鐵倉權五郎景政が霊とい、、振陽
郡誌 昔津村何某專ら武勇と励ゝ諸国と巡行して
軍術奥旨を極む、相模の国ふ至て一夕景政の社ふ
詣て神殿ふ通夜ゝ、時ふ神梟ゝ武勇を感ト託して
云、摂津の國難波の勝地ふ祝ひ祭ゝ、我將ふ法と擁護せ
ん、答云何と以てゝ證とせん、曰枕上ふ神幣あらん、明旦さ
めてこゝ、ばはゝして神幣あり、みづのらこゝと負ひ、津
村ふ帰て、義祠と造て神幣と納てこゝと祭る、御灵
の宮これく元禄のころ、御灵の大明神と贈号あり、毎年九
月二十七日、神祭神湯の式あり、津村の土人本居神ゝ、

椿の實

和漢三才圖会 海石榴その實四く無果花
ふ似て老て枯るとき、ハ殼四ツふ裂ひ中ハ子
海松子のごト皮と剥仁と取搾て
油と取、但千瓣の者ハ實と結ぶ、

露時雨、露

霜、露寒 古今 ことさらひこうくと申せしやたのく木の下露ハ西ふまくこまろり」暮秋の露のこうんあるとつゆ時雨こうふ露霜、露寒ハ露の気の凝んとそ云ふべし、

七月 願

の糸 公事根源 乞巧とハ七夕祭ことつくるり香花ことふへ供具これり、七夕祭ことのくて、庭上ふとことおきてさをのえ〜ふ五色の糸とうけて、一事を祈るふ、三年のうちふ必叶ふとそ、此ゆえふ乞巧と申をく 朗詠 憶得少年 念佛踊 洛北川合長乞巧竹竿頭上願糸多、白居易

村一乗寺村ふ念仏踊あり、念仏と唱へをどりとる故ふ此称あり、

兼三秋物 孫

まるち月 新六帖 秋の夜のひとりねぶちの月うけふ身と吹とふ庭の松風 夜算内大臣 八

重垣 〜〜まるちの月ハ十九日の月〜、

八月 蘇苔草

和漢三才品会 俗ニ云鼠茸、朽木及び老樹の根上ニ生ず、九十月盛ふ出一根座とふ〜数十義生ず、微円く泡頭鮑ふ似て、長さ一二寸、莖細く柔軟ニ、織の内外灰白色凡て灰白色ある者と呼て鼠色とそ此物浅黒色ある、故ふ鼠茸と称、

七月 七日 御節供

日本紀 持統天皇五年七月七日、公卿と宴し、朝服と賜ふ、 紀事 今日武家並地下の良賤、各白帷子と着ず、修ス家〜素麺と喫又互ふ相贈る、

七箇池

百箇池 事林廣記 漢宮七夕ふ百子の池ふ臨ミ、五縷を以て相轉をこと〜と相情愛ふ八〇七箇の池とハ星を祭ふ、七ツのたらひふ水を入て、鏡とつけてほ〜の影とうつすと云ふ百箇の池ハ天の川ともいふ、こ姫とハ棚機とも云ふ又百のこらひふ水をこつ〜ふる 夫人傳云、高祖

刀豆

時珍曰、莢の形ど以て名をるといふ〜もいつ人命ずる〜家ぞふ段盛式酉陽雑俎ふ云、楽浪ふ挾剣豆あり、莢横ふ斜ふてくの剣と挾るが如し、即此豆ありて一二丈、葉紅豆の葉の如くして稍長大五六月紫花ひらく、蛾の形のごと〜、莢と結ぶ長き者又ふ近し

微早義ふ似届して剣者三稜宛然さり、**棗の實** 時珍曰按ずるに、陸佃埤雅に云大なる棗とのひ小なるを酸棗といふ、和本草 夏芽を生ず故ふ名つけしなり○花の形春のふの部棗の花といふる条ふ註も、

兼三秋物

梨子 時珍曰、梨樹の高さ三四尺、実りて葉光膩あり、細き葉にして二月白花を開く、雪の如し、大綬紅瓶子梨、観音寺梨、妻梨、松尾梨、水梨、田梨、空閑梨、鹿の梨、さハの浦梨、山梨、木の種類多し、各頭字の部ふるのもて注も、

鳴子、鳴竿 朗唱秘抄 桙の先ふ鳴子とつけて、片山里ふ栗といふものと作りて猿と追ふし○秋の田畑ふ鳥獸を驚ふ具ふ

八月

長き夜 夜の短き至りハ夏至ふ過ぎて、夜の長きいさりハ冬至ふ過ず、然れども秋の夜と以て長夜とする所以ハ秋分昼夜等しく、初て夜の長きをおぼゆ、夏の短夜ふ對して秋と長夜とするの。

名の木散 鹿文曰按ずるふ、枫櫨柞ホのごとくにして、櫨ちる柞ちるといへべきと略して名の木散ちるといつるあらん然るを未練の輩士ハ名の字ふ拘ずして假用ふるハ可ならず、千梅も此事如何のよしハ多り、

滑煤草 和漢三才圖会 榎の樹むろふ多る者三四歩大小叢生浅褐色と帯内刻ありて甚滑其莖煤黒色奈女ハ滑ふ、猥ふハ煤色ふ、木ハ蘚の上ふ生ず大なる者傘すの如し、

中稻 和漢三才圖会 九八月暑ふ、菊収ると中稻とを、

中拔大根 三才圖会 八月ふ種と下し、彼岸の中ふ苗と生ず、稍長して瓶の尾の如きと中拔大根とを霜の後肥太る、

菜種蒔 注ふ不及、

中汲酒 半清半濁の称あり、

九月

鳴瀧祭 福王子祭 鎮守の社洛西仁和寺の西北、鳴瀧廿八日 諸神記 王城守護三十番神右白虎八神 高雄の麓下り、鳴滝川の辺ふ封ず、西朱雀ふり西澗院ふ至り九町の擁護神 擁州府志 福王子の宮ハ西山鳴瀧ふ、ありて此辺の地主の神ふて仁和寺の鎮守とす、西社とかふ土人本居神とて、同日ふ合せ祭る、紀事 鳴瀧

福王子祭九月二十八日、神奏一基鉾立本御堂の御所の庭ふ入元五〇福王子の宮祭る所斑子皇后と皇后八舞武帝の孫女ゐ〜て、吏部尚書仲野親王の女、光孝帝立て皇后とある、宇多帝を生ゐ入、此辺の地主神ゐ崇の奉り仁和寺の鎮守ゐ、滑稽雑談俗ふ五番先ひとり入、是〜一年中の諸社の祭祀の終ゐ又當月の外ふ神祭ちき故〜毛吹草ふ鳴滝祭廿八日と記を近来の俳書外ふ福王子祭と並〜載こり〜同社の祭と誤て再ひ出ゐ、

擂 和漢三才圖会俗名奈良俗ふ古奈良樹の高さ丈だうり花實擂杵の輩のごし秋月紅葉をる時人ことと賞を大和本草擂ど大奈良とり〜葉栗の如し秋冬枯て落ず四五月花ひらく栗の花ふ似こり、實八稚の〜く大〜其苞半つ〜む又ふ擂ふ木あり、材木とをべ即圓栗ゐり、

南天の實 蘇頌曰南燭株高三五尺葉苦棟のごとひ人家多く庭際の間ふ植俗ふ南天燭ゐ冬を凌て紅子と生ず德とをを〜とり入〇夏のふの部南天花の条ふ

り 七月蘭

宗奭曰葉岑門冬のごとく〜て稠し且鋭ゐり長さ二三尺四時常ふ青し花黄緑色中間瓣上ふ紫の點ゐり春芳しき者と春蘭とを色深し秋芳しき者と秋蘭を色淡し開く時満室尽く香し他花と又別こり山谷日一幹一花みて香餘うるものと蘭と幹数花ゐて香ゐるものと蕙とも大和本草豆世俗ふ花と玩賞をる蘭と真蘭ふあらず今の蘭八本草ふこれと出さず蘭草集解正誤ふ載を、

七月迎へ火 送り火 七月十三日黄昏ふ及び〜都部こゆふ聖霊と迎る七月十四日卯時来り次の日十六日午ら時ニ暁ん人最も中元と重ず家々猪陌冥衣の具と設け先人の号位と列ね祭て霊と燎〜女家則父母の冠服袍笏の類と具〜皆紙ふ為る者こと雖ふ紗と紵と〜れど紗箱とり入父母の家ふ送る女死をれば壻亦代りて送る、莆中ふ至るときハ則清晨陣設くると甚

報恩経五雑組

嚴しく子孫冠服と具し、揖讓盤折して神と尊び、迎鐘る
き以入る、祭畢て復送ることこと出ることと云、
ろの部六道 **虫送** 時民人鐘鼓を撃野外に送る
春の条に出、
これと虫送といふ凡旱歳に五穀の枯萎むと焼るこ
ろに茄の根の枯ると舞こと瓜の蔓の枯ることと上ることに
是民間の詞〇いの部 **木槿** 時珍曰此花朝に開き
蝗の条にあるべし 暮に落故に日及と名
づく槿といふ蕣といふ稽僅栄一瞬の義なるべし其木李の
の如く其葉末尖りて極歯あり其花小さて艶こ或八
白く或八粉紅単葉千葉 **室の早苗** 古今六帖
の者あり五月始てひらく、 津の國の
むろの早苗をいでそとことあるとそは今よりまてるべし
此三の夫木集に八きの國の室の早苗をもて入くり紀伊
國に年婁郡あまそ夫木のことに年婁
郡の早苗といふるりて古説に年婁の杜撰
なるべし、 **兼三秋物** **虫、虫籠** 雨雅 足ある虫
とりひ足あきと

とりひ蹴云此文に對もるのく敢て言に足あきも中と云、
雍州府志下賀茂の社司の婦人松虫鈴虫を養ひ籠
と作る其式纖細竹を刻て竈と造る内に一つの小筒を安
き土と盛て苔と敷き露草少しむうと種使合に所謂
露草に鴨跖草あり紫白の糸を以て藤花の形に作り、
籠の上より下に垂る其躰觀るに堪たり秋に至て虫と
入替の下に揭或八簾外に掛く昼に見て **虫合**
目に悦こしぬ夜に聞て耳と娯しむ
虫の声のよりあり
合せて遊ぶこと云、 **胸の霧** 思ひの晴やらぬ **胸の月**
秋の雲 胸の月胸のうちの曇らで
清きるべし猶深意も侍るべし、 **八月** **紫花**
花 花紫草 和漢三才画会 椋の木の上
この部に出、 **椋葉** に生ず形状榎葉に異なる
ことなし、 **椋鳥** 漢名未詳 和漢三才画会 椋鳥に小樓故に俗
呼て椋鳥とのく形小鳩の如くして項白く
背灰黑色背の下黑白層く眉淡黄頷の以下腹に至
て俱に白し翮の上灰黑色の斑あり、 翅の本微白羽黑

白交れる嘴黄色鳧の辺微黒と帯脚脛黄その声鵠ふ似て喧く好んで群をなす又ふ椋鳥あり大相似て小く、

九月

撰虫 公事根源 是ハあをび殿上の道遥として殿上人とも遊びて蟋蟀野あをへむらいて、

木蘂子 藤恭白豪華此樹葉木槿ふ似て薄し細き花黄ふして槐ふ似て稍長大ご子殼酸漿ふ似て其中ふ実あり熟せる豌豆の如く円く黒くして堅硬し数珠ともるふ堪ふる者是なり五六月花収むし南人以て黄と染む甚ご鮮明あり

椋の實 時珍曰無患子樹甚廣大枝葉椿の如し特ふ其葉對生ご五六月白花を開き実を結ぶ大さ彈丸の如し状銀杏及び苦楝子の如し生ハ青く熟ハ黄むとき八油燥の如し中ふ核一箇実中一の核形の如し暑実中一の核堅く黑くして正珠の四

剥栗 搗栗の類なり、

七月

烏鵲の橋 七夕の時の橋と、

盂蘭盆 日本紀齊明天皇三年七月始て盂蘭盆を設ケ同五年勅して盂蘭盆会を諸国ふ下し講ぜしむ釈氏要覧盂蘭盆ハ是釈氏の孝と恩と報い苦と救ふの要なり白蓮の母をもくと以て始とす梵語ふ盂蘭云目蓮比丘その母の餓鬼中ふ生ずると見て即鉢を以て飯を盛り往てその母ふ飼ふ食いまゝ口ふ入らゞ化して火炭となる終ふ食ふことを得ず目蓮大ふ叫びこ馳還り、佛ふ白す八佛の曰汝が母罪重し汝一人の力ふよる所ふあらず當ふ十方衆僧の威神力をもつて七月十五日ふ至て當ふ七代の父母現在の父母厄難の中ふあるりの為ふ百味五菓を具へて以て盆中ふ置て十方の大德に供養をべし仏衆僧ふ勅して皆施主のこゝろふ七代の父母ご兄願し禅定の意と行はしめ終て後食を受ることゝ目蓮の母一切餓鬼の苦と脱ることを得たり目蓮仏ふ白す永く来世の仏弟子孝順と行ふ者又盂蘭会を奉じ、もつてすることを得せしむべし可なりんや仏言く大善し故ふ後代の人これふ因て廣く華飾をなす乃ち木を刻

竹を割飴鰕鬚糸花果の形をなし工巧の妙を極るに至る

鬱金の花 時珍曰鬱金二種あり 鬱金香是北人用ふる者ハ其苗薑の如し其根大小指頭のごとし外黄内赤く人以水に浸し色を染じ又微香氣あり又曰四月の始め苗を生ず薑黄に似く花白く質紅あり末秋に莖心を出して實をなし嶺南の者に實あり小豆に似て殼なし堪ず

馬追 江東の俗スイトクせと云其声スウイとなくごとしいまこに似て小さく色純青し尾に剣あり又るきもあり雌雄の異あり中元の時夜鳴に鳴其聲紡車を撥ごとし関東の俗言に馬追という

兼三秋物 嘉元御百首

上露 凡この上ハ野ごとの草の上露ハ落て下葉にまさむもびろう

鶉 和漢三才圖会按むるに處々の原野に多くこれあり甲州信州下野最多し畿内の産又勝れり黄赤に白斑の彪あり珍き彪のごとき人甚これを賞す其声知地快と云ごとし数品あり啼々快と上も毎に早且日午夕暮に鳴凡春二三月始て鳴告種に至て声を止む六月又更に声を発し中秋に至て声を止む人是を養ふ其雌ハ小く足卑く囀らず呼て阿以布という○片鶉駈鶉 各頭字の部にわかちて註す

鶉鷹 鶉を取る鷹多し

鶉衣 荀子曰子夏之衣懸結ゝて鶉のごとし

御仝 只俗人の短き着物をいふ然とも秋の季につゆ生類に二句去ゝ○一説に衣の裾の破れて鶉の毛に似るをいふ

鶉の床 御仝 鶉の床とてうつ出せるに夜分にあらざる物の處に鶉の床とてうつ出せ此道理をマ簡もるに余の鳥とりうてまろに空を翔らむ畫も草のうちにのこりるに此鳥ごうう

鰻 和漢三才圖会鰻鱺此物冬春ハ泥穴に蟄し立と床とりても夜分にうちもとと定まるとうこ

簗 月に五六度泥を出し此時味勝れ子を生ず鰻して長サ三四寸性滑にして利く泥中に潜る故捕がたし江州勢田城州宇治名を得さう 紀事 秋月鰻鱺流に従ひて下る是を落鰻鱺という簗を以てこれを捕る流に従て簗の中に落入故に捕易くして魚店に

多くこれを賣る、

八月

宇佐宮祭

十五日○豐前宇佐郡築紫ふ

なり、欽明天皇三十一年、豐前國厩の峯菱形の池の上の民家の児ふ託して曰、我は是第十六主譽田天皇廣幡八幡、我を護國靈驗威力大自在王菩薩と名く、迹を諸州ふ神明ふ垂る、今頭ふ此地ふ在まゝ、ありてこれを奏せ、勅して祠をうつ八方ふ八色の幡を立つ故ふ託宣して八幡と号ス○社説ふ當社祢宜奏して云、大神の託ふ宣く、我元量劫よりこのかた、三有ふ化生して善行方便を修し、諸の衆生を濟度せ、我名を大自在王菩

八幡事根

薩と申せ、帝叡聞あり、てこれを許しゝまふ

源八幡ハ垂跡の号、後ハ豐前國宇佐ふ鎮座ましゝ、聖武天皇東大寺建立の後、巡礼ましゝ、託宣あり、依て彼寺ふ勸請申さしむ、ときに勅使をゝハ猶宇佐ふ奉ゝ、○宇佐宮祭ふ、

宇治花園

ハ勅會ゝ放生会ふ此地を始とす、

山城風土記兎道とハ輕島明の宮の御宇天皇の御子、宇遲の稚郎子、桐原の日桁の宮をつくり宮殿

ゝ多くふよりて御名と宇遲とり、一年浪華三除奇云兎道の稚郎子崩御の心と新勅撰田目ゝ人のなくゝや露あゝん世と宇治山の秋の花園ゝ思ふ、宇治の花園ハ桐原の日桁の宮の花園ゝ故ふ慈鎮和尚と稚郎子崩御のこゝろをよゝ千梅春耕とゝふ頼通卿の花園と記せり、稚郎子の崩御のこゝろを詠る哥ふ臣下の花園をこゝろ合せて詠る例ふし、殊更慈鎮ハ宇治の関白頼通公とゝり五代後法性寺無実公の子ゝその先祖の花園とゝゝ、

薄紅葉

薄色のもみぢとゝふ

梅嫌

和漢三才圖会梅嫌木心字未詳葉明〻光り微ふき鋸歯あり野梅の葉ふ似て小く多ふて、春芽を生ず五月小白花を開く暑南天の花ふ似て子を結ぶ初ハ青色十月葉落て子紅ふ熟ず枝幹ふ添て多く美ゝ一種白き者あり異とし

漆の花

韓保昇曰漆樹高サ三三丈餘皮白し葉椿ふ似て花を槐ふ似さゝ子ハ午李子ふ似て本心黄ゝ六七月刻ゝ滋汁を取る

茴香の實

[和漢三才圖会]倭名久礼乃於毛 本綱茴香ハ宿根より深冬ふ苗と生し春とあを、高さ三四尺肥さと莖葉糸の如し五六月花開く蛇状の花のごとくして色黄ハ實と結ぶ大さ麥粒のごし輕く細き稜あり俗呼て大茴香とも今惟寧夏より出る者と以て第一とす他處より出る小き者これを小茴香といふ按ずるふ懐香と大茴香と称る者ハ八角茴香と本朝ま小茴香と称そる者即懐香也和多くこれを種て用ふ高さ二四尺肥さと莖粉青色細き葉浅緑糸のごとく柔軟夏ふ花をひらく淡黄色子を結ぶ形紐の麥ふ似て小く筋稜あり中の子ハ皮と同色ふくこゝろえがたし飛散る処ふ苗を生ず

鶏卵

[ひらくさ也]一切の國史草史和名抄ふふ此名あるかのをこゝ草花肆ふ尋るふまらず或絵師ふ尋ねて得るふ栗の異名[大和本草]海うに在りといふさもなくばきふや、**海雁**[大和本草]其大うに者常の雁ふ比すれば微小あり色灰色の如し味及び足黑し其頭ふ環の如き白色ゆゑ翹短と注有、

九月

太秦の牛祭

十五日[紀事]山城國太秦の廣隆寺ハ常盤村の南山の内村西北にあり、桂の宮院内ふ伽藍神あり、大辟の神社と号そ、祭る所の神秦の始皇帝ふく、[元亨釈書]聖德太子九つの伽藍と造る、四天寺法隆寺元興寺中宮寺橘寺蜂岡寺廣隆寺の別号池後寺葛城寺日向寺[紀事]上宮王院の庭ふおいて牛祭と修す寺僧各集会す相傳慈覺大師帰朝の日順風と摩多羅神ふ祈る、叡山の後此神と叡山の麓ふ勸請す赤山太秦もまた此社あり故ふ今宵寺中の神事も摩多羅神と祭る者ハ寺中の行者紙衣と着牛ふ乗アて上宮王院の前ふ出祭文を讀誦す是悉く懺悔の詞ふ[illegible]ハ寺僧ふ[illegible]者ゴ[illegible]と修せ[illegible]法令畢て明前ふ角力ふ[illegible]寺説ふこの会ハ大念仏会と称す十一日の暁開闢十三日の暁ふ至ての結願[illegible]

亟玉州橘[大和本草]

本草温州橘其葉蜜橘ふ似て薄く小く其実肥蜜橘ふ似ずして大きも亦同し、**漆樹**漆樹の注八八月の

部漆の花の条ふをえらう、[ひくうせる]漆の木の枝梢迄ふ悉く鋸と以て挽目と削其挽目より脂と発て是則生漆汁と、奥羽及ひ下野和州尤多し、中國ふと所々あり其脂を掻取諸國皆六七月ことし、九月ふ出せるハ違ふえ、

裏枯 [御傘] 草葉の外色づきてうる〳〵事)らうれとむうとハせると蘭野邊原麦などの文字と入るゝ、植物ふ二句)草の名草の字ハらで植物ふ三句し、連ふ裏枯過て秋草の句ふうゝしいふ字かきもせざれも俳ふハ今一有べし、元五 ◎青蓋云木の梢の枯るともらら枯ところうる者あるとつ渙し、御傘の文体ふて草ふ限れることを

梅紅葉 梅の木の葉の紅葉せり、**うら枯と寒** 秋の寒さ

ふ

ね

いの部ふ

の

催せ出す

七月

残る蚊、残る蛍、残る蠅 [貞享式] 残るとらふ字ハ其季ふ此季ふ残らるゝ、残るといふる道理ふ、中暑譬ふ残菊ハ重陽ふ残ることと、残る蛍ハ何ふ残るゝさも残るの字ハ総て其季の次ふ取て此論と残るの字の例と

まそへ一〇青藍云年浪草俳諧歳時記ふ残る蠅と通俗志ふあらひて六月の部ふ出しらもとも、通俗志ハ椎瀧の書ふして蕉門の式ふ違らも、故ふ今改て秋季とも、

残暑 秋暑 [山谷詩] 西風挽不来、

残暑推不去、〇梢まて来て

みる秋のあつさうふ 支考

後の数入 春の部ふ注ス後の

空断らぬとも、秋季ふ連さらぬ秋さるべし、発句と秋季のけうらひあるゝ後の字ふ及ぶ、

八月

野口念佛 十五日 播州加古郡教信寺ふけうれと野口念仏といふ清和天皇の御宇教信といふ者あり、姓氏詳ならず、或ハいふ南都興福寺の住僧永西坊の弟子なりと、加古の駅舎の北ふ草庵と結び、常ふ西ふ向ひて称名念仏を性に愛す、て旅人の荷を助け労を救ふ貞観八年八月十五日完薬の郷ふかいて、盗賊のうらふ殺さるゝ首ハ教信ら庵ら贈るゝ、骸ハ其地ふ葬る、毎年八月十五日僧徒多く教信寺ふ集りて仏事念仏をし、教書の畧ふ云播州勝尾寺ふ僧あり、勝如と名く、八月望の夜一僧来りて

門と敲く即迎へ入る客僧いへ吾ハ播州加古の教信と
念仏の功力ふかうして今宵極楽ふ往生をすと尊僧ハ必
聖生の今宵往生をべきいんをきりて去る時ふ
空中立音楽きこゆ明年八月十五日の夜果して死せる

彼岸 春秋の彼岸ハ昼夜等分ゆへ長短なし仏道
ハ中道と崇ふこの時節まことふ中道の辰ゆ故ふ
仏事を修ス提謂経ふ浄土三昧経ふハ王子ゆ善を修ス
ことゝ云へり八王子ハ彼岸ふ到ル八王子と八立春春分
立夏夏至立秋秋分立冬冬至ゆ也天神の諸神陰陽
交代ス時ゆこの日梵天帝釈鎮臣三十二人司命司録閻
魔大王八王使者悉く出て四方を巡り見人民の善悪を
校へ録ス故ふ善事を修ス

善道ス大師観経釈 念仏して西方往生の願行とふ冬夏の両時を
取ゆ春秋の二節とス仲春一月仲秋八月両時ハ正東より
日出て真西ふ没ス弥陀仏の国真西日の没所ふあるゆ
故ふ弥陀の在所を衆生ふ指示して往生をとゝけむとス

後の出替 紀事 要略類要云秦の人本家婢を
得て一子を生ひ妻ゆ妬と悪ミ包て隣家
ふ與ハ郷家人ふ富貴ふ本家貧し後二月二日を以て
取帰ル后復本家富隣マ貧し和俗二月二日ゆ家僕の
交代の節とスルゆ元此ゆ
本くゆ後二月二日八月二日ゆ

野分 月令仲秋月令風至注音風疾
風也 倭名抄暴風漢の

野山の色 御今 ゆ
詩抄云八夜秋乃和木乃加世
二句ゆ中暑又枯野ふ色の字をへ
ハ秋ゆ枯野とも冬ハ冬ゆ

野菊 野原ふ自然
と生ずる菊と云へ花葉とも菊ふ似て小ゆ褐紫の
花多し稀ふ黄花ゆ是上古より本邦ふ有る菊
ゆ毒ゆ食ふべからず今人家ふ植て翫ゆ

鴉 和漢三才図会 按ずるふ上古ハ野菊の外ふし
ふりのハ唐土ゆ来る俗云野雁ゆ頭頸灰白色背
の端黒く其背ふ黄赤紫の紋文あり朝深黒腹正白
脚掌蒼黒ゆて
后の趾及蹼ゆ

九月

後ず雛 滑稽貫雅談和国の女児雛遊
とゆ古き物語ゆも出ル上巳の節ふ拠ル
今又九月九日ふ賞ス女児多し源氏物語ふハ常ゆも

雛ゐてとびもてこそえさるは、重陽ふをあそぶ左もあるべきう、俳諸是と名づけて後の雛祭ことして後と、上巳ふ對して謂ふ。

後の月

点の部十三の条に注す

夜の条に注す

野の宮社 別 桂川の御

後 山城国葛野郡小倉山の下椿原ゐいかく伊勢七齋宮、始此所ふ栖ゐあふよりて、伊勢太神宮を勸請も、此所嵯峨野ゐ故ふ野の宮と称ゐ。延喜式 九齋宮の親王定て畢て、宮城の内便ゐ所と上して、初齋院ゐ、後禊して乃ち明年七月ふ至て此院ふ齋を更ふ城外の浄野と卜し、野の宮と造て八月吉日を卜して河ふ賊て後禊して即ち野の宮ふ入云云

○野の宮の別と八齋宮羹ふ籠らせ給へて二年めの九月伊勢へ奉ゐ給ふとき、天子へ御暇乞ふ参内しゐ給ふ、此時天子御手づから由豆の爪櫛を齋宮の御頭へさしゐ給ふと云を別の櫛と申とぞ是ふよりて伊勢齋宮ふ移ゐ給ふ故ふ野の宮の別と申ゐ。

この爪櫛八素盞嗚尊播磨姫

ふるはゐ因縁を以て齋宮ふ櫛ゐ給ふ又別の御櫛由豆の爪櫛

日本紀 四 崇神天皇六年、天照御神と豊鋤入姫の命ふ詫して大和國笠縫の邑ふ祭ゐ給ふ。

同書 六 垂仁天皇廿五年三月天照太神と豊鋤入姫命ふ離ゐて倭姫の命ふ託ゐ給ふ。

同書 景行天皇二十年、二月五百野の皇女とつゐして天照太神とあのりゐ給ふ。

三代くくのゐ給ふる故ふ代々皇女と伊勢へ奉ゐ宮仕ゐ給ふ。天皇即位の後親王の内處女とえらゐ太神宮の御給仕と定給ふ。

内親王ゐ給ふ、諸王の姫君を定ゐる例ゐ給ふ。

ゐと定め奉ゐ二年めの八月より翌年の九月迄野の宮ふ

ゐ給ふ此間三度の神事三度の禊ゐ給ふ。

元亨年、四十一代の齋宮、後鳥羽院の皇女素子内親王の後、

此事断絶ゐ給ふ。

○九齋宮群行八九月十七日ふ其前日桂川ふおいて禊を修ゐ給ふ。桂川の御禊ゐ給ふ。

桂川八山城國

殘菊

菅家文章 黄花之邊重陽世葛野郡ゐ行ふ。

俗謂之殘菊。○重陽以後の菊ゐ殘菊と云。殘菊の宴八十月五日ふ、冬の部ふ入べし。

殘草

菊の異名 藏王ふ載ゐ殘る故ふ殘草と云。

野山の錦

おくれ殘る故ふ殘草の紅葉の名ゐ付べし。

くの部草の紅葉の条ふ注せ

との部ふ
倦せ出を、

く 七月

化生

[五雜組] 歳時記云七夕ふ俗蠟と以て嬰兒と作り、水中ふ浮へ以て婦人子ふ宜しきの祥とす、こゝ化生とのふ王建詩云水拍銀盤弄化生是こ今の人泥塑嬰兒或ハ銀範を以てまろる者、化生と

苦丹

[くさぐさ世こ] 草花譜ふあるもの、葉、蘭ふ似て少く狹く短し、石菖ふ似てまのきこゝ、六七月莖を抽で小花をあらく穂とあるも淡紫其蒼さきを愛まべ、然るふ大和本草ふハ、觀音草無花無穂といへり、京師の俗中元の日此莖を以て蓮の飯と縛ふ觀音草の名義ふあるこの、

常山花

[和漢三才圖会] 根と常山と名け、葉と蜀漆と名く、和名久佐木、處々ふあり、其葉甚だ臭し、高さ丈許、葉梓樹の葉ふ似て圍く尖て、畧皺ありて澤あり、六月細花を開く、白紅雜攢る、

常山の虫

[同上] 蟲ハ此木株の中ふあり、蝎木の心と蝕ふ、六七月株を破てこれを取用て瘧の藥ふ入る、或ハ殺て小兒ふ食ハしむ、凡蝎を取の法、虫ある木ハ株ふ必小き穴あり、管を以て水を中ふ入るゝ、虫首と穴より出て、輙木と前面端と縛りて、ゝと探り瀉ふ、ゝと時、黑き煤と生る者、粳の奴麥の類の如し

鑣虫 蝨

[和漢三才圖会] 書虫俗字正字詳ふ、按ずるふ此虫莎雞のごゝひ、翅青く腹黃色、前脚長く疾走つて跳る、毎ふ穴ふ出入まる故ふ獲ゝ、秋鳴声馬の轡の音ふ似たり、

蛁蟟

[和漢三才圖会] 時珍曰秋月鳴て青紫ある者、蟪蛄ともて、因て名づく、

粟奴

粟の苗ふ穗と

兼三

秋物

降り月

[滑稽雜談] 師說ふ、ふゝぐり月ハ十六七夜の既望をぐる月とい、夜迄の月次第ふ魄と生ぜ然るハ居待月の須より、廿二夜迄の月ともいふべ、藻塩草の傾くのると望ゝぐりともぐり月ともいふ、義も捨べらまゞ、

葛、同根と堀

[直葛が原] 真葛

[和漢三才圖会] 真葛原 真葉朝薄く

楮の葉ふ似て面青く背白し、凡至まいり、飜る恰も掌と交まりとし、婆婆ゝて声とふまゞ、故ふ奇人葛の

葉の裏見て称し人の恨ふかしと、[大和本草]根を冬月或ハ春いまだ苗を生ぜざるときほりて用ふ長きこと数尺乾し用ふ葛根是なり云、古式八月の季なり、小審、○真葛の真ハ和むる辞なり、真葛ヶ原ハ京師知恩院山門の南ふかくなどと、葛の生ずる原といふなり、

花壇 [貞享式] 今按ずるふ花壇を花畠も決して秋ふ定むべきなり、

草の花、草の実 諸草のさくい春夏ふ花を開く者あまたど秋多きゆえ故無名草花を秋とも、実もまた然り、[古今]みどりふる

栗 つ草なれど春ハ花秋ハいろくの花ふそなりなる、

芋 この部蓮芋 近江國長浦観音寺より出ッ微赤く甚だ大きゆえ漿多く味甘し、中ふ消るがごとし、

九万疋 鱯一名九万疋 [古今]この部鱯の条ふ注を、

八月

桑名祭 十八日、春日大明神の社勢州桑名の城下ふ祭る神四座別當仏眼院説ふ云経津主命ハ神護景雲元年下総香取の宮より勧請ス又武甕槌命ハ正應二年八月十八日常陸國鹿島の宮より勧請ス天児屋根命姫大神ハ永正二年八月十八日伊賀の名張より勧請ス、毎年八月十八日を以て祭辰とする也、応應永仁の月日を以て祭を修するといふ、○先十七日、社前の南北ふ車輌を飾夜ふ入て試乗あり翌十八日祭礼のとき、件の車を南北へ引渡し音楽を奏す明和十年の春回禄以前ハ、両社六座〳〵北三崎の神社三坐南春日の神座三坐共ふ往古ハ春日鎮坐の日を以て祭る回禄後祭礼延引ス、三崎大明神ハ土地の神ゝ鎮座の年月詳ならず 凝洲寄 鳥洲寄 泡の洲寄合せて三寄といふ又七月七日の神事あり、氏子員弁川ふ於て石とりて来て両社ふ献ずこれを石取の神事といふ此日雑遠物と出ず、○此八月祭ハ天武天皇の祭礼と記せる書あり、日本紀ふ天武天皇元年九月朔車駕還伊勢國桑名宿ニ云、今駅中ふ神社あり、と記す、

苦参引 時珍曰苦ハ味を以て名く参ハ功を以て名ク、[和漢三才図会]其花茎の梢ふ穂をふき七八月開く茎根葉とともふ薬用ス故ふ根を連ねこれを採る、

薬堀

秋野山ふ出て藥草とする〻茯苓突なと句ふ〻うそ秋とまる〻し、**虞美人草** 大和

本草 名花譜云花四瓣色艶罌粟ふ類〻そふ、園史云呉俗呼て虞美人草〻云、是ハ四五月花をひら〻く者〻 花譜 美人蕉 紅蕉花 此芭蕉の一種 類說 褒斜山谷の中ふ虞美人草ありて彩鷄冠のごとく大ありて花ふ〻しく葉皆相對て或ハ虞美人の曲を唱られハ兩葉無幸〻〻く頗る節拍ふかなうが如し、○鷺水が新式ふ山水あるとらハ

もの何しの草をいふるを、**栗茸** 和漢三才圖会 山原ふ生て高さ五ふ過ず、纖四五分円く卷正白色、剥さる栗の肉のごとし、故ふ栗茸と云、**下簗** きの部 落鮎の条ふ注す、

九月 菜

莫の代衣 きの部 菊酒の条ふ注す、**栗の節供** きの部 菊の節供の条ふ

併せ出す **九日小袖** 菊襲 清最正徹記 九月衣類菊襲 御白裏紫う〻〻 ○地下良賤今日縹色の小袖と着し、反ふ相賀ふ是て九日小袖と云、**鞍馬祭** 九日 諸神記 鞍馬寺由岐の社

天慶年中勸請す、神社啓蒙 鞍の社ハ山城國愛宕郡鞍馬山ふあり、祭る所の神一座大己貴命 ○此社ハ天子不豫世上騒動の時鞍と此神前ふ懸く故ふ由木と号く蓋大己貴命少彦名ともふ疾病を療し天下を治るの神なりを

ゆて五條天神及當社ふ鞍をかるの遺法なり或ハ或ハふ祭る神素盞烏尊なり例祭九月九日〻八日の夜氏子の男女供物を旅所ふ献す、當日神輿本社ふ入、**勸學會** 十五日 三月九月十五日 一年兩度行ハる

三月の条見合をべし 八公事根源 勸學院うの大学の南ふ此院を立られしうハ南曹とそ申めり参綱大臣遠き慮

ふおやしなうをそ子孫親族の学問をなくめふ建立云、**呉服祭** あの部 穴織 祭の条ふ併せ注す、**胡桃** 庖厨本草 此木ハ多し、其実核四く大く、色淡く皮厚く硬く

して破ぶくし、仁脂多く味最も美し、**槇櫃の實** 蘇頌曰槇櫃の木葉花実酷く木瓜ふ類す、木瓜ふ比もれバ大ふして黄色ふ至ると雖ふ

惟蒂の間とこのふ重蒂乳のごとくものあり此則槇櫃

大和本草 花ハ林檎ニ海棠ニ似

九年母 大和本草 俗ニ九年母

ておくまこと開く、實ハ秋熟す、

といふ名義未詳、木ハ蜜柑

より長一丈ばかり早く実る、

栗 事類合璧 九月霜降く乃チ熟ス、其苞おのづから

裂て墜者久しく藏むべし、苞裂さる者腐易し、○

落栗、毬栗、燒栗、搗栗、紫栗、剥栗、打栗、出落栗、三度

栗、山栗、雑栗、搗栗、谷

頭字の部にわらちて送、**熊栗架と搔** 特珍曰 熊石巖

枯木ハ在て山中の人ことごとく熊舘をこしらへ性ふかく木ハ上り

好て栗を食ハ故ハ樂縁し梢ハ至て枝と折て並べ鋪て

居所と設く是を熊の

架といふ熊舘の類し、**茱萸** 和漢三才圖会 胡頽

大抵三種あり其葉

と實少し異なるのみ、一種春月に當て苗と種る

時實熟す大さ小棗のごとき者ことごとく苗代胡頽子と

名く一種五月実熟す大さ棗のごとく茎長くして下

垂す一種九月実熟す小く其大さ櫻の子の如くし

て簇り **草牡丹** 大和本草 葉ハ牡丹に似たり單の

白花とゆたかに實牡丹ハ似たり宿

根ゆたかに生す又實とまさて生す是又牡丹芍藥の類し、**草の上** 菊の異名 堀川百首

の句ハ草の上ゆたかに菊の花うべ

こそ草のうへとあり 医房

草の錦 野山の錦 草木の紅葉を錦ふるこいふ

の野ふかくゆたかに咲ける 新続題林 織いろこそ錦やこん秋

花の千種ハ 邦忠、**崩魚簗** 下ノ簗の破壞する

とふ魚簗の形狀

春の部上り魚

簗の条ハ注す、**暮の秋** 暮て行秋とふ秋

の暮ハ混ぜやらぬ、**九月**

盡 九月の晦日をいふ、

や

七月

八幡安居の頭 十五日 紀事 凡安居の頭

以前その頭人を指点す、先前年の十二月朔日より翌年

八大経菩薩故ハ三年

の十二月十五日に至てハ幡山下の郷家安居の頭と

動む御家村里中の長とゆくその土地の中ハて姓氏ある

者あり又十二月八日今日石清水安居頭人の宅ふおいて、

柳散 晉史 蒲柳の質秋ハ望て

達所小綱の神人長吏の補任と授けることを指部といふ又十二月九日頭人の宅ふ御家衆を饗應し能拍子ありしことを古那志といふ是小習礼の訛なり又十二月十日頭人夫婦移山不動堂の前ふて垢離を修をこゝにて精進入とりの又十二月十三日頭人浄衣を著しゝ所の社ふ参り奉幣けり頭人の婦も又ことふ從ふ並ふ御家烏帽子浄衣を著し奉供もこの行粧甚ご古風なり荻生川ふ橋二ッあり一ハ安居橋と名く是安居當人の渡う橋ゝ常ふ不浄の人を禁もこ頭人ことを渡ゝバ今日山上相知る所の社僧の坊ふ止宿して精進潔斎もなり此間西郊桂の里ゝ女子孫夜又白布を以て頭髪をつゝこ素ゝて挂飴と捧ゝ是と桂帽子と称もこ今京の童謡ふいゝ桂帽子是ゝ十月十五日安居頭人夫婦社参本社の前ふ大きなる松一本建ゝ白布二疋とその上下の枝ふうけ布の枝と伐携て頭屋をそこの松ふ登せそのうけ布の枝と伐携て頭屋ふ帰ゝ後代修頭の殺とす

糒米 本朝食鑑 今製なる焼米ハ青稲を以て稃糠と去り炒り過して搗ことを舂き糒米とす

此と焼米と称もこ甚佳味ゝ勢州荘野の市上ふて焼米を造る青麥艸を以て俵子と作ることを畏くて四方に送る

藥師草 弟切草と の部ふ出べし

益母草 めの部ふ出べし

灸花 【ひくくせゝ】 微紅ゝ児童其花をとり唾ふて茎付方と上ふ付て手足或ハ頭ふ貼ふ灸のごし依て名とこ○是和産ゝ其蔓葉女青ゝ似て七月葉の間ふ筒状の花をひらく五瓣ふて少しく瞿麥の形あり

やんま との部蜻蛉の条ふ出べし

兼三秋物 **蕓薹** 和漢三才圖会 和名夜万都伊毛俗ニ夜万乃伊毛今云長芹ゝ其根の長さ尺ばかり周ゝ二三寸灰黄色肉白し煮て食ふべし 救荒本草 蕓薹溪の辺ふ出ゝ葉ゝ似て鰻ふ変ゝ半変ゝる者とゝる人往ゝ時瓜水ふ感ゝて鰻ふ変ゝ者とゝる人往ゝ○此者蕓薹とゝ蕓藥とゝ同ゝ又山藥とゝ初め唐の太宗諱と蕓とゝふ因て辟て蕓藥と改む又焼帛宋の英宗の諱と蕓とゝふ因て山藥と改む

朗恒秘藏抄 焼きあとハ馬おとの尾髪ときつてたきみてその余りと焼て田ふとゝ(ゝ)其髪とりきて鹿のとのぬ(ゝ)そゝと焼 ものあらハ

八月

八幡祭

放生會 八月十五日堵国 放ち鳥 此とりとい(ゝ)

どゝ男山の神支と以て京師の人八幡祭或ハ放生会とい(ゝ)社頭美豆の南八九町ふあり京と去ること四里余男山石清水と号或ハ雄徳山鳩の峯と称ス欽明天皇三十一年冬肥後國菱形の池の辺民家の兒三才の時神託して云我ハ是人皇十六代譽田天皇也と是ふとりて豊前國ふ鎮座して八幡太神と称ス傳へいハ貞観元年秋七月八幡太神鳩の峯ふ移ること紀の行教南都大安寺ふ居ること僧姓ハ武内大臣の裔ニ曾て貞観の初め宇佐の神祠詣ず一夏九旬ハ大乗經と説夜ハ寄兒と誦ス一夕夢中ふ太神告て云師王城ふ帰らず我も又随ひ行王城ふ居て當ふ皇祚と守るべしと行教やうやく山城國山寄ふ至ること其夜太神又夢中ふ告て云師我居る所と見よ(ゝ)覚て云ふ(ゝ)ハ東南男山鳩の峯ふ光と現ス行教と奏して宮殿と成る○正殿三座中ハ八幡宮應神東ハ

神殿ふ足姫尊神功西ハ比咩大神玉依姫後ハ義天皇源の姓と諸皇子ふ賜ふ時八幡宮と氏神ハ此社と以本朝才二の宗廟と(ゝ)ま(ゝ)毎年二月十日初卯の日神輿ハ(ゝ)ハ卿神楽ふ准ぜらる八月十五日放生会あり養老四年九月征夷の事ハ(ゝ)ハ大隅日向の両國逆乱ことよりて宇佐の宮ふ祈請ことゝ(ゝ)めハ(ゝ)その祢宜辛嶋勝婆豆米の神車と率て かの國と征し献と討て利あり大神詣ハ(ゝ)ハ日合戦の間多く殺生ことゝ(ゝ)ハ宜く放生会と修ス(ゝ)べしと諸国の放生会こゝふ始る○紀事今晩神と輦中ふ迂し奉り神幸を促ス左右の馬寮卿馬三疋と寮官吏外記史左右兵衛の府分参議上卿左右兵衛府上蔵人前駆赤絹屋殿ふ参ること向ハ神輿猪の鼻と下ること病院頓宮ふ至りこと行列行幸ふ准ぜ(ゝ)この式後三条院延久二年ふ始る當社の祭式甚ず繁多(ゝ)故ふ略ス

八束穂

豊年の稲の穂の丈

山雀

和漢三才圖会 扶桑賀鳥

ふ似て頭黄白ふ赤色と帯ふ眼頷の辺ふ黒き條あり背灰赤色嘴脚尾とふ黒く腹淡赤く性慧巧ふ囀る好て胡桃と食ふ

紙燃の輪を作り筐中ふ設くる時ハ飛て其輪ゑ潛る別ふ箱と竈の隅ふ安て宿處とす○此鳥藝とする山雀ふ藝とす

敗荷

注ニ不及ハ

九月

中巳午日 周防国吉鍬郡仁壁の神社九月中巳午日祭礼と行ふこれと山口祭といふ山口の古名ハ仁壁の庄故ふ仁壁の神社と号ス祭る神住吉三神と以て本社とし合せ祭る神二神味鉏高彦命下照姫の命各一社以上五殿三社をづゝ仁壁の神社と号ス又織機大明神とも又稲宮とも称ス衣食のことを主りるふ神なるゆへ此号あり祭礼のもづをそ織機の神事あり次の日神輩神輿三座本社の西神輩の地ふ出し奉ふ流鏑馬いろ〳〵皆国主ゆりことと執行とらる有司ゆりて国主の拜礼あり又六月御田の祭りハ鎮守の年月詳ならず八王十一代聖仁天皇の御宇勅幣と奉らるその傳記失散ス

八幡花の頭

廿日紀 支

山城国八幡山の社僧九月廿日花の頭と修ス先六月より[illegible]花壇と造る[illegible]と地盤制とらふ我俗板と割と作とゆふ又剥とゆふ是板を剥て臺と製るの義ゆり花の頭とハ社僧の弟子髪と剃衆僧の列ふ加るのとき社僧と饗ふ彩箋と以て草花と製し壇ふ神前の迴廊ふ飾り酒宴の興と催ス故ふ花の頭と称ス

山路草

菊の異名ふ○すゑをもき山路のきく〳〵谷の柄のくちぬるのちも猶やはらん 前内大臣賓

焼栗

焼くる栗ふ、

山粧ふ

[印遊録] 秋山明淨 破

継

やして粧ふ如し、

芭蕉

芭蕉翁移芭蕉詞ニ云唯この蔭ふ遊ひて凡両ふ破と安きと愛するのみとす

漸寒

次第ふ寒きとゆふこと

七月

[大和本草] 金燈花、鐵色箭ニも云、

槙賣

六道参ろの部

ふて秋の末の寒と云、

の条

ふ出、

曼珠沙華

月令廣義ニ曰冬春葉茂り夏月花と生して葉死る花葉相衛らず、此花下品ふ其葉石蒜ふ似たり一類ふ此花と國俗曼珠沙華と云翻譯名義ニ曰曼珠沙ハ此ふ柔軟又赤華と云酉陽雜俎曰金燈草俗人家ふこれと種ることを悪ふ一名無義草と云、

花ゐるときハ葉あし、葉ゐる時ハ花あし、○俳書ふを曼珠沙華石蒜同物ともといひ、ものゝ部ふて、鶯信翁の説ふ従ひ石蒜ものゝ部ふて、

松虫

和漢三才圖会 蟋蟀の類、褐色ふて長き髮、腹黄に、野草及び松杉の蘿ふ在り、夜羽を振て鳴声、知呂林、古呂林といふごとし、甚だ優美に、凡松虫鈴虫昼ハ得ざるし、夜燈火を照す時ハ光つて慕ひて来ると捕へて籠中ふ畜ふ、○今俗こゝ、チンチロリと鳴といふ、ツヅリ、

兼三秋物

眞夜中月

廿三夜に、子の刻ふ出て午の

十寸穂の芒

無名抄 穂の長さ一尺ばかりあるといふ彼ます二朝ふ入、かゞみと方葉ふ十寸鏡と書るふてこゝろ得べし、

真蘓宇の芒

同上 真の蘓枋とといふべきと、

麻苧穂の芒

詞ふ畧しくるに、色深き芒の名あるべし、

固そかの糸

同上 真麻の心に是、俊頼朝臣の哥ふよみて侍るまそかの糸とゝりけてと侍る糸ふどの乱れさるゆゝ、堀川百首 花もてきまそかの糸とゝりけてたゝえども人とおりかゆるるぬ 俊頼 ○まそかの芒とハ穂の赤きをいふ、まそかをまそうまそかるいふ、詞の轉じ、ふてりやとハ赤赫の意ふて、まそかるとも紀まそして各別種ふ注せるハ誤ふるべし、

松尾利木

清水濱臣の考ふ、形観音寺梨ふ似て雪のごゝ漿少く甘し、奥州會津の中、松尾の産に、今洛の人家所々ふ接得て、頂妙寺杉と一双ともといふ、

圓梨

青梨の種類ふて大きく、皮薄く色青くして甘美、

八月

待宵

八月十四日夜孫明復詩云銀河無告露暗垂玉蟾初上欲四時情樽素瑟宜先賞明夜陰晴未可知○待宵といふ翌の夜の晴曇りはかりがけ色ハ先今宵月を賞るに、

三潮草

待といふ翌の夜の月と待義ふ入し、

松茸

和漢三才圖会 凡松蕈ハ山城の北山の産最佳に、赤松の陰所秋の雨湿の為ふ醸ざるて生ず、初め落葉を戴きて見ずに、漸く長き者二三寸頭円く柄あり、鼓の槌の如し、其大なる者尺ふ近し、日と經て傘と発く、外の色黄白紫と帯内白く

細く深く刻こあり其柄太き者素ふし舞蕈 同上 湿處或て味良し八九月の交盛なりわるもの、間引菜
ハ朽木ふ生ず織柄あり一株片々と最生ず
火炎茸の如くして上黒く元白く味脆く甘し、

貝割菜 摘菜 和漢三才畠会 凡蕪菁蘿蔔の類大抵
小菜 八月種と下し彼岸中ふ苗と生ず其繁茂
と抜て煮食ふ摘葉間引菜是こ云又曰苗と生じ地を出
ること一二寸漸く茎て二葉あるを蔬とす是と貝割菜と号

猿子鳥 和漢三才畠会 正字未詳状大き雀のごとし
全体灰黒胸腹淡赤し羽灰黒色ふして
黒き彪あり尾の下両端ふ白き者二つ其嘴短くして赤黒
く脚黒く頂灰黒頭より胸ふ至て淡赤ふして白き圏あり
こ千葉菊花の紋の如し、豆鳥 豆甘美 いの部 桑鳥 豆廻 の条をみべし
猿鳥と照すこ大ほこゆり、

九月 豆名月 八月十五日の月と芋名月と云ふ
対して十三夜の月と豆名月と云ふ

外市 すの部 住吉相撲会の条ふ出ツ 鞠花 菊の異名こ 蔵王わうえ
うり 亀文日梅もるうり

菊の字本鞠ふ作る鞠ふ従ふ鞠ハ鞠ハ蔵器日樹林
音キク訓ヒリ又鞠の如き形とふ表、榲桲 橘の如く花
白緑色ひくうせこ此種蕃邦より渡て此訓ハ則蠻語
ふり今京師ふ多し梨子の如く風味も〻梨子ふ似て
少しうろしうせいとりふ菓子ハ、豆引 和漢三才畠 赤 俗作 蔬角
こ豆ふ砂糖と和して製しるく、
と蔓とりふ葉と藿とりふ莖と其とりふ本綱ふ蔓と
の總名皆赤こりふ大豆ふ黒白黄褐青斑の數色あり、
大抵夏至十日以前種を下し、まさき
七月花をいらき九月莢を結ぶ、正木の蔓 真淵翁云まさきかづら
れづらハかと常磐ふるかづらをまづてらふべしまろれば
ひくいもく神社ふりて用ひるれしいさまくしかるべき
中ふ纏くくこ鬘とせくハ一種有り古今集ふ深山まさ
ちらんふるくくこ外山ふるはきのうくいうづもるくく
ちとみしいまこて常磐ふる草木も冬のくくのふもと去
年の古葉色づき落るかれふるるが山の岩木もこふゆつる
ととまうづくこ葉ハ南天燭ふ似て黒こあるが冬のそじ
めふえもいこぎもこづるあり是こ山行時ひとら目ろ

つきてこゆるとハ右のごくハまみつゝん云〇真淵翁の說ふよるときハ定家蔓よ似くり俳諧ハ秋季と定めるハ古奇ふ色づくとよゝ冬青の實 和漢三才圖会 冬青其葉冬くゝ冬ふ枯りてゐるゞし、もまゝ正青く光澤あり四長ゆゝて尖らむ鋸ある鋸歯あり夏小白花とひらき秋実と結ぶ生青く熟ぬ紅ぬ、おのつゝ裂て中ふ白子あり、

ゆてバ ゆひ

枝ときゝとく活易し藩籬とする堪う、

天和本草 楮の一種ゝ葉ハ楮ふ似て厚く大く色深青面ふ光沢あり屋材ゝ器と作り舟の稽ともし其用楮と同じ一類別種ゝ実ハ楮より大し鱶

檀 和漢三才圖会 其実楝ともし民用と助ゝ〇実と以て秋ともの子ハ知くゆゝて小く簇ゆ生ハ青く熟ぬれで淡赤し裂て内紅子三ッ四ッ粒あり其葉秋ふ至て紅あり、

松の實 もの部松子の条ふ注も、

立秋と 斗牛 もの部二星の条ふ出、

七月

今朝ハ秋

夏解、夏書納

夏ハ四月十六日入七月十六日解夏と夏解とハ一夏九旬の間、他の化益の為ふ聖經及び名号題目と書寫し夏終るの後夏と堂塔伽藍ふ納め三衆万霊ふ供ふ、

夏書納

町向ゝ是と夏書納とハ在家も亦此ふ效ふ、

夏解草

釈氏要覽 僧尼解夏の日鮮と以て節と束ねて檀越ふ遺ふ是こと夏解草とハ今この草と詳ふ己ふ五分法身の座ともし故ふ吉祥草と名づく、

漳州府志 四時一色泉石の中ふ生ぜ山村の人瓶ふ挿ゝ先と花ふ陰子紫りとハ葱翠ゆゝて凋まず家ふ吉事ゆゝしるしおのゝゝ花開く故ふ吉祥草と名づく、

字彙 節ハ伊又反音印草の名ゝ、

大和本草 夏解草ハ麥門冬の大きるものゝ、

兼三秋物 玄兎

月の異名ゝ〇謝莊月賦云引玄兎帝臺、

月宮殿

〇つの部月の兎の条ふ出し、

つの部月の都の条ふ出、

雞頭花 時珍曰雞冠花の形と以て名ふ命ぜ春苗と生ぜ夏ふ入ゝ高き者五六尺短き者纔ふ数寸ふ暑六七月梢の間ふ花とひらゝ紅白黄の三色あり中暑花最久ふ耐さゝ霜う

後始こけいも 鎮江府志 蓮も蔓も花も實も山藥焦る、

黄獨 ふ類なり、葉大かしこゆ〜四く根ハ甘ナ如くうつて鬚あり味微苦し○俗ふ何首烏玉とふ者是之、

枳椇 正字 白石李子 蓋枳椇ハ実の名なり、その実大こ大豆の如し、ことに喰へハ少しく梨の味あり、小兒疱瘡皇穴閉ざるものゝ、是を以て其皇穴を穿つ、

八月

けふの月 つの部月見の条に見へし、

毛見 紀事 土民年の貢を納る凡秋果収納をもこの法晩秋ふ縣史先て田地の立毛の善悪を巡検て是を毛見とふ草を毛とふ故ふ稲未刈穫

嬰粟子蒔 月令廣義八月十五夜嬰粟子を種をバ花盛ゆて繁し、

七月

舟形の火 せの部施火燒の条ふ出ス

古枝草 萩の異名〜 藏王 宮城野や露も色あるる古枝草ごとしの秋も花ハ

藤袴 和漢三才圖会 高さ二三尺葉ときたり西行 女郎花の葉ふ似て切叉もし、

六七月細き白花と開く、今云藤袴是〜 俗名白抄 蘭和名本草云布和波加萬新撰万葉集別用藤袴三字 大和本草 真蘭和名藤袴又刈ラ、キーとふ古哥ふらふとよめり八雲御抄ふ蘭を

ふぢばかまとふ書ふ兼ハ森ふ似て而岐あり、香よし、乾て弥香し是真蘭〜野ふあり秋紫白の花ことの〜若兼ハ多きて食をべし其芽香美味凡菜ふ至こう詩經楚詞ふ詠ず〜蘭是〜 和訓栞 花の色ことる〜藤と称其瓣の筒をふせるとて袴と称せり、○袴ふ多ることを〜哥俳諧とふ同し 古今 何人うきてぬぎうけし藤袴る秋ぞふ野〜とふ〜 曠野 藤袴さ〜 窮窟ふ〜 蘆

筆津虫 蟋蟀の異名〜 異名分類 古き筆の作ことふ

とふり 〜ぞつむ〜 秋も今いと浅芽生ふこ

おうこちる

声ふ〜〜れ〜

兼三秋物

臥待月 八雲御抄 二十待月 臥待廿日月とふ、

桂明抄 永德の頃為重卿廿日月とふ題ふて〜〜〜〜

〜〜の月の臥待も猶宵の間〜〜〜〜出ぬ〜 臥待廿日〜

雲ふ廿日月と遊さ〜〜〜〜望月ふ〜〜て廿日月ふ詠〜〜

審ふ〜〜〜〜月の百首ふ〜〜ハ十九日の月〜〜〜説ふ臥待

月八十九夜の月を更まち月又寐待月ともいふ、藻塩草廿日の月あり、筆柯

形小さく長し、蒲萄柳 猿柳 本朝食鑑俗蒲萄柳と称す或い猿柳といふ味佳なり

いへども用とするなし、

八月

匏 瓠の部 実の条に注す、 **木芙蓉** 水に出る者を芙蓉と草芙蓉といふ荷の花を芙蓉といふ

木芙蓉といふ時珍曰此花艷しく荷の花の如し故に芙蓉

木蓮の名あり八九月始て開く故拒霜と名く中夏冬

凋み夏茂り秋の半始て花と著く花牡丹に類す

紅白黄千葉の者あり最も寒に耐て落ず實を結ぶ、 **蒲萄** 時珍曰春月萌芽を生じ果頭

る括樓の葉に似て五の尖りあり鬚を生じ蔓延數十

丈を引三月小花をひらき穗となる黄白色実連り着く

色星の如し七八月熟す紫白の二色有、 **蒲萄酒** 時珍曰蒲萄酒を造るにしばしば酣飲もれ

ば陶然として醉ふ故に袋洗 山海名産會 伊丹にて新酒成就の後借名川の流に

袋を濯ぐものそれと待て近郷の賤民とこの洗濯を貪る風味

薄き醴の如し是又他に異あり「賤の女や袋洗ひの水の汁

鬼貫○青藍云鬼貫の先吟も

それは秋季なれども子細あるべし、 **二季子鳥** 蔵玉集 鶯の異名

と古里とそろ二季子鳥とふ

ふるさと行くるるしん 忠岑

堪田の申文 九月七日或八五日 公事根源 是は諸国の田の貢七〇〇

所々の目録として奉るなり坪付帳と奉れば大臣事ふつきて組敷と三分二を免し

るふとありこれふ諸国より坪付帳と奉れば大臣事ふつきて

てちぶん申て諸国ふ施行ありしこ作るふ堪ざる田をいふ

ろもそ不堪 **二夜の月** 志の部十三 夜の条に注す、 **福王寺祭** 志の部

田と申まろ、

九月 **不堪田奏** 汲 述

鳴滝祭の **佛手柑** 和漢三才圖会 其樹柚に似て刺あ

条にくし、

青色筋理顕然として畧多羅の葉に似て尖 **緑豆** 大和本草 昔本邦に来る

らも 大和本草 緑豆一年の内に二度実の世に

八重生とて八〇苅収るを引といふ、 **佛甲草** 大和本草

京都及び諸州小一夏草といふ(ものの是)又根ゐ草と云、根鬚あり、葉ハ細長くして米ぬかの如く、並と折て土ふ挾むに能生ス滑稽雑談或説ふこの葉の形指の爪ふ似ること仏甲草と由仏指甲の名あり、此草の葉生ひ出て石地ふある形蓮花の如く故ふ岩蓮花といふ蔦信ハ非〻冬と〻〻岩蓮花ふあらぬ〻せハ仏甲草〻雑物ふ〻

待冬と隣 注不及

七月

小町踊 たの部七

夕踊の条下ふ出、

御霊七御出 十八日

御霊の社ハ上ハ京都の北西ふあり下ハ京極大炊御門の北ふあり雍州府志此社始ハ近衛通新町ふあり上御霊ハ京極の西出雲寺の北ふあり上下御霊の社毎年七月十八日御出八月十八日祭礼あり神輿二基〻御霊ハ所ハ崇道天王伊与親王吉備の聖霊藤原夫人廣継藤原夫人橘逸勢文屋宮田丸火雷神〻世ふ火雷神と謂て菅家の霊とする者ハ誤〻傳云御霊ハ所の内四所ハ祖武天皇の御時〻と〻と勧請を下の四所ハ仁明帝皇の御字〻と〻と勧請も〻上出雲寺と上御霊の神宮寺と下出雲寺〻下の御霊の神宮寺〻す傳教大師の草創〻と今両寺〻ふ絶〻り寛文年中慈眼大師の遺誡ふよりて久遠寿院の住石山城国守治郡山科の郷ふ於て出雲寺を再興〻ひ毘沙門天と安置〻ふ御霊の社あり是古と存〻の遺意ふ〻り上御霊の御旅所ハ京極通り中御霊ふあり下御霊の御旅所ハ年〻この所ふ定めて〻〻年神事頭屋の家内ふ安置〻御旅所ふ在〻この間〻ふて御旅と称す、

志ゝ使

すの部相撲ニの条ふいへり、

小鷹狩 滑稽雑談

少しつゝめりといへども、万葉新点ふ〻ハ差別ふ〻ハ小鷹と秋〻するハ鶉雲雀その外秋の小鳥狩ふ〻大鷹ハ冬〻〻〻て鶴雁鴨の類ど狩〻「すくりせり」凡て鷹ハ冬ふて小鷹ハ秋〻この種類多し刺羽といふハ小隼〻朝鮮ふ来る雀鷂雀鷂つゝの雄〻兄鷂鷂このりの雌〻鶻くち〻〻巣このりとふハ秋巣より取をいふ〻凡て鷹ハたゝの捻をおゝ〻ふ別て大〻〻〻鶻ハ小たゝ此総名〻

紅梅草 仙翁花〻せ

の部〻〻べし、

浮草 一名沢梧桐

つくりせど 葉は葵の形ふ似て滑ふるところ那岐ふ似ゝ
夏の末より秋碧花をひらく花こゝろざしと云〻水草なり
是こと水葵とおなじこゝる輩多し水葵は蓄〻
花黄あり○腥し小ふぎの上の鼈の腸芭蕉 **竈馬**
酉陽雜俎 竈馬狀促織の如し俗ふいふ竈ふ馬あれば食ふ
足の兆 大和本草 蟋蟀ふ似てひげ足ふくせい高く頭尾
さかりてまるゝ〻竈のあゝりふ穴居を筑紫の方言ふ
井ヒゴ○海士の家ハ小鍛ふあゝるいゝゝ芭蕉 **兼**

三秋物

心の月 歌の枝折 心の月 **氷の輪** 月と見立
とい清き心とのゝ

て云 東坡詩 氷輪横海闊

氷の鏡 同じく月とのふ、 **牛蒡引** 注ふ
氷の鏡

胡盧柳 一名豆柳即乾柳 し淡霜を生ず **樹練材** 形鳥の卵の如し摂津丹
波ふ多し所謂鵲の子柳秋、京師
ふて御所柳と以木棟柳といふ、 **御所柳** 大和の御所村
ふり出ず樹淡

紅瓶子梨 瓶子の形ふて赤く其肉白し **空閑**
の上品ふる物、

梨 肥前の産微赤色極うて
大ふり其味川梨ふ亞、 **小瀑江鮒** 和漢三才圖会 鯽ふき
者と口鮒と名く或ハ名吉或ハ伊勢鯉或ハ口ふ又伊奈洲
走小瀑江鮒といふ中 畧八九月稍長じ大さ六七寸ふ海ふ
交ふあり此時泥味あゝ脂多くして愈甘美色
黑と減〻て瀑し洗ふ如し故ふ小瀑江鮒と云、 **八月**

小望月 十四日のことをいふ、 **今宵の月** 月の部月見の条ふいづ、 **駒**

牽駒迎 望月の駒 江次第 本八月十五日ふり朱
雀院御国忌ふ依て十六日ふ改
り原の駒
や用ハ云〻頭書云信濃勅旨の牧十五ヶ所延喜式ふ載る
所の一〻天皇南殿ふ出御ありて御馬と分ち取ふ出御
ちなきこと記い建礼門の前の大庭ふ於てこれを
書ふ云上野九牧延喜式ふ廿八日ト云〻七日甲斐の勅旨の牧
十七日甲斐穂坂の牧廿三日信濃望月の牧廿五日武蔵勅旨
の牧又十九日信濃勅旨の牧廿八日上野九牧以上六ヶ日延
喜式にこゝ云ふことの外兼平官府十三日武蔵秩父の牧廿
八日同小野の牧の御馬ども貢ハ公事根源 公卿以下次第

ふ御馬と給る馬の差縄どとして御前ふさゝこ一絆を、取残
しうる馬とハ引分の使として、次将ど以て院東宮ふぐこうる
べき所々へまゐらせるハ、[新菓]秋の田の穂坂の駒と引つれて
とこ迄なる世のうへも有り御村上御製[金集]東路とは
るゝふ出るかち月の駒ふこうひせたの人坂の関仲忠[拾遺]
相坂の関の岩ゝど踏あらゝ中さちぐるきりつらの駒[遍
[後撰]一の戸や衣
せぶ駒むらへ上来
見合せ[紀事]上後ふ神輿二基中の御夷の離宮と出て幸
べし
の鉾八本、凡鉾と床上ふ建て棒二本四人と以てこれを荷人
と幸の鉾ゝハ神宝の内特ふこれと尊敬て又数力の人
鉾と帯の間ふ立、両手と以てこれと捧げ行、これを祭鉾とのふ
又一人竿の先ふ道祖神の假面どうけて神輿ふ先ゞつ此
仮面の鼻長大ゝ俗ども王の鼻とのふ別當及び氏子供奉
御旅所より西のゝこ今出川下烏丸と曲て長者町より室町
と過り本社ふ入上御夷の社ハ京極通筋道橋の乾二町余ふ
あり下御夷の神輿も同時ふ拝殿と立ッ鉾五本別當氏子
供奉、上御夷の行列の如し神幸の路次京極と出堪才町

御霊祭

十八日　八所の御霊祭（八所神の名七月の部御夷の御出とある条ふ注せ）

の西より東洞院の西と登て出水ふ行室町と下り二条と
過り油の小路の下立賣と上り東へ行京極より本社ふ入、
下御夷の社ハ京極通大炊御門東
北の方ふあり、例祭八月十八日ふ
ふ讀例ゝ[公事根源]是ハむゝ六位以下の加階どゝ人ハ
かの藝能行跡格勤とゝらゝて栄爵と給ひゝるゝ上卿
官の東の廳ふつきて事と行ふ次ふ朝所ふつゝて三献
の儀式あり次ふ安穏の座ふつゝて又三献あり、捕頭の花
を上卿以下の冠ふさゝて、大臣ハ白菊、納言ハ黄菊、参議
ハ龍脳、其外ハ皆時の花とさゝて、造花ふあらぬ、大ゝこ
二月の列見ふ同じ、式兵の両省より、諸司の輩の旨と選
成ゝると列見とのひゝとと書あつめて奏ゝると擬階の
奏とのふ、此人々を擇出し
て定めらゝを定考とのふ、

衣うつ

きの部　砧の
条下ふ出、

金

定考

十一日[名目抄]定考逆

剛草

[和漢三才圖会]山野處々ふあり、高さ三尺莖
枝花葉並ふ萩ふ似て小く七月花と開き莢
とふゝ小豆の莢のごとし、中の実黒く其根甚だ強し故
ふ菊人生馬と繋ぐべし、俗呼て駒繋とのふ〇陶弘景曰

狼莫其根獸の齒牙のごとく故ふ諸の名あり　**菫菫草**　和漢三才會　山の麓ふ杜の葉と戴生を狀松茸ふ似て織の外黑く粒々の皺あり晒し乾せば黑ふして染革のごとし裏黃赤ふて毛糸の如きものあり柄ふ鱗甲あり味微苦し、

五十雀　志の部四十雀の条ふ注を、

小雀　正字未詳　和漢三才會　俗ふ云古加良狀山雀ふ似て小し故ふ俗呼でふ雀といふ山林ふ多し頭黑く頰白くして四き紋の如し背腹白く翅尾黑し其声滑あて多く囀て捷輕ふして上下こえざるし、

九月

御灯　三月ふ同し其条ふ注したり、

御香宮祭　九日　神社啓蒙　山城国伏見京町の東ふ

ある祭神一座狹神功皇后、○古老云鎮座年紀分明ふらず昔より垂跡此地ふ秀吉城を築くの日東の丘ふ移し奉るといへども神の祟てありし故後旧地ふ迁し奉るといへども今の社地ふ○一書ニ云この地紀伊郡ふ屬せ例祭九月九日ふ朔日と御出とらふ十日神事能あり、はじめ祭る所の神九座ふ神體も又九基あり、土人本居神とせて今ハ神輿一基造り山ニ基遷物ふと出ふ○當社ハ延喜式ふ載せる所の御諸の神社是なり鎮坐年月未考、一書ふ貞觀二年勸請のよし記せり、

後日の菊　紀事　九月十日或ハ十日禁裏ふ殘菊の宴あ

御難の餅　士言　文永八年九月十二日日蓮上人相州鎌倉龍の口ふ於て尼難あり、白叉の下僅ふ一命を全うせ、今日宗門の徒餐を作りて像前ふ供せることと御難の餅といふ、

小倉祭　十五日豊前国到津の社ハ企救郡今村の庄到津村ふあり祭る神中ハ應神天皇左ハ神功皇后右ハ玉依姫く草創年月詳ふ〻ず後鳥羽院文治四年、宇佐八幡をこの地ふ勸請しこの神秩と分て四時の祭祀と備ふ〻ずしてより宇佐太祝の子族世々祝史とあるその後清末駿河守といふ人到津の城ふ居して常ふ奉祝せ天正の季九國乱せて神社灰燼とせり祝史の家族も四方ふ流離して到る所どころ〻ふ於て里民一宇の祠を立て僅ふ古跡を存せ慶長年中細川矢宇佐の社を造營し又到津の社をもつて宝暦庚辰の年小笠原矢更ふ祠壇謁殿を立て祭事のて益旧

きふ加ふ九月十四日晡後神輿仮殿ふ遊ぶ流鏑馬あり人
夜ふ入禊を修し舞楽を奏ま神湯の祝あり當日十五日
國主家臣をして幣を奉らしめ又流鏑馬あり晡後本社
ふ還御一説ふ小倉祭或ハ巨掠ふ作る山城國宇治の近隣
の例祭九月十五日といへりまゝきとも増山の
井その外の書々豊前の小倉と記ちるぞし

木幡祭

廿四日神社山城国宇治郡木幡ふあり[雍州府志]祭る所
の神正哉吾勝速日天忍骨尊是地神第二の神ふ
して父ハ素盞烏尊後ふ天照太神取て御子としあふ
この神下土ふ降まさず故ふ山陵あらしてその夫と祭
ましてハ木幡の神社と号す○例祭九月廿四日今五日神輿二基
内一基田中明神田中の社ハ同所地主の神く祭る神詳
あらず或説ふ柳大明神是木幡の神し

金草

菊の異名[藻塩草]名ふし如ふ東の好べのころの草とれ
もろもろきこの数

金菊

花濃黄ふて中をん故ふ名く
ふ清まるへし

蒟蒻の花

時 珍
曰春苗を生じ五月ふ至て茎を移し長一二尺宿根より
自苗生じ根の大さ芋魁のごとし○蒻頌曰茎斑ゆく花
紫し

木の實

菓物秋多し故ふ名とさく
まぞ木の實といへハ秋あく

柑子

[和漢三才圖会]
桜ぶるふ柑子ハ柑類の總名
あり今云柑子ハ橘の属なり

衣打袖の霜

[増山の井]再板既九宿本
月の部ふ衣打袖の霜と別条の如く認め出せり青藍桜
ぶるふ衣打きぬくのさぐんハまふで八月の部ふ出せるに再ひ
九月の部ふ衣打とのミ出せる理なし全く衣打者の袖ふ
おく霜といふ時ハ九月の季と心得く出せるに別条の如
く書せるハ書写の誤之[苧環]元禄十年[枝葉集]元禄十六年ふふ衣
打袖の霜と一条ふ認めさる證ハ足らさるに深く
も考へずして[獨稽古]ふも別条のごとく認め又[糸衣]ふも
衣打といふ文字さへ省きて出せる皆誤之[濱の真砂]擣衣
の条云露霜と袖ふ重て打ともあり云

に

七月

閻魔参

十六日
[釈氏要覧]閻羅王此ふハ遮といふ謂く遮ハ悪と造るべからざる也
[倶舎論]閻羅王ハ地獄の主鬼官の總司なり[飜譯名義集]
琰魔或ハ琰羅といふ此ふ静息と譯す云く造悪の者不善
業を静息ならと以す故ふ或ハ遮といふ○七月十六日と大

秋 と に

齋日とのひて善事と修し奴僕おそ暇とらせて閻魔堂へ詣でたまふるあり

紫葛 和漢三才 画会紫葛

葛の葉蒲萄ふ似て夫と結ぶ又一種野蒲萄あり、

槐の花 王安石詩云槐黄中ふ其美と懐く故ふ三公ことふ位そ、○蘇頌曰槐木極めて大あり者あり、按ずるふ尓雅云槐數種あり葉大ふして黒きを槐

懐槐 と名づく晝合し夜開くのを守宮槐と名づく葉細ふして青綠ふして槐と四月五月黄花とひらく六月七月実と結

和漢三才画会其花未開時米粒の如し其実莢ふく連珠そ中ふ黒子あり槐の花本草ふ四五月開花とあ、然ふ増山の井毛吹草

狼尾草 等秋と称するふ穂ありて志むらく愛ふ出も、時珍曰狼尾其穂の象形ふ秀てまくまで疑然と

草 そ田ふあり故ふ守田翁の称あり莖葉穂粒と

ふ粟の如し

燕尾香 開宝本草蘭草の葉馬蘭ふ似て故ふ蘭草と名く色紫黒毛あり、

其巣岐あり、俗ふ燕尾香と呼、

兼三秋物 犬子草 時珍曰穂の象狗尾故ふ浴狗尾と名づ原野垣墻ふ多く生ず苗葉葉ふ似て穂も又葉ふ似て色黄白ふして実ふ

和漢三才画会小児ことと用て蛙と釣て戯るこ草ふ世と

八月 草おのれと種のあるものをおそのもること八誰そのいふ俗云阿波国鳴門例ふらぞ鳴動して止む和泉式部此哥と詠て止むこ

圓座栁 形大ふして肥円く軟附の處肉起て鹿と成ものの所謂著蓋材歟、

青芋 蘇恭曰子多し細長くして毒多し

繪行器 紀事京俗八月朔日家々の乳母その赤義所の女子ふ行器一双と贈るその行器の中ふ生栁せり藤の花と盛藤の花ハ白糸餅ふ赤小豆と点じ蒸て此餅の形成る白糸ふ似て故ふ白糸ふ称又深更ふ多く俗亦是と称ふ白糸ふ赤ふ

繰雀 八月

豆と点ずる是あつきこの義とそ深更と名くふ今日童の戯ふ松笠と以て雉子と作り或ハ烏賊の甲と以て鷺鷥と作り或ハ糸繭と以て金灯籠神の実を括て瓢の形とあ又挑仁と刻て松虫と製て是ふの

類こと玩び或ハ互ふ相贈ることれを頼合といふ云〇雞
と雉子鷄の類こ同じ又意故ことを故ふ折て行器こ
ふ相贈る京師の俗
これ今日嘉祝の物ん

えびこ苔

龍膽の和名なり、

榎

和漢三才画会 榎の根上ふ叢生ま纖二寸餘
色裏白し細きこ刻あり微香あり味い美なり

蕈

九月

榎の實

大和本草 榎木草ふ樹の類ふあ今按むるふ樹の類ふあ榎を
葉桑ふ似て筋多し冬落葉ま実ハ胡椒の
大き秋熟て黄こ味せし小児好で食ふ、

七

月兼三秋物 天井守

この部番椒の照
余下ふ出さる

月次

拾遺 水の面ふてこ見なることとそ思ふ今宵ど
秋の寂ふ堪ふりける 源順〇てる月と月次ふ

八月 天中節

朔 拾芥抄 八月朔日の日の出より以前天中節
赤口 白舌 隨節減と書て門戸ふ押陰陽秘法むり天
国の后天中樓ふおいて事あり其人素懐と遂ぐふ

忽ち火神とあらて天中樓を焼く時ふ后呪して曰八月乃至
隨節減ふく傳へふ凶惡の日ふ陰陽家天中の札とふて良
賤の門戸ふ貼む

天狗茸

大妻あり故ふ人ちくよ

てらつくさ

木啄鳥ふ、
きの部

天王寺一乘會

十四日 摂州大坂四天王寺
一乘会ハ九月十四日
或ハ十五日六時堂ふおいてこと修を此堂傳教大師草
創ふ且本尊薬師如来日光月光の三尊大師手造ふり
とふり寺説ふ云九月十五日未刻衆僧三綱堂の司薬人
沙汰人堂仕公人出仕を先ッ時刻と三綱及ひ一和尚ふ告て
出仕の鐘一番二番と撞諸役人太子堂へ出仕を太子の
像こ鳳輦ふうつすその式二月十五日の如し廻廊の下あり
六時堂へ渡御あり法事の次第振鉾阿弥陀經傳供万
歳楽延喜楽陵王納曽利悉く終アるく酉の刻還御

天滿流鏑馬

廿五日 摂州西成郡天満ふあり祭る所
の神北野ふ同じ九月十五日流鏑
馬あり社家こまこと勤む鳥居の辺より
天満橋ふりくて馬と馳て的と射る

出落葉

紀支
土俗

譯ずらく古へ不孝の子あり、此栗と以又ふ投てこゝを傷る、因てこゝを栗と云ふ和俗又と称してくりとゝ云ふ○一說此栗自ら毬と脫して地ふ落る故ふ出落栗と云ふ、

あ

七月

秋の初風

秋の初ちつゝこの秋さらと し夏と、秋さらと姫、朝こゝろふるむべし、

顔姫

棚機七姫の内と 裏名分類 等ゝと注釈見えぞ、

秋去衣

秋去衣とハ 八雲御抄 棚機の布と 御傘 棚機の具と云 万葉拾穂抄 只秋の衣名、秋さりハ秋の来るといふ事まり、

天の川

銀河 銀漢 雲漢 字彙 天河、箕斗二星の間ふあり、其星河 河漢 長きこと天ふ竟を、 揚泉物理論 漢水の精と氣発して升り、精華上ふ浮ふ究轉して流る名づけく天河と云ふ一ふ雲漢と云衆星こゝふ出ッ、

飛鳥井の鞠

掘の鞠 紀事 棚機ふ飛鳥井家並ふ難波家蹴鞠の会恒例と上加茂松、露拂並ニ枝鞠上足ふの義あり、堂上及び地下の門人多く集る、 滑稽雜談 楮の鞠の事を毎年七日飛鳥井家

あそて行ゝ〳〵式と鞠の露拂ふ當家門弟の上足の者、坪の内へ持参る是二星へ手向る心あら、

荒鷲

鷹鳥の雛已ふ巣と離も自ら食る時、羅と以て捕ふ是と網掛といひ又あら鷹といふ新ふ捕てく人ふ馴ざると荒鷲と

いふ、愛宕宮火

廿四日 紀事 伊丹池田の愛宕火七月廿二日より廿四日至る云々 摂陽群談 摂津豊島郡池田村ふあり愛宕山ハ古三のふ所謂五月山ありとゝ、山上ふ愛宕権現の社あり毎年七月廿四日の夜種々の灯籠ふ火を点して愛宕火と名く、大坂北の町くゝより望ミ見れば星の如し又愛宕の神社有馬郡道場河原新町口ふあり祭る所火産霊尊毎年七月廿四日祭礼あり、世俗こゝを愛宕火と称も、

扇置

太平新録詩 人皆棄、

秋扇

朝茶の湯

貞享式 風炉を夏とゝ〳〵炉ぐちきと冬とゝ〳〵木地の炉縁と春とふせれば朝茶の湯ハ朝顔の例と假て秋の用とゝ〳〵きや、茶人の家ふ尋ぬべし、○朝茶の湯ハ日中の暑とやふ故を、

青藥

とゝの部 弟切草 和訓栞 朝顔の異名 朝ごふ花さく

牽牛花

の条ゝるべし、

そ名く、あらくぎ 蘭をいふ。ふの部 藤袴の条ふ注を、ありのひ兒 桔梗をいふ。き あとつうん ひの部 黐簟 の部 青黐簟草 の条ふ注を、栗穂 和漢

三才圖会 種類凡て数十青赤黄白黒の色あり早中晩あり皇栗采賓晩栗ハ皮厚く米少し○秫、狼尾草 栗奴各頭字の部 秋津虫 こう部 るべし、秋の ふ注のもて注を、

蝶、秋の蚊、秋の蛍、秋の蠅、秋の蟬

注釈ふ及ぶ中を秋の蟬ハ蟬の秋のてふハおとろくるを夏ふよ

朝月夜、朝の月 黒双紙 朝の月八十七日より二十八日まであり 暁月

夜 源氏初音巻 影ときき まもきのうきつくよ、 有明 八雲御抄 十五日後の由医房往生傳 あり云々 青藍云空ふ有て 秋月 清光を賞ときとふ。て句作もべし

明るといふる義ありとぞ、

○こゝ秋人の量察の 上ゆくゝ下ゆく雲種や秋の月 貞徳 秋天 や秋の天 凡兆 秋風 物語

論 秋氣動 其風清 秋野 続虚栗 秋の野やゝ 秋水 荘子 秋水時ふ

至て百川、河ふ灌ぐ涇流之大両ふ浜渚涯の間牛馬 秋聲

を辨ず 炭俵 熊ぶ谷の堤きれる秋の水 岱水

欧陽永叔の秋声の賦あり、畧之 続猿蓑 秋の七草 万集 風国

松の葉や細きゆも仰ま秋の声 秋野尓咲有花乎指折可伎敷者七種花芽之花乎花葛花瞿麥之花姫部志又藤袴朝貌之花○是を秋の七種と称ま、撫子の一種ハ連能こ押出

草枯の籬ふさるちでこを秋のくさふでゝ

○霜の後撫子咲る 秋の山 四機活法秋色詩 秋山如畫更分明、秋

夜 物哀ある余情ふ作るべし○秋の 夜を打ぐるくるんかれ芭蕉 ありあけみ

さうまきてうちくる梨とをきこゆきと人のなこふ
やうこそ「おきうしつゆぞうりある梨あれこそ千代ありめこ
と人はいまうり○梨らくと

八月

安濃津祭 十五日

忌てありのこしらくまうどし、
社說曰伊勢國安濃郡津城の南ふ八幡宮鎮座、往古
の二神殿中ふ寄坐も相傳へ建武中足利高氏卿一国毎ふ八幡一社を
置んと欲し、伊勢と以て始とも、乃ち宮殿と千歳山の上ふ
造り、石清水の神と勸請し、源家の興隆を祈る、旧記ふいふ
永正年中當国兵乱ふよりて、神殿荒廢、僧願海募りて
こ国中と化して再興も、時ふ享禄二年、又數十年の後頽
廢して僅ふ存も、寛永壬申年城主田獵ーてこらふ至りて、
小祠と林樹の間ふ見る、左右何れの神ありとも知る者ふ、一村
老とめしてことと問ふ言らく、足利將軍の建る所ありと、即
心願と発して土木とあつめ、正殿并殿神庫、垂表を造る、寛
永十二年初めて祭儀と行いる、同廿一年垂水藤浮の二村三
百石の地とつけて昌泉院と以て別當とも、今寒松院と云、
いまりしハ山上よりて千歳山八幡宮と称せり、今の地ふ遷し
てよりハ、安濃津の城と守と以て安濃津八幡宮と呼ちも乃ち

一志郡無水村ふ創て藍津の城の街坊、
ハ奄藝安濃一志の三郡ふ跨りて、秋の宮
といひ石宮と

綾巻

秋の宮とらふ、きの部砧
紅花とあし、藍の花 葉蓼ふ似て七八月洛
ひらく、蘆の花 說文曰其花凡ふ遇て吹揚れ雪ふ
のごと、地ふ聚まりハ絮ふ成おもし、茜
堀 時珍曰此草東方ふ在て少し、西方の多ふもつぶ、則
西草と以て茜ともて、十二月苗と生じ、蔓延ること數尺
方莖ありて中空し、筋あり、外ふ細き刺あり、數寸一節、節
毎ふ五葉、西青し、背緑り、七八月花とひらき、実と結ふ、和
漢三才圖会 茜ハ赤根と以絳を染べ、通草 蔦須曰通草の実長さ三
し、近世蘇方木と以て茜う代ふ、
四寸、核黑く、瓤白し、甘と食べハ甘美、南人謂て無優子
ともて、或ハ鳥覆子と名く、七月と過てこと来る○時珍
曰通草ハ莖ふ細き孔あり、西
両頭ふ皆通ぜ故ふ名く、栗引 取收と云、溢蚊 潰聲雜談
八月の溢ハ蚊肉と割と云
世話より、近来秋ふ許用も、 鶺子鳥 和漢三才畜会倭名阿止里此鳥常

ふ山林ふ棲不時ふ群飛して寺院の叢林ふ出る事あり、百千群と成て天と蔽ふ状ち雀ふ似て大く背太し頭頸灰蒼みて柳色の斑あり、頷黄赤みて嘴白し、背蒼赤と帯ぶ黒き斑あり、日本紀 天武天皇七年鴆子鳥天と蔽ひて西南より東北ふ飛べ、

江鮭 鱆鬚 草魚 鯇鱆 貂米 ひくら 琵琶湖の名産ふ、大きなる者三尺ふき者尺ふ満ざるものあり 儼鰯魚のごとし、江鮭と八則江湖の鮭ふ、河鰯魚より八膩多し、湖水少その佳品ふ、秋八月雨水河ふより、湖中ふ流れ入るとき多く川ふ上る、築と構へ或八大なる攤網とゆこれと取る、

新走 新酒の尤早きを云、

秋の暮 湖東問答 去来 問云春の暮ふ対して暮秋と心得ものと新走と云、暮ふ作者多しといへ尤秋の暮八秋の夕間暮あり春の暮八暮春の事ふ侍るあも答云春の暮八暮春ふ又一片ふ限るべからず、一句の趣ふよるべし、○秋の夕暮といふべきと文字の数ふもとくあきと句ふれバ畧して秋の暮とらふ、近ころ下五文字ふ秋の夕とよくる句まあり、秋ちゆふべと読ねバとくふ見べ作者心得べし、

九月

温酒 御光明寺殿下御抄 九月九日ハ寒温のさゝひ身肉ふ時ふ此温酒を飲めば病と得ずとそいふ世諺明答ふと引めり、

栗田口祭 十五日 増山の井百川橋の東八大天王の祭ふ祇園牛頭天王娑竭羅龍王の女頗梨女とめとりてうこゝふる八王子あり、これ暦ふいふる八将神ふ、

穴織祭 十七日 摂州豊嶋郡池田村民家の北ふある山上ふあり、摂陽羣談 穴織呉服の両社其間僅十町ばかり、日本紀 應神天皇十四年春二月、百済王縫衣の二女と貢ぐ、真毛津といふ、同三十七年春二月戊午朔阿知の使主都加の使主と呉ふつかわして縫工女と求めしむ、阿知の使主ふ高麗国ふ至りて更ふ道路と問ふ道と知る者と高麗ふたふ、高麗王乃チ久礼波久礼志二人と副て導者ふとこそふとありて呉ふ通ずるとそ得さう呉の王工女兄媛弟媛呉織穴織と換ふ、同四十一年春二月午朔阿知の使主ふ呉より筑紫ふ至るの時、胷形大神工女をとこふ故ふ兄媛と以て胷形大明神ふ奉る今筑紫ふ坐る御使君の祖ふ、既ふてその二女と率て摂津国ふ至

る武庫ふ来りて天皇崩まで、ゆくふ及むを大鷦鷯の尊仁徳
ふ献るこの二人ホの後今昊の衣縫蚊屋の衣縫是なり○
仁徳天皇七十六年戊子九月十七日ふ縫媛二人も去あひ
てつくへふこと祝ひ祭ひ縫寮の神まもる毎年九月十七日
十八日ニ穴織昊織両社の祭礼〻和衣荒布の神供ニ備
てこと神衣祭と称を、社家の説ふい應神天皇春二月、
縫媛ニ昊ふ求むといひ、秋の花 いで不審、言の体ふあるべきの
ふ藻塩草ふいひ、秋〻久の花 菊の異名といひ 異名
草ふいひ 分類 藻塩草ふ[illegible]
を南〻るくさもや枯るまで野ふ残ってそ秋〻くの花、
是古き物ふあ〻或説ふ菊を秋〻くこと〻むと〻今按
むるふ埃嚢抄三云聖一國師重陽の佛事の時ふ草
の花を北の籬ふ植てノンとくと南の山を見さとと高を
しらしてそう是ハ古文前集ふ陶淵明ふ採菊東籬下
悠然見南山とらく詩ふて東を北〻採と植とも〻傳
寫の誤るべ〻埃嚢抄ふ[illegible]ふ藻塩草 赤小豆引
の秋〻くの花も誤てふく秋草の花の、

大抵土用の中種と[illegible]
蒔九月これを収む、芦の穂絮 孝子傳閔損の後母生處の子ふい衣を
ふ綿絮を以し損ふハ芦花の絮と以を父子と出さんと
す、損ハ曰母在せバ一子單り母去らハ三子寒しと遂ふ
止む、烏桕 本草別録烏桕ハ木て毒あり〻多識論烏桕今按阿末保恵 秋
の葉 御今 もろぢ のもろぢ、秋の霜 初霜ハ冬なり、朝寒 御今 朝寒 冬なり、
秋くさむき朝寒きけ〻、網代打 藻塩草 網代ハ冬
朝氣さむ〻しづれも冬こ、然まども九月
九日の前ふ打初て宇治の秋過て、秋暮て、秋
網代人供御ふ奉るふや、
ぞ隔る、秋ふ後〻く、秋より後、秋の別、
秋の名残、秋の限て、秋と惜、秋深き、
秋の湊 注ふ不及 七月 さくがふ姫 棚機の異名七

姫の内こちゝがふといゝ蜘のこと）異名分類 開元遺事ニ蜘蛛
といふこと小きく金盒の中ニ納め曉ニ至て開きて蜘蛛の
糸の稀密なると視て巧の多少を得ることゝ云長明四
季物語ニ姫蜘蛛とてさゝ〻ものゝ其つくるもの或ハ
ねゝびの糸ふいを引ゆると嗣とゝて私のねゝびゝ糸
つくるとあるべし云こゝ〻れらニふれるべし

索

餅 兎代田事記 七月七日織女とまつる又牽牛神あり、
その祭供ふ所素麪と以す是糸織の象ニ表す並ニ
摯麪と以ることゝ云 鋤耕の象ニ表す 十節記 昔高辛氏の女
子七月七日ニ死もその霊鬼神となりて人ニ瘧を病ましむ其
存する日麥餅を好めり故ニその死する日ニ至て索餅
と以ることを祭る後人索餅を〻〻む瘧疾を恵ぶ、

刺鯖 いの部生身魂の条ニ出ッ、 澤桔梗 大和本草 莖大ゝて
葉ちゝ〻く巻丹の葉ハ
莖ニ付るゞ如ク花ハ桔梗ニ似て淡碧色桔梗ハ小ゝ
水辺ニ生ず秋花とひらく根まゝ桔梗のごとし又浮蕃の
花をも沢桔梗と云ふ

五味子 本草 五味子皮肉甘く酸
核辛く苦く都て鹹き
味ありて五味具る故ニ名く春苗を生じ赤きこと蔓高水ニ
引く其長さ六七尺葉尖ゝ円く杏の葉ニ似たり三四月
黄白花を開く蓮花の状ニ類ス七月實る莖の端ニ
叢生ス蔊豆許の大さのごとゝ生ハ青く熟すれバ紅紫

さゝれ萩 葉の細ゝるゝと
兼三秋物 哉生明
二日三日の月とゝふ哉ハ始ゝ前の月大なるとき八二日ニ明と生ず、 哉
明と生ず前の月小なるとき七三日ニ明と生ず、

生魄 十六日の月とゝ 尚書 望後月明死して 佐々
魄と生ず、〇月の照さゝる所を魄とゝふ、

良衣壮士 月の別名ゝ 萬葉 山乃葉乃佐々良衣
壮士天原門渡光見良久之好藻、

盃の光、盃の影 御今 盃の光ゝ月ニ似たゝ
秋ゝ〻し面の月とゝ

さゝやけき 秋の月
といゝ、 君遷子 ふの部蒲萄柿
の条下ニ出ッ、

荻牡鹿 和名抄 牡鹿 和名佐乎之加 和名正韻要略
顕宗天皇紀ニ牡鹿此ニ云左呼子加和訓の

狭雄鹿ふて狭ハ狭山狭野もどろ〳〵ていふ詞あり○萬葉ふ小牡鹿こ書るハちひさきと鹿といふかあり〳〵ていふ

猿酒 猴菓と取て山中樹木の皮或ハ嶺頭の凹ある所ふ貯へ置き数日の後熟し〳〵酒の如く味甚甘美これと猿酒といふ獺者往々見て竊こ食を、

八月 堺天神祭 三日 泉州府志 泉州堺常楽寺天神の像ハ菅神太宰府ふ在せし日自ら作ましまへ七軀の像の内也とひつさふ長徳二年或ハ延喜年中正月海濱ふ漂ひ来りより此所ふ安置ま、或ハひつふ昔塩穴の郷湊村ふあり故ふ塩穴天神と称ま、中世北の荘ふ移ると勸請ま、文明二年菅原為長郷の記云、和泉国毛須深井草部土師向井塩穴高石ハ菅家の氏神天の穂日の命以来の旧領あり為長卿の真跡今按るふ塩穴天神ハ天穂日命ふて後五条殿ふあり ふ菅丞相と合せ祭る久○例祭六月十三日と夏神楽と〳〵八月三日と秋神楽ま、この日恭詣多し神輿堺七道濱ふ〳〵東島へ渡御即日還幸〳〵先夜の諸事四日と云ふまで、今ハ三日ふ〳〵ていふ

三五の夜

つの部月見の条ふ出ッ、

西院祭 廿八日 春日の神社ハ洛西嵯峨野郡ふあり四条通西の上手四町計り云云西院村の西平林村の中ふあり名跡志按ずるふ西院の号中頃此所の西ふ齋院居ます故ふ此辺の名くて齋院こ書〳〵と後誤りて西院ふ作る歟○例祭八月廿八日神輿二基あり其一ハ性空尼神輿こ推古の社八同村の西ふあり紀事西院八幡祭とひふ未詳

柘榴 時珍曰榴ハ瘤く丹實垂〳〵として贅瘤の如ふ事類合璧 榴大〳〵て盃の如し赤色ふ黒き斑の点あり皮中蜂の巣の如し黄膜ありてこれと隔ず子人の歯の如し淡紅色亦潔白ありて雪の如き者あり潘岳賦云榴ハ天下の奇樹九州の名果千房同蔕千子一の如し飢ど禦ぎ渇ど癒し酲ど解し酔ど醒す李祖收庸云元魏安德王延宗李祖收と納て如ここ後ふ帝李ふ宅ふ幸まし妃ふ母二の石榴ま帝の前ふ投む人其意を知て〳〵祖收ふ云子孫多ならんこと欲せ○今鬼子母神と祭る人これふ備ふるふ榴ま以てまるハ子子多子の義ふてまるなり花の形ハ夏のさの部〳〵

の花 本草 三七春酡と生じ夏高サ三四尺葉蔓艾ふ似て動く厚く岐尖あり莖ふ赤き稜あり夏秋黄花をひらく蕊金糸の盤紐のごとし愛すべし氣香らず花乾くと沉い絮ごとし紅で苦實絮のごとし

烏鳳 和漢三才圖会 今云三光鳥 迎手鳥あり、雄

碧色背の上ふ赤と帶腹白く羽黑くして微赤く項の毛乱起て頂ふ冠あり眼大ふして臉青く其尾長き者一尺半計ゆ其鳴聲清越日月星と言ふ如し今三光鳥と称す其雌雄ふ似て浅く尾短く俱ふ性男悍雛と育ゆ時ふ鳥鴉の類ふ襲ふ其巣鞠の如し、澁振ひ鳴と拒む或ハ其眼と啄く其巣鞠の如し、澁

鮎 おの部落 鮎の条ニ出、

九月

坐摩祭 廿二日 坐摩の傳記ハ夏のさの部、坐摩の御扱の条ふ注しぬ

月廿二日と見て相嘗八十島祭と号して新嘗の神事ふ

逆髪祭 廿四日 社記三云江州滋賀郡琵琶湖の南、

逢坂山関の清水大明神ハ延喜廿四の皇子蟬丸の社ゑ蟬丸双眼盲ふ故ふ勅して延喜廿二年壬午春三月公卿大夫蟬丸と供奉して逢坂山ふ左遷し奉て各涙雨を滴て帰京を残て留る人白川の紀ノ則長基經古屋の美女師輔ゑ妾ふ於て姉の宮深く蟬丸をそこひ密ふ禁闕と出て相坂山ふ来て蟬丸と共ふ花月と清賞し旅駅の山岩川陸を偏歩して雲鬢緑髪顛倒して國人御名を逆髪と号く天慶九年廿四日逝去しぬ故ふ毎年九月廿四日の祭祀今ふ至て怠ることなし、姉薨去の後蟬丸と共ふ一社ふ合せ祭と云ふ音蓋云蟬丸と延喜才四の皇子及び盲人と云ふハ妄説なり後撰集のゆくもゆくるもとよめる哥の詞書ふ逢坂の人とうたと有ゆ考ふ諸書ふ論あり定るべし、水戸學士の一説ふ唐の南朝元帝の諱と延基と云ふ延基の三男極楽の時より癈ゆて其上皆これハ遂ふ是を相関と云ふ所ふ捨ふ此子の名と彈冠とふいふ幼年より琵琶を弾ぜり故ふ名付ふ今此事ふ於て日本の蟬丸の支と考ふふ延喜と延基とキの音同じ蟬と蟬と字の形相似て又相関と相坂の関も相似て又延

喜の御子と捨ふと彼是同意〉彈児の事ハ古史考巻の三十一ふるをえらと云〉俳諧歳時記 接ぎ木ふ逆上ハ坂上の誤ふべ〜寺門の説ニ云江州相坂山関の明神二所一所ハ坂上ふあり一所ハ坂下ふありと云〉元坂上の社をどりんと誤りて種々の説と設けくるまあ〜ん入云二所とのふ道祖神と祭りて以て関所の鎮守ふと朱雀院の御宇蟬丸の昊と當社ふ合せ祭る依て土俗蟬丸の社〜称を下の社の前ふ井あり関の清水と名く清水明神と号祭礼九月廿四日上下の社同日〉

皂角

時珍曰皂莢樹皂〉故ふ名とも〉神輿二基 ニ ニこの説穏ふ〉

廣志ふこと〉と鶏栖子〉ら〉樹の高さ大〉葉槐の葉の如〉瘦長〉て尖〉枝の間ふ刺多し夏細き黄花と開く実と結ぶ〉三種あり一種ふ小ふして猪の牙のごとし一種ハ長〉〉て瘦薄く枯燥て粘ど其樹刺多くして上ふかゝらもちゝ櫻のもちゝあし〉

櫻紅葉

せーもちゝ

珊瑚

仙蔘 珊瑚仙蔘三名

同物 園史 兼山茶の如くふ〉夏白花と開く秋紅の実と結ぶ珊瑚の如く累々〉〉人 天和本草 珊瑚兼八

橘の如く及び恭州の如く刻〉鈍あり莖長く節あり寒と日と長と良る陰地ふ宜く本草綱目 雜草の部百両金ハ此と同物〉 和漢三才 畜会 仙霊草 字彙云〉

栃栗

江東小き栗と呼て栃栗〉

七月

北野御手水

六日 山城國葛野郡北野天満宮ふの帝闕より北ふあるを以て北野と名く 紀事 七月六日北野松梅院御手洗と神前ふ供を松風の硯ふ穀の米と添て〉ふと供を松梅院〉〉幼年 北野爆拂 七日或ハ故障あるときハこの義〉〉ふ

雍州府志 毎年七月七日北野社内外の庫ふある所の神宝と西の間及び幣殿会所ふ出しこれと曝をこの間ふ宮仕内外の庫の煤と拂ふ〉

乞巧奠

名目抄 今の俗キッカウテント云ハ不足言ふ

つくゝ世ヨ

乞巧奠と八人々其業ふ巧みあらんことを願ふ意なり

開元遺事 七夕ふ蜘蛛を以て金盒の中ふ納暁ふ開て蛛絲の稀密を視巧の多少を得るとも

乞巧針、乞巧瓜

荊楚歳時記 七

夕ふ婦人七孔ふ針と穿ちと或ハ金銀鏹石と針とを、瓜菓を座中ふ陳ね巧みをこらふ、蟷子ありて瓜の上ふ網する時ハ巧と得

九枝燈

漢武内傳七月七日帝宮掖の内を掃除し雲錦の帷と張、九華の燈と燃き、西王母降公事根源

禁裏御燈籠

燈臺九本おのく灯あり云云

滑稽雑談當世ふおいて禁裏御家門方より燈籠と献ぜらるる奇巧金銀を鏤め花鳥人形ふの美と尽せり是と南殿ふ懸ぐらるゝ、いつのころより始まるおも尋ぬべし十四日ふハ禁門を敢して賤の男女と庭上ふ入て是を拜せしむ

切子燈籠

和漢三才圖会一種岐里古燈篭、聖天祭ふ用ふ、飾る所紙繒甚華美、

逆の峯入

紀曳七月の初大峯の修驗道山伏の客僧大峯より京師ふ出て大なる法螺と吹き自ら金剛杖と拏戸々と遍歴して奇料と乞ふ或ハ前鬼木鉢或奈良碗黄ふの物を目那の家ふ贈る、凡峯入の法、本山汎熊野より大峯入是と順の峯入とゝ當山汎大峯より熊野ふ出ず是と逆の峯入とゝ

○貞享式峯入の類も順逆とひて春と秋と断れ今の俳諧の省法ふよらハ秋峯ふ入れていふ秋とゝ春季ふ入ることハ春とあ、べし、木曽開地ふよりて名る

清水千日詣

十日七月九日より十日ふ至りて京師清水觀音ふ諸人参詣して夜ふ入て参詣殊ふ多し今日の参詣平日の千度ふあたるとゝ江戸浅草の觀音と同日ふして参詣多し、俗四万六千日とゝ、

經木流

十六日 摂州四天王寺七亀井の水ゝ、白石玉手の水と号ものゝ白川法皇の上東門院當寺ふ詣し時其水盤ふ亀の形あると見て、白石玉手の水と以て亀井の水と詠ぜこれ其号の起るところなり

新古今濁ア多き亀井の水とむもとひのけて心のちりとそゝぎつるかな

○七月十六日世俗經書堂ふおいて經木の表ふ法名と記し此水と手向て亡魂と弔ふ摂陽群談ふもこれを、昔ハ八月毎ふ六斎の日講堂ふおいて經と誦し、参詣の戒名と名帳ふ記し回向せしとゝ和

泉式部、恭詣のとき、名を名簿ふもらすて詠ぜる哥、梓弓
まつるべしとハなもそねどうのてあき身の數ふいりぬる今の
經木ハこの名、**桔梗**時珍曰桔ハ結、其草の根結實
簿の遺意也、きちかうハて梗直、故ふ名く 和名抄
桔梗和名阿里乃比布木 和漢三才圖会 山野及び人家ふ多くこれと
種、凡紫碧の者と桔梗の正色とす、又白花あり、紫白相
交る者あり、單葉あり、八重あり、古今 物名 秋ちかう野
ふありふるもくつのおけるくき葉もろくゆく、支則
蟋蟀大和本草 本草四十一巻、竈馬の附錄ふのせ一名
蟋蟀又蟋蟀とつハ立秋の後夜鳴く、イナコふ似く
しかし、越あり、角あり、頭ハ切とる如く、尖とあり、俗ふ、ばくさ
もくとつハ西土の方言、クロッヾとつふ、古哥ふきりぎりす
よめるハ是こ、秋の末まで多く故ふ古哥ふ霜夜ふよめり、○
今俗ふつふきりぎりすハ蛩雖こ 家持集 きりぎりすとつりさせ
こ鳴ふるどむらきぬもくる我いきくらもど○筆つ虫、ち
うむし、すけの庭鳥ホの異名あり、頭字の部ふわっちて淺、
兼三秋物
銀兎月とつハ隋煬帝云、清露冷侵銀兎影 **既望**ふの

さとよひの糸ふ併せ詐ハ、**既生魄**既ふ魄と生もる十七日の月
し、月の照ざる所ど魄とつふ、**暉**
素 文選註 月光し、**金波** 前漢書 月光し、**霧** 尔雅孫炎註 天気
下り地ふ應せざる
と雰とつふ地気天ふ発して應せざるど霧とつハ 和漢三才
会 雰霧の二種皆露の変する者、秋月盛んして其降
や朝と夕とふあり、甚と多きと紀ハ菜蔬草木凋こ枯る
と霜雪より烈し 藻塩草 霧ハ春夏も詠ぜ、し秋ふ
限るべからずとつハども、連俳ふ霧ともつりハ秋こ雲御抄
の如く春山の霧ふまとつる鶯、又夏霧とも万葉ふあり
と云、俳諧ふても春夏の季ふ結ぐ春夏ふわてる
べし、○朝霧夕霧別義あり、駒の霧ハ駒の部ふ注、**霧**
の笆霧の立てどてる野原ふ下てる霧
とはぐきとつふ、**霧の海**の渺々と、そ海の
ごとくこもるとつふ、**霧の香** 御今 霧ふもひのあるものと雖
き物こそ物ふも無ふ霧の香
とつひて別ふさき物あるふハあらぞ、霧不斷
の香とあきと詩ふを作るハ、秋霧のとこ、**霧立**

人 八雲御抄 人をこと てこそる人をこそ、露両 露の深き所ハ両の降るなり、これをく、木淡 樹に小熟し美き 柳を木淡とふ、伽羅柳 一名透徹柳形長く凹く微尖り肉中沈香の理の如くふして味脆く美し、錦馬 鹿の異名あり、

八月

北野祭 四日

二十二社註式 一条院永延元年八月五日祭礼をはじめて官幣あり、後冷泉帝永承元年八月四日小定らる、五日小毋后の母忌ふ、ありて、拾芥抄 北野祭今ハ四日元ハ五日先例大臣より始て納言参議ま至て大頭と称を催し中あり、料米六十石、○祭神三座中ハ天満天神東ハ中将殿、管品吉祥女、管家の北の方、都の西南吉祥院小住ゆしの名多く、鷺水記曰、此祭甚ざ美麗ふして神輿下立賣の西御旅所小移し奉る、其間廿余町の地小蜀錦と敷き、供奉の輩綾羅の袂とつらゝ、管絃の声雲井小ひゞくるよう、富社の古記小あり、

礒 四手打 綾巻 字林 直衣打 ちそろ打 小春と持 といふ、古人衣と持小両女相對して一杵と執て米と春ら如し、然るふ今易るふ卧杵と作る、對座してとるとと持つ、其便を取る 和名抄 唐韻云礒和名岐沼伊太 掛衣石く作礒掛衣杵 和名都知 ○綾巻衣と巻木くとの緒と巻こ打く、○四手打八雲御抄 ちきりふ打く衣をて打とよめり、○ちそろ打ちそろい槌の名く槌をて打とふ、

銀杏 實 時珍曰銀杏其兼鴨の掌小似くり、因て鴨脚と名づく、宋の初始て貢も改て銀杏と呼其形小杏小似て核の色白きふ因て今白果と名く、

木の子取 たの部耳狩の条小出ツ、

和引 苟収

啄木鳥

一名てらつき 時珍曰此鳥樹を剉裂て蟲と取食ふ故小名く禽經云小ふる者雀の如く大きくる者鴉の如し面桃花の如く、啄足皆青色爪剛く嘴利く錐のごし長し其端小針刺ありて蟲を啄て得ることハ舌を以て鈎出しこと食ふ、○昔王造小天王寺を建し時、鵄鳥群来て寺の軒と啄き損ま故小寺啄と名く、守屋ガ怨霊鳥とゆうしとらへ、

菊戴鳥 和漢三才 画会 状眼白鳥小似て芽翅青緑色頂の上小黄毛花の如き者と戴く故小名く、

九月

菊

花の宴

九日 青藍云、俳諧歳時記ニ周の穆王ノ時ニ酈縣山ゆへ法花の秘文を釈尊より受て慈童ニ傳ヘ、慈童八百歳をたもち観少年のごとし。魏の文帝の時名を彭祖と更て文帝ニ此術を授け奉る。文帝一の術を受て壽七十歳。今の重陽の宴是也。此説妄談の甚しきといふべし。列仙傳ニ彭祖ハ帝顓頊の玄孫、姓ハ錢、名ハ鏗、周ニ至て八百歳ニして衰老せず、穆王召して大夫とせんとす。病を称して與らず。後遂ニ流沙の西ニ往。彭祖の傳かくの如し。慈童より事を以て附會するもの也。元野史ナリ説の詩語より出て菊花の宴ハ秦漢以来より既ニあり。会論ひくり實ニして妄談附會の甚しきといふべし。或人は本を本朝文粋ニ視陽群臣ニ菊花詩序云紀納言採故事於漢武則赤萸挿宮人之衣、尋舊跡於魏文亦黄花助彭祖云々 又世諺問答ニも魏文の説を引かれハ古くよりいひつたへきる妄談なるべし。凡風雅の道ハ事の虚實ニかゝはらず、其趣のをかしきニ随ひてとるべくとりあれども是ハ附會の説とおぼえもとより捨べきニもあらじ。○ちの部重陽の宴併すべし。

菊綿

公事根源 御前ニ菊綿をおく云々 全文ちの部重陽の宴の条ニ見えたり

菊花の酒

高ニ登る 続 茱萸の袋 斉諧記 汝南の桓景費長房ニ随ひて遊学する事累年、長房謂曰九月九日汝が家中災あらん急ニ去べし。家人各絳袋を作て茱萸を盛り以て臂ニ繋て高きニ登て菊花の酒を飲しめバ此禍ひ除くべし。景言の如くし、挙家山ニ登る。還て見れバ鶏犬牛羊一時ニ暴死す。長房これを聞て曰、此これニ代るへし。今世の人九日高きニ登て酒を飲、婦人茱萸の嚢を帯、蓋此ニ始る。

菊の節句

栗の節句 菊酒と飲栗こ親戚朋友互ニ贈る。故ニ菊の節句栗の節句と称へ、

菊の着綿

御湯殿記 九日の夜ニ入て御殿の南階ニ小菊を多く植其菊ニ赤白黄の染わたを丸め菊花ニ作りて枝々ニ付る也。今日癸を菊ニ被へらるゝといへり云々 ○青藍按ずるニ菊ニきせ綿着せるとあるくハ菊の露をきせニ移して面をぬぐひ老せぬ薬とせしなるべし、後撰集ニあり、ふまきし侍る時九月八日伊勢が家の菊ニきせを着ニつかはしたりけれバ又のあした

とろとてろもろて、伊勢殿ろ〻ぶ君ゑよひとのぶ〻つふなぐ〻る宿のつゆとなられん、かし藤原雅正、露ごろのをざる宿の菊ふ〻ぶ、花のゆるぐやいくよまちらん、紫式部日記九日菊むすこと兵部のおもとのとそきてこそ殿のうへのとうわきとこそよう老のこひ捨ゑくとのこまもせつるくもむこ〻ば、菊のつゆわくゆむうふ紬ゑとて、花のゆるぐふ千代ハゆらん○此外源氏枕の草紙なごゑ見えこう、今禁中ゑてろくく菊の綿をつくりてれるるくいいとのちのこゑゑの色し

襲 くの部九日小 袖の条ふ注ス、**菊花** 時珍曰産佃埒稚云菊本 鞠ゑ作て、鞠窮ゑり、月令云九月菊黄蕊あり、華事此至て窮り盡く故ふこれを鞠ゑ、和名抄菊 和名加波良乎毛木 一云加波良於波木 和漢三才図会本綱ゑ菊九白種宿根ゑり自生ゑ、其莖葉花の品ゑ同ら〻ゑ、千葉單葉心あるゑり心ゑれあり黄白紅紫間色浅深大小の別あり、其莖株蔓紫赤青緑の残あり其葉ゑ小厚薄尖禿の異あり又夏菊秋菊冬菊の分ゑり○百夜草、星見草、金草、ちこ草、千代見草、鬼草、山路草、少女草、弟草、草の主、殘草、夢花、花の弟、百菊、猩々菊、醉楊菊、大白、大槃若、翁草、隠若子、女花、鞠花、秋の花、秋〻くの花、契草、蘋我菊、承和の色、殘菊、野菊、ゆらゆるぎ、各頭字の部

ふゆちて注ス、

鬪菊 古今著聞集延喜十三年十月十三日 御記云仰侍臣令新菊花入三番 ぐるゆ〻ぐ〻、

相撲勝負以甲時各方領花参入一番 左 三番 右 次第進花 立庭中一番種花以各洲形三番裁次 一番 右 仙華 三番 右 滝口 取立御前左衛門督藤原朝臣 候御前傳作勝負十番勝方簾中 拝舞選進菊中各四本裁西方庭

菊の淵 古今和歌集 宿の菊丸

ちちつゆけふごゑ幾世つゆうて洲さゆゆゆ、

金目貫 百菊の内ゆ黄色 うて万重ふて

秋牡丹 大和本草 秋牡丹外品 農圃六書ふ云ふ嗅ハ臭〻 今試るふ然て春分後し植九月中菊ふ先て開く、紫菊ふ似こう、初め深紅ゑて後浅紅ゑ中 畧 鞍馬貴布禰 摂州箕面又西州諸山ふゆう、本邦ふ昔よりある草ゑるべ〻

○京都の俗きゆ菊こ称そ所説のごと〻、

貴船祭 九日 神社啓蒙 山城国愛宕郡鞍馬の北一里むゆふゆう、祭る所の神ゑて、別宮の神宮才二の摂社ゑう 神代巻 伊弉諾尊の神ゑて、高龍の神ゑ永徳

詞遇突智と斬て三段となる、其一段ハ高靈となる、三十二社註式

貴船の社ハ船玉命と高靈龍と、改暦雜事記九月九日小兒

咳逆疫して死亡もること多し仍て相者どもてトせしむ、云貴

船の神の祟る所、こゝに於て弘仁二年百六代淳和天皇 奈良天皇 秋九月九日

疫と追しむ、今貴船の神輿と称して洛中と振るうの是この

遺意なり、○余ゝそなり以来毎年九月九日小兒相集つゝ小さ

神輿と作つゝ貴船祭と称して市中を振るうことと狹小輿らくゝ、北山祭 廿七日 六所の社

ハ洛北鹿苑寺の西南衣笠の岳の良平林の中ふかくゝ祭

神詳あらず、例祭九月廿七日 名勝志の説同し北山天神祭九月廿

六日、この拜殿ふ於て三番叟あり、正月廿七日六所明神ふ猿

楽あり、管見記九月廿七日等持院村祭、松尾ふ社等持院鹿

苑寺ふ相隣る故ふ〳〵北山祭と称す、類聚國史北山の

神社ハ大北山村ふあり、天長五年八月天地震災わらをす、

丁丑ふ北山の神ふ祈る、名勝志北山ハ高橋の西北四五町ふ

あり、高橋ハ北野平野の間紙屋川の橋、洛陽より成変のゝこと北方ふいらぎ

とゝとゝ、古より北山と称を疑らくハ村名ふあり

ゝ、○毛吹草ハ北山祭廿五日と記諸説迭ふ異ゝ 金柑

時珍曰金橘実と結ぶ秋多く黄熟を、枳殼 本草綱經 枳ハ橘の如くして小ゝ高さ五七尺葉橙の如く刺多し春白花を生ず 天和本草 拘橘今案もるに紀名カラタチといふものゝ其木もり多き故ふ人家植て籬とし盜ふ備ふ昔より國俗誤りて是を枳殼枳實とゝ藥ふ用ふ非多、

寺千部

十五日より 明顯山祐天寺ハ江戸驪黑ふあり、廿五日まで 開山ハ祐天大僧正例年七月十五日より廿五日まで阿弥陀經千口修行この節恭詣多、

夕顔の實

品類多し ○瓠、長きこと越瓜の如し、首尾一のゝ〳〵○懸瓠瓠の一頭ふて腹あり、長き柄ある者、○匏柄ふくして円大、形ち扁き者、○壺匏の短き柄有て大腹ある者、○蒲蘆壺の短き腰の者、○其形狀各同じうらもとゝ也、苗乘皮子性味ハ一ゝ、右本草時珍ノ説、○乾瓠ハ瓠畜と云生ると日ふ性又塩とひ〳〵おりとうけおきて日ふほもはは、

兼三秋物

夕月夜

の大小ふとりて朔二日の夕ゝより出現る事分明〻十日あまりの頃までも暮に出るわどの月と夕月夜と讀ふらし

弓張月 【釈名】弦八月半の名〻其形一旁曲しに、一旁は直くして弓の弦と張が如き

夢野の鹿 摂津国風土記云雄伴郡に夢野あり、父老傳云ふ昔刀我野に牡鹿ありしを、その嫡と此野に居さるこの妻の牝鹿淡路國野島に居る彼牡鹿野島より往て妻と相愛て既〻牡鹿来りて嫡の所に宿る明旦牡鹿その嫡に語て云、今夜吾背に雪ふりおけりと見きと又ときき草生さうとときき此夢何の祥ぞ、その嫡まさに夫の妻の所に向往ぎを悪に汚詐て相〻と云背の上に草生るは夫背の上に射るの祥又雪ふるは白塩穴る塗の祥、汝淡路に渡らば必船入に射られて海中に死ん謹て復往事なかれとその牡鹿感悲に勝ず復野島に渡る海中行船にあひて終に射殺さる故此野を名づけて夢野とよぶ俗説に刀我野に立る真牡鹿夢相のまくふ云云 【河社】契仲大人云、仁徳記に菟餓野の鹿の夢のことあるとぞ夢野とよぶ

よりて夢野とも書べし

茄菱 ひの部菱取の条〻〻〻

九月

柚 【説文】柚ハ橙に似て酢し柚の皮ハ甘く橙の皮ハ甘し、

柚味噌 【滑稽雑談】近世編笠柚味噌といふものを作る、柚一箇を二片とし、瓣核を去熟湯に投て輕くもみしめ、取出し乾〻置て柚味噌に用ふる所の味噌と其汁に盛り包み編笠の形にして蒸して用ふ祇園の茶店関東何某始て製する所〻、

行秋 行秋のこゞをもみぐらの邪、乙由

め

七月

益母草 【くくせ】猪蘇俗目えぐきと云茎ハ胡麻に似て葉ハ麻のごし其葉兩〻相對して一層ハ東西一層ハ南北とぶひ十文字をなす七月紅紫の小花を開く又微白の物あり本草に花四五月と記て土地の違ひあるべし、

八月

名月 【和漢三才図会】頭背翅尾黄青〻て鮮明〻俗に呼淡黄色是〻眼の睫に白圈あり、胸臆白くして赤色を帯ぶ腹白し性〻群をなして交を好て獎の中に在も亦一様

ふ集り相依て互ふ推を、其中一雙飛出群と接るときを、餘まさに相推を、又中より拔去初のごとく、毎ふ拶と好む

み

七月

鼠尾草 時珍曰鼠尾穗の形と以名ふ命○韓保昇曰鼠尾茎の端ふ夏四五穗を生ス

水懸草 増山の井説々り、貞德式車前の如く花赤白の種あり、水影草ハおなじく七夕ふとあり、水懸草ハ稲の事ふり、又或説ふ云ふ聖昊ふ水むらる心あり、

三井寺女詣 十五日 江州長等山崇福寺又蓮華寺地福院を大津の側よあり、園城寺又三井寺と称ス、園城寺ハ御園ふ隣ると以て名ク、三井寺ハ西巖ふ昊泉あり、天智天武持統三帝即位の時、この井の水と掬て浴湯ふ献ス、因て御井といひ後ふ改て三井ふ作る是三皇の浴井龍華三會の義、この寺平日女人結界の山ふ入ル七月十五日女人の参詣を許し登山せしむ、これを女詣といふ、當山ハ智證大師田珍の開基ニ、

妙法寺の火 七日の部施火の条ふ出ツ、

御狭山祭 穂屋 其日信濃諏訪郡諏訪明

神の祭ニ、今在記上諏訪ハ建御方富命、下の諏訪ハ坂入姫命○或説ふ御射山の祭ふハ、薄ふて神殿を造る其外人の家ふ祭の程ハ皆薄ふて作る、又ことさとかもまくきのごとく、日本紀第三野槌の神ふハ五百筒野蕎の八十玉籤を採て、是ハ天照太神と天の岩戸より出し奉る迄時のまぎれとて、信濃諏訪ふ山祭ふハ薄と以幣とす故ふこれを川信濃とつゞめ、○此祭ふ遠笠懸と射て進らせるに其始ハ田村将軍の安倍高麻呂と伐んとあふ、信濃國ふ至て此神ふ祈て申されふ、梶の葉の紋付し直垂着る人湖の波上ふ馬と立らせて笠懸射ろうしてそ今笠懸射て神事とすろいとの所謂ふろうして趨波も記て諏訪ともよめり、

縁起ふ出當社ハ桓武の御宇、田村将軍の建立とあり、この神ハをつく田獵のてとと主とうるこ、○穂屋御狭山ふ作る穂屋ありこの祭ハ貞德説ふ八月ニ藻塩草七月廿日ニ、増山の井ふハ七月廿七日とも此説多し、そもそぶ〻狭むしハ勅使と立らるる穂屋といハ、勅使尊敬のあ新ふ仮屋と設けるこ今もその余凡て穂屋と造るそ、新式秘抄ふ云穂屋つくるハ諏訪祭のとき、諏訪祭ふハ

年ゝ七十五度あり是その一ッ〻、みさ山祭ハ山城笠取の近所
くしい〻説あるとゞ名所方角抄奇枕秋の寐覚ホハ信濃こ
も○ 猿蓑 雪ちるや穂屋のすゝきの荷のすゝ芭蕉 蓑荷の花 周礼 庶氏喜草と以て毒蠱
と除く宗懐謂喜草則蓑荷の花是〻○時珍曰崔豹
古今註云蓑荷其子花根の中ホ生ぜ花のまゞ敗れそ〻時
食ふべし冬ゝき 清爛と、 兼三秋物 身ホ入 湛方生秋夜賦
氣入肌以凄凜
灑林蕭索 甲子紀行 のざらし 三日月 新月 朏魄 纖月 文選
月賦に出ず 礼記の注 月三日ゝて魄とふまゝ向云朏ハ
盛明あり、魄ゝ〻めて地と出て明生ス○新月纖月玉鉤
蛾眉磨鎌ホ三日月とい〻此外種〻の譬喩詩多
ゝ多し○何事のこゝそも似ぜ三日の月 芭蕉 水
梨 水梨形ち青梨 歌女 釈名 土龍地
う似く褐色、 蚯蚓鳴 龍子、寒蚓
ホの諸名あり○時珍曰東方虬賦云其鳴くこと長吟
故ホ哥女と名く、孟夏もゝめて出仲冬蟄結そ雨ゝ

ゝきい光ッ出晴るゝゝきてゝ夜鳴ぜ或ハつゝ結ぶゝきハ化ゝて
百合とゝゝ蟲蟲と穴とかゝゝゝゝゝして雌雄ゝゝゝゝ、
蓑虫 鬼の子 和漢三才図会 諸木の嫩葉新く詩を葉
巻ゝあり中ホ小虫と生ぜ其虫枯ホ〻雲
ひゝゝ糸と吐き、用て窠と作る長さ寸ばゝ〻〻〻
然ゝゝる艾柱の如ゝ毎ホ枝ホ縋る其虫も又黒色 歌段
あゝて首とゞる時々ホ首と出ゝて嫩葉と食ふ其音と
動き貌蓑者ゝる公羽ホ彷彿ゝり、 枕草紙 このむ ゝやこと
哀しむふのゝみ〻多ゝバおやホ似てゝるもおとゝろきこゝち
そあらんとこ、親のゝきなあひきこゝ生せて今秋風のゝんゝう
ホごゝんまゝるまゝてよゝゝゝゝゝてあげていまゝるもゝらば風の
音ゝくまゝりて八月ゝゝうホまゝぜ、ちゝゝくゝとはゝ乳げ乳く
いゝゝゝうあゝゝと、 蓑虫説 素堂 ゝれむ〻〻 ゝ声の如ぼゝゝ
なゝゝをゝれむちゝよゝくゝとゝゝくハ孝ホ専ゝるゝ也ゝ
いゝふゝゝゝて鬼のゝふゝあゝん清女ゝ葦の内ゝゝゝゝゝ鬼
ゝゝゝゝ瞽叟と父ゝゝて舜ゝゝ波ハ虫の舜ゝゝゝ下 ○
李吟云蓑虫とゞゝりハ
雜ゝ鳴心あんゞ秋ゝ、 八月 三村祭 三村或ハ水村ホ作る泉

州堺の庄塩穴の下条開口村ふあり、住吉旧記 祭る神伊弉諾尊の御子、事勝国勝長狭、後ふ生玉牛頭天王と合せ祭る乃も住吉の外宮なり故ふ朝廷二十年ふ一度住吉の社造り替をあらしめくいとき當社も此義あり、社地ハ開口村本ハ村原村の間、俗三村大明神と称し本寺祭ハ、

泉州府志 社説 云密来山念仏寺聖武帝の御願ふ依て行基僧正開基ある所、社領八十石〇例祭八月一日二日三日と三村祭又大寺祭とのハ木戸村開口村原村の産沙神ふて大念佛寺の鎮守ともハ、

三津八幡祭 十月

摂州西成郡大坂三津の寺町ふあり、三津ハ高津敷津難波津是ハ傳いふ昔行基寺院を建ハ三津寺と号ハ後神託ふよりて八幡と勧請ハ毎年八月十五日祭礼なり、社説ふいふ當社ハ清和天皇の御宇、紫宇佐の神男山ふ迁座のとき、西海より初て至りあふ洲中ハこの旧跡ふ祝ハ祭るといふ又一説ふ應神天皇行幸の地ともいふ〇摂州難波堀江の人月と此所ふ賞ハ各深夜ふ及ひて家ふ帰ること月見と称ハ又難波の御祓ハ称ハ是八幡祭ハ、

水引の花 和漢三才 月令 水

引草高さ二三尺葉楊櫨ふ似て皺ありて狭長穂を出小き花つく紅色其莖山く纖く紙縒及び水引の如し故ふ名づく、

水始涸 月令ふ出ス

九月

三度栗 本朝食鑑 上野

州下野州ふ山栗あり極て小ふして一年三度栗と収ハ故ふ三度栗と称ハ味佳あらまくせハ古のもの、

水木 和漢三才 月令 美豆木

木の葉ふ似て微厚く冬凋む花藤の花ふ似て黄色なり一種土佐の山中より出る者高さ一二丈葉粉團花の葉ふ似て小し正月黄花を開く蒴蔕ハ下垂ハ子と結ぶ赤色呼て土佐美豆ハ本草〇実を賞して秋とハ、

蜜柑 和漢三才 月令 太知波奈

名ハ橘類の總名ハ今單ふ太知波奈と称ハ橘ハ蓏果ハ其皮を葉ハ包きハ蜜の如し故ふ名づく、

たち草 橘ハ淮ふ化て枳ハ江ふ化て枳殼とハ

ハ此國ハ九年毋ハ生ハ其樹ハ移植て出羽ふ植ハ枳殼とハ

水の紅葉

川の紅葉ふ同し、
かの部こゝるべし

七月 七夕 七日の夜 二

といふ、

星 牽牛 織女 犬飼星 月今廣義 焦林大半記云、天河鼓 彦星 なかつこの河の西ふ星あり、煌々たり〳〵

参こ俱ふ出ることを牽牛とふ、天の河の東ふ星あり、微々たり〳〵弦の下ふあり、二星と織女とふ、世ふ雙星ともいふ

名抄 尓雅注云、牽牛一名河鼓 和名比古保之々 伊奴加比保之 織女 和名太奈八太 豆女 和訓義解 ヒコ星ヒコハ男子の美称織女の夫をこ故ふ男星ふ云ふ

二星の屋形 唐の天宝年中宮中七夕ふ錦繍とふ結ひて樓殿とふ

こゝろあり

二星の屋形 花果酒炙と陳ね坐具を設

また高こ百文数十人と容ぶ、

け以て牛女の二星を祭る、○本朝式ハ少く異ふ七ツの棚とかき花を折瓜果を備へ

七種の舟 七種の舟ハ色々の紙を七色舟ふ積て手向

空焼香の事あり、

七夕ふハ るとゝふ七夕ふハ七の数を用ふ、

新吉原燈籠 一日より享保元年江戸三十日迄

吉原の遊女王菊う追薦のこゝ一年七月中の町の場屋

各燈籠を出す、是より例しまりて毎年此事あり、その燈

籠綾羅と以て鱗獸諸物と造て奇麗壮観つゝ〳〵も、

この節男女群集まこれと燈籠見物とふ燈籠ふ多くは王

菊ゞ来る夜 **聖霊棚** たの部夏条

の条ふ出ツ、 **鹿鳴草** 異名分類 名

不知作者

抄鹿鳴草 和名之々波木 故ふ此名あるべし、八雲異本ふ此名なし

草とあり、教長集都ふも咲ふ、ども異ふ名ふ草、秋の

山しびなる 大和本草 **老鴉蒜** くちびとぐれとふ、四月或ハ八九

里、 **石蒜** 月赤き花ふく下品、此時葉ふて花ふく故ふ

紫ふて捨子の花ふ〇彼岸花ともいふ、曼珠沙華の条のまこゝろ

秋海棠 名花譜 秋海棠一名

断腸花 嬌姿柔軟真ふ美人の姿と撓がごとく性張と好む、日

と見るふ即瘁く九月枝上の黒子と收め地上ふ撒けハ明春枝

と発ま老根ふを過る者花発き更ふ茂る 大和本草 寛永

年中中華より初めて長崎ふ来るそれ以前ハ本邦ふあり、色

海棠ふ似くり故ふ名づく 五雲〇 **椿** 時珍曰椿樗名椿

秋海棠西瓜の色ふ咲ふ、芭蕉 樗即ち樗ふて軒

ふる者故ふこゝと椿ふ、他の枝熟するとき、黄赤惟熟と

とゝ、ども赤青黒色搗碎き汁と浸ることを漆樗ふ云曾周

諸物と混べし、

澁取 和漢三才圖会 柿澁造る法、柿一斗故ふ漆の名なり、帯と去水二升五合ふ和確ふ搗こ搗ふ盛り宿と經てこれを搾て渣も又水ふ和て二日と經ふさらびこれと搾る其用甚だ多し、

蕣 秋物

ちら露 李白詩 秋露如白玉 伊勢物語 ちらくまもの何ぞと人のとひしらねど露とこたへて消なまし

物

新月 みの部三日月の条ふ注も、

ちまほし 月の異名なり、秘藏抄 朝敷

ちらちらるみとりの空ふ凡ふけぶぐ

常娥 淮南子 羿不死の藥を西王母ふ請入、姮娥これを竊んで以月ふ奔る 後天文志 常娥ハ羿 **真如** 嫦娥これと竊んで月ふ奔る云ふ、不死の藥を竊んで月ふ奔るこれと嫦娥ふ

の月 法華玄義 清淨真如ハ雲外の月のごとし、○衆生の真如仏性ハ常ふ煩惱ふつゝまれても其体ハ少しも染ずして汚ずして喻ハ月の雲ふ掩れても其体ハ清く明らかなるが如しなり と真如の月とかゝ真ふハ不変の義如ハ不異の義ふ

篠芒 宗祇曰 ものもきとハ縦ふ白しのゝ穂ふいでゝ薄とかゝ、

綴芒 文あり、

忍草 真淵云おのゝ草ハ和名抄の出口の類ふ垣衣をものゝふくもみくり、古き築地朽たる物の端古き軒端あるゝふ常ふ生る草と云、

とゝゆかくもハ山中ふ有るひとつの草とさてろのけして根とつゝそて軒ふくゝるを云ハ古きところ得ぬかの偽名ふ、○今云忍ハ本草ふいハ石長生のゝゝひとつ仏ごと石長生ハ四時凋まぬ今俗の檜ふ掛るものゝ冬枯るゝ、○後醍醐帝の廟前ふて 御廟年を經て忍ぶハ何とものゝ草 芭蕉是ハ垣衣ふよ

新澁 七月の部渋取の条ふ出ッ、

鹿 格物論 鹿の性驚烈多し能良草と別ッ他獸多くハ十二辰八卦ふ屬て惟鹿然らず一千年ふ一て蒼鹿とかる又百年ふて白鹿と化し又五百年ふて玄鹿とかる鹿ふ麋あり鹿あり麋あり、天和本草 鹿の角ハ春生し夏長じ秋堅く冬脱、牡鹿ハ鳴き牝鹿ハ鳴らず、七月の末より八月の中ふ九月末まて鳴く、○ちせぎ、紅葉鳥、ささなき、夢野の鹿、肩拔鹿、まろく、各頭字の部ふとりて注も、但もがくを鹿といつるハ誤なり、もの部ふ注も、

鹿笛 獵人鹿角の根及び胎

鹿の皮或ハ蝦蟆の皮と以笛を作り吹く牡鹿の音を偽る牡鹿匍匐して来て立見ル弦ハ羅ニ或ハ腦穿ハ入ル

つれなく草 女のさそふる足駄をて作る笛ハ秋の鹿のおさまるなり

鹿垣

此獸田圃ニ出て穀菽を食農人ことを防んためハ垣を設く是を鹿垣と云

鹿狩

白虎通 王者諸侯田狩ハ害を除く

鶉

陳藏器拾遺 鶉ハ鶉の如く色青く觜長く沢塗の間ハ在て鶉々音を聴て村民ハ云田鶉の化する所○時珍曰今田野の間ハ小鳥あり いまゝ雨らざる時鳴く是なり

和名抄 鸘 楊氏抄云之木一云田鳥

和漢才 鶉金 按るハ俗ハ鳴字と用ハ蓋田鳥の二字を製する歟○時珍曰杉雛 本草斗志義 按るハ臨海異名志云閩越ハ杉雛あり常ハ杉の樹の下ハ居頭上ハ長き黄毛の冠あり頬青正色垂縷のごとし

鳴突網

職業盡 下総国荻原辺原中ハ鳴の切り居く動くあるを七八間隔て竿羅を持て鳴の正面ハ向ひ拡らいと付ちぐらくるりくると廻て最初ハ大輪ハ廻て段々追寄まるハ輪ハ巡て止々六七尺ハ間近くなりてかの竿羅を投てとらへ六七尺の所ハ羅をとらへ捕て手練の業ハ是を鳴突ハ山城の鳥羽辺多しとかりハ

鳴の羽掻

九野 鳴突ハ萱津のあまのひまをかる 淵文

和訓栞 鸘 羽をもぢく音の高く聞ゆれハ其数もまた百羽ときこゆ数掻とかをとも暁天ハ必くもれ出ハ直ハ暁事ハ也とかとい

鶏鳥は有經

十巻合 暁の鳴の

和漢三才圖会 正字未羽をとも羽ぶき君ぞ夜ハ我を数く

和訓栞 俗諺 その田沢ハ居時の閑黙なるをもてなり

鱰

詳俗云志比良長崎の人呼て比以乎といハ接るハ鱰の狀鯉ハ類して頭ハ小く尾鱗紬ハ味もまた鰒ハ似て大なる者二三尺九万尺と名く其多くこれあるを以ていハ越中鱰養と上ハ也 相傳云中華の魚ハて四五月唐船多く入朝の時来て群遊唐船帰る時九州の鯛唐人肉食の腥き氣を慕ひ船ハ著て入唐ハ夏月鱰日本ハ多く冬月鯛中華の湊ハ多し

大和本草 シイラ又名 久ヒキ

筑紫ハ猫ゾラとい八味美く

八月

白髭

開帳 五日 神祇正宗近江名勝白髭大明神ハ猿田彦也社

註 比良明神と同体〻〇昔ハ開帳あり元禄中より止む今ハ只内陣と唱て宮殿を拝せしのみ

四月二の辰の日祭礼神輿渡御あり往古の神門石橋の遺ハ今水中二町ばかり湖水の沖ふかくうゑ縁起ふるき鳥居のありし所と鵜川らハ社頭より二十町ばかりふ河あり鵜川と号す此川の北と鵜川領らハ別當と白頭山延命寺福壽院と号毎年二月八講あり開帳八日間 志

賀八幡祭 十五日 淡海志 四十代天武天皇即位九年壬申近江国滋賀郡ふ蛮跡ハ幡一の御前ハ幡大井ハ今の聖真子也〻唐尤僧の形聖真子ハ阿弥陀ハ幡大井の分身〻〇是山王七社の神ハ〻淡海国滋賀郡坂本村ふあり見瀬村の神社ふハ月令ある〻ハ今ハ山王祭の外神事ふきさゝあり〻

秋社 廣義 暦書云立秋の後五戊の日と秋社〻て註ふ云社ハ后土あり民〻てこれと祀りむ以て農と祈ふ

死活杖祭 此祭ハ京都猪の熊三条の南禍速の神社ふあり 雍州府志 昔刑部省此辺ふあり獄と断〻て以て死刑と行ふ故ふ刑死の人の為ふこの社を建て祭祀と修せり毎年八月神事あり〻と〻と死活杖の祭といふ〇千本引接寺千生の地蔵ふあり毎春修せる所の念佛會ハ元死刑人の為ふ修行せ〻ら給れしとぞ

四手打、ちろろ打 きの部破の条ふ並て、

紫苑 鬼の部

撫頌曰紫苑三月の内地ふ布て苗と生て其葉二四相連て五月六月の内黄白紫花を開く黒子と結ふ 万葉 萱草吾下紐余着有跡鬼乃志許草事仁思安利家里 家持〇鬼魅女草〻れ紫苑〻 神中抄 鬼のまこと草〻ハ別の草の名ふあ〻ら〻忘草ハ愁と忘る草ふ〻れい憂〻き人と忘れん料ふ下紐ふつけ〻れ〻更ふ〻て〻る〻〻忘草〻ふ名ハ只事ふあらん猶意〻られハ鬼のまこと草〻りとふ〻〻ろハ誠の鬼ふあ〻ら〻と〻ハ〻詞〻日本紀第一ふ不順也山目汚穢之所云〻〻わろ〻と嫌ハ詞〻山の字と〻あり 俊頼抄 昔人の親子と三人ま〻り此〻ら〻孝行ま〻る親〻せて〻ら〻敷き塚ふ詣て在り如く有る事〻〻れど兄弟〻〻て

ゆきぬ其兄公につかへて私となりぬるに堪かねて思ひける
やう只今止む時なし忘草ハ思ひをはらす物なりと塚に
この草を植たる弟ハいよいよ恋しさに恨みて紫苑ハ忘れぬ草
なりと植ける兄ハいつの程にか忘れて行ざりけるに世に萱草を忘
草といふ事あるにや弟ハますます絶ず詣でぬるある日親
の塚に声ありて恐るべからず我ハ君が親の塚を守る鬼
神なり兄ハ忘草を植て公につかへしも忘られその
家を思ひ実に其許ハ思ひ草を植てますます忘れざる
至孝なり天帝これをあはれみ給ひてこれよりむかへむるハ今より益
あらんことを夢に告しらせむといひて止ぬ弟不思議に
おもひ帰りぬるに益ある事ハ夢に見るに違ハず徳を得
たりといふやこの紫苑草ハ嬉しき事ある人ハ植てみるべき
又歎く事ある人ハ植べからざる草なり故に鬼の
とらふ鬼のしこ草とよりいふと鬼の醜草と云なり

椎蕈

和漢三才図会 椎の木より生ず大なるもの二寸ばかり大小叢生す

松露

和漢三才図会 麦蕈 俗云 松露沙地松樹ある陰処に生ず松の津液と秋湿と相感じて菌となる繖柄なく状ち零餘子に似て円く大き

し外褐色内白く柔らかに淡く甘し香あり

湿地茸

和漢三才図会 原野湿地に生ず故に湿地茸と名く状松茸に似て小くすぐなるに過ず繖の肉灰白色柔らかく脆く破れ易し九月盛に出づ又繖の好黄色の者あり並に食ふべし 本朝食鑑 標茅蕈 標茅ハ京の俗多く生ずる地の名下野国黒髪山の下に標茅が原あり此則其処なり此茸草芽卑湿の地より生ず故に名づく

猪蕈

和漢三才図会 蕈茸に似て黒く繖脂潤ひ其裏に穴あり蜂の巣の如し毒あり

代々つる雁

夜止宿する中更毎に声を換ゆこと代々つるといふ代とハ田のことなり春の部黄代の条に注あり

四十雀

五十雀 和漢三才図会に 雀に似て大也頭黒く両頬白くして白き円紋黒き圏の如く頷黒く背胸灰青翅尾黛黒にして灰白の竪條あり腹白色にして胸より尾に至て黒雲の紋あり其声清滑にして多く囀る四十ばかりといふが如し故にこゝと五十からといふ其老るものも毛と換色なし異にして形も又大なり俗呼で五十雀といふ雌ハ腹の黒紋微なり

鷦鷯

鷯鷯 状ち母

雞ハ似て鶉の如し胸の前ハ白き斑ありて真珠のごとし背毛ハ紫赤の涙の文あり○時珍曰鶉鵪飛ときハ必南（翥る晉南ハ懷南ならふ）江左ハ逐影と云張華注云飛と必南へ向く東西ハ回翔ときハ必先ツ南（翥る其志心し南と懷ひて北ハ徂と性霜露を畏ると早晩ハ出ると稻ハ夜抵ハ木の巣と以て身を蔽ハ多く對し啼く今俗其鳴と謂て行ハ得奇と云其性潔きことを好む

和漢三才圖会 字彙云鶉鵪其ハ色斑数月ハ頭ハ正月の如きハ一さハ飛て止む蓋未知然るもいかんや近年亦中華より来ることあり最も珍しとす狀矮雞の雌ハ似て頭ハ鶉の如し

藥塩草 此鳥ハ裏ハ白き鳥ハ仍て秋の末ハ紅葉の散ると背中ハ負ひて雪霜の寒を凌ぐ故ハ寄ハ鳥の上毛の紅なるとあり

鷃 和漢三才圖会 今鷃青鷃一物とまるハ非ハ鷃ハ山林ハ在て原野ハ出ず形雀ハ似て黄赤色翅ハ黑き紋の斑あり脚掌黑し

新酒 本朝食鑑 酒ハ凡新釋の白米一斗を用てこれを醸し須加利（酒を濾ハ布囊）ハ填て舟ハ入其酒の水半滴る復布囊ハ入て壓ときハ酒おのづら滴て出づ酒滴アリ尽て後汁と取滓と去れと新酒とハ○新走中汲醂醸醂醅袋洗各其頭字の部ハ見て注ス

九月

四の宮祭 十日

近江国滋賀郡大津の駅ハ在て祭る神四座大比叡大巳貴小比叡仲哀天皇小禪師火々出見尊ハ按ずるハ當社ハ日吉の神殿ハ故ハ四座と以て此地ハ迂ると里民云この神鎮座の日官幣使四位某の卿ハ故ハ四座と以四位の宮と号ると四神鎮坐のゆゑハ四位と号ると社説云祭る神五座大比叡小比叡比叡小禪師塩土の老翁ハ禪師と本社ハ故ハ四の宮とハ例祭九月十日大津浦中の大祭ハ神輿二基引山十一邊物造花木を出ス夜ハ入て相撲有

下鳥羽祭 十日

山城国宇治郡下鳥羽ハ在り祭る神牛頭天皇と号ると例祭九月十日下鳥羽及び横大路の上人木居神ハ今神輿一基あり名勝志云神社ハ法傳寺の巽二町むかふり森の中ハ在り

白川祭 十三日

名勝志云天満天神の祭ハ洛北白川の里南山の上ハ在り播社山王春日八幡紀事神輿一基鮮五本あり○社説云祭る神天満宮少彦名

の尊揺社ハ前ニ同じく天満鎮座ハ延喜八年三月十三日之
旅所ハ本社鳥居の前二町ばかり西にあり例祭九月十二日
土人産沙

十三夜

後の月、二夜の月、高燥二五十三夜の
豆名月、栗名月、月見ハ我朝の風之
神ゝ

けゝと迫世のこゝせ儒者ハ天邊將滿一輪月又光影遍三
輪將滿とゝる詩又明の十二家詩ニ鄭北谷何大復が
十三夜の月を翫ぶとゝる詩と引て異朝にも十三夜の月
と賞ぜしゝ代ど附會の說之信景云今彼集十二家詩を
るに是八月十三夜にして九月十三夜にあらず其他にも九月十
三夜の月と賞せし詩文多し一句一章ありとも是れハ
其人臨時の興にして天下の名月とする事ハ我朝のごとし
旧風之右中記七十五代崇德院保延元年九月十三夜金青
雲清く月明らかに是むし寛平法皇明月無双のよし
仰出さる依て我朝九月十三夜と以明月の夜とす常盤記
生熊
万里小路詔光卿の御說と引て云十三夜の月と賞
せしゝ起ハ天暦七年九月十三夜始て月の宴と行
ひしゝ遺例とし来ゝ但此宴ハ本八月十五夜の
御遊びとおなじて行ひしゝ其由ハ八月十五夜ハ朱雀帝

の御国忌に當ゝ故ゝも後れて此九月に其遊を行ひ
しゝ也此月ゝ十五日ハ猶其日次も忌ゝ故ゝ
十三夜に定て此月の宴と開き行ひしゝ○忠道公十
三夜翫月詩云閑窓寂々月相臨從爲賞翫秋宜西樂潘
室昔蹤凌雲訪蔣家旧徑蹤霜尋十三夜影勝於古數
百年光不若今馮前軒回首見清明此夕價千金○唐に
富士おゝいなる月も見よ素堂○後の月とハ十五夜に對
していゝ○二夜の月十五夜の月どゝ二夜の月と賞ず○
栗名月豆名月ハ浪華の俗ず十五夜と芋名月
といひ十三夜を栗名月豆名月といゝし、

芝神明祭

十月ゝ
廿一日まで

江戸芝増上寺大門の傍にあり神領十五石
別當金剛院神主西東氏當社旧地に増上寺の
山際にあり故に飯倉明神と号ず祭礼九月十一日より廿一日迄て
神幸ず此節時ゝて秋雨多しゝを以て世俗神明のめぐりあ
祭とゝ祭礼の間社内に於て生姜と尚に是を根生姜と呼て一日生姜
ふ本朝醫方傳に云薑ハ穢土と去神明に通ず上俗あゝの
事と誤て傳ゝ生姜を賣ゝ此外檜割笠電に藤
の花と動き内に鮑と盛りてこれを凡木箱と称ず但し

風衣の餘りあて作れるといふる謂ふべし、城南寺祭
赤詣の人必生姜と此ちまき箱と買て帰る、

廿日 神社啓蒙 城南の社ハ山城国鳥羽の里にあり祭る所
の神ハ生鳥羽天皇、○社説云祭る所二十二社の内七社、
伊勢、石清水、松尾、稲荷、賀茂上下、平野、春日、以上鎮南神
と号す、例祭九月廿日神輿二基あり、こ地人皇七十四代鳥
羽上皇の離宮ありて王城の南 紀事 鹿ヶ谷祭 廿四日 浄土村
にあり城南の離宮といふ、
禅師祭云 洛東銀閣寺の門前地の古ふ十禅師の
社あり同所ふハ所明神の社あり神号詳ならず土人産沙
神と号祭礼九月二十四日 今九月廿日 摂州府志 鹿ヶ谷
天皇祭云 今祭礼微ありて記もふ及ばず、

猩々菊

黄猩々ハ万重大ごん、乱猩々ハ本紅にて葩
尖て、大ごん、小猩々ハ猩々の如くみてふ、 女花 菊の異名之
女節 女莖の異名あり、

兼和の色

菊の異名之 藻塩草 唐あて菊と
是ふよりてふ、
ゆてゑゆゑとハ陶淵明ふ、我朝まていい兼和帝
仁和天皇より始てゆて遊ひゆへ故ふ兼和の色と申よ」此

ゑゑひまゞ菊の品も分ゑ毛ぞ、只黄ありと用ひられし黄
菊をきゝて兼和色とも藁我菊ともいふ、藻塩草の
説ゑくの如くとも類聚国史ふ桓武帝の菊の部ゑ載
らるゝ毛れで兼和帝より菊とはゆて愛しかひ、
只此帝ゆきて菊とゆて遊びゆへ
く後の哥ハ多くもち菊とあり、

ちら菊

和訓栞 菊ハ大要
黄ゑ貴ゑり詩人の賞ゑる所薬用ふ入もまゝ同じゑる ふ哥
ふゑゑくゆくよりハ新羅菊の義ゑとゑり花史在編ふ菊品
新羅一名倭菊千葉純白ゑゑゑり、

芍薬の根分

芍薬其花肥大
壊ゑゑゑゑハ毎年九月根を取削り去る、

柴栗

栃栗のゑ
あり、

熟柝

暢ふ秋の
熟柝哉

椎の實、椎柴、椎の葉、

大和本草 椎ハ闕書ふゑゑゑ載て
支考
本草ふゑゑゑ 羅山文集 余幼年より椎ハ木の名ふ果
あゑて太平御覽ふ在と聞く後ハ人考ゑ盍問説後頁国
書幸山志を見るふ椎ハ科子ゑ其末尖て錐ふ似り
故ふ椎といふ宋志ふ椎ふ作る木に従ふ」下略 和漢三才

畜会 椎子、鐵樹、其葉柊ニ似て鋸歯細ニして強く冬も枯
葉落ても其実長く尖て筆頭ニ似て紫褐色仁白く両片
しあり之を丸煎鉤栗椎子の揀相似たり小椀の如し俗呼
で供菓とす○季吟云堀川百首ニ椎柴を冬の題ニ出
せり其故如何冬とする一説あり実ふつきこと椎
ハ秋季と持たるゆへ椎柴も葉も実も秋なり

松子

新松子 海松 大和本草 海松葉あり若水日信州
戸隠山あり然るハ日本ニ本ありなり
から松と訓るハ非なるべし松ハ大ク子ハ果ニ食
ふべし日本の産ハ朝鮮より来るゆへ唐名抄松子
漢語抄云五葉松○青松子和名万豆乃美 貞享式此式
大坂の里語ニ新松子と云 ハ例の賞翫ス

新蕎麥

奈何くるれハ苟ハ冬ニして食ス

新米 食療本草

ハ秋なる前後の働と賞ス

粳米新熟の者ハ気を動し一名千首かりのこと
年を經る者ハ赤病を発す

霜置て岡べの道ハ 相踏鹿

霜置て岡の部ニ
併せ出ス

ん **ひ**

七月 楸

の菓と戴く 夢華録 唐の時立秋の日京師楸の菓
を賣る婦女児童前て花の樣なり
てこれ

一菓 桐一菓 淮南子 一菓落而天下知秋○一
と戴く 菓ハ桐なり柳をもいふ句体なり

一菓の舟 一菓の水ニ浮ひるを舟ニ
一菓の舟詩文多し

冷 御今 初秋の事ス

暮秋ニハ

彦星 去の部二星
の冬ニ出ず

火取香 棚機ニ手向る ス 江次第

西北机ニ伽香爐一口納殿の百和香四両盛之

蒐麻子 公事根源 机の上ニ火とりニ終夜空焼物なり

唐胡麻なり

楸 時珍曰楸葉大ク早く脱ス故ニ
の部ニ注ス

榎 榎葉ハ小ク早く脱故
ふれと榎ならふ 花彙 爛 品字義 ヒサモ キサケ カフ
ふ出ス

テコブラ、ライテンキリ、人家往々ニ栽高サ二三丈白
鐵樹ニ類して皮赤龍の鱗の如し葉ハ杼木ニ類して
大或ハ尖て或ハ三尖夏筒子花と為て小ク白色
紫点あり凋て莢と結ぶ数十簇

蜩 大和本草 時珍曰小ク黄色

緑あるを者、尔雅註云小青蟬也、此せゝ山中ニあり、蟬ふるく故ニもく、常の蟬ヨりハ小ニて青赤ゝ音聒々ゝ聞ふ堪ゝ寒き

兼三秋物引板

拾穂抄 板ハ木を添て綱とつけて引て

ゝゝ鳴く、

し鹿と鶯

一本芒 天和本草 一寸ヨ

こゝ物あり、

八月

菱

取

菱角 時珍曰芰實一名菱或ハ沙角その角稜峭

これと菱とハ俗呼て凌角、中暑自潮中

ふ生ず、葉実ともふ小ゝ其角硬て人を刺其色嫩ふる

者青く老る者黑し嫩ふる時剥食ふ甘美ゝ老る時ハ蒸

して食ふ 天和本草

八月九月これを採。

穆 時珍曰穆、苗茭黍の如し八九月莖を抽んで三稜あり、細花と

ひらく、族りて

栗の穂の如し、

瓢簞、百生 千生 和漢三才圖 青瓢簞草 会 苦瓢 俗

三云瓢簞壺盧と一類ありて別種なる者明けし巣花ふ

かゝて壺盧ふ似て瓢の味食ふ堪ゝ円なる者多く

炭斗ふ作る長して細腰ふなれ酒樽ふ作るゝ長五六

寸の者あり、俗百生と称ス三寸の者あり千生と称ス細

腰木末相均しき者俗呼て閻夜とハふ、珍ずらし、

平蕈 和漢三才圖会 平茸山林の濕地ふ生ず苦楝

の樹多くこれを出ス十月盛ふ其形蕈ふ似て瘦傘

薄く面し故ふ名く大さ二四寸ふ至て大なる者あり灰白

色裏白く細き刻こあり性柔ふして脆く其柄多くハ

正中ふあるゝ也、畧偏て生ず、大小義生ず味淡く甘し

鴻 和漢三才圖会 菱喰 状ち雁ふ類して大なり、背頸俱ふ

灰色翮深黑其尾本白く末黑し、腹白く脚黄嘴黑く

して鼻の辺ふ黄の條あり、其肉の味雁ふ劣らず

鴨 和漢 脂ずくと多し、臭香鶴の肉ふ似るとこあり、

三才圖会 俗云比ゝ土里状ち鸛鴿ふ似て尾長く蒼灰色

頭上の毛乱ゝ起眼の辺ふ微赤色ゝ帶ふ胸臆及ゝ腹

の下灰白く倶ふ黑き斑あり、嘴利く脚脛短く掌ゝ蒼

黑く常ふ群ゝ飛啼好て草木の實を食ふ或ハ云

山茶花 古抄秋ゝ貞享式ふ云ゝ注ず、

日雀 和漢三才圖会 俗

と食ふ、

鵐 冬の部ふ云ゝ注ず、

云比伽羅状四十雀ふ似て小く頭背赤色頬の辺

ゝ白黑相交ふ腹白く翅尾黑く其根澤あり、

鶺

河原鶏 和漢三才圖会 俗云比和止里雀ようり小く全体黄色ゆえ青と帯ふ頭背頸翅ふ黒を交ふ尾黒し腹黄白脚灰白し脚黒し其吉清滑よく轉ず又河原鶏状鶏ふ似て稍大く頭背灰白し眼の後微黒く背ふ黒き斑あり翅蒼黒ふして黄と交ふ

大和鰓漬 和漢三才圖会 一二すむ

本草 唐鶏紅鶏蓼鶏ふ皆妖畧之

生薑穂蓼番椒ふ漬るも又佳し鰓の字未詳 **本朝食鑑** 鰓ハ小鰯なり

九月 九日 **公事根源** 十月の旬のこふあらぎ今日を氷魚と給ふ例あり **年中行事** 菊ゆかぢ折

賜氷魚 氷魚と給ふ例あり

百菊 滑稽雑談 いまて草ふ云和朝ふ如しく氷魚と取てつくり肉ふ給ふこゝきのちつまと肉ふ合て菊と愛する中ふ殊ふ百菊くして百種の名あるもあれ

たり傳いハ足利將軍義輝公御園ふ植らまし御寵愛あり義景藤孝両人ふ贈られ一百種の菊あり百菊ハこの種なり

鴨上戸 和名抄

かの部

ふ出づ、

錐栗 時珍曰栗稍小きゆゑ山栗ともいふ、山栗の回りて尖らざるを錐栗ともいふ、

の樹 和漢三才圖会 其木の葉女貞ふ似て厚く狹く長く微淡し三四月小細花を開く深赤色実を結ぶ大さ豆の如し自ら裂る中子細小く黒色別ふ其葉の面ふ子の如くなるもの脹出て中ふ小きな蟲あり化し出づ、殼ふ孔口あり塵埃を吹去ふ空虚となる大なる者ハ桃核ふ如し其文理榧榔子の如し人用ひて胡椒秦椒ふの抹と収る瓢瓢ふ代ふ故ふ俗瓢の木とも云ふ或ハ小児戯ふ吹て笛とす駿州ふ多くこれあり祭礼ふこの笛と吹て神輿ふ供奉を

榲藤 時珍曰其子榲の形ふ象る故ふ名く紫黒色微光る大さ一二寸四五ふて偏ふ人多く肉と剔き去り葉瓢ふ作て腰ふ垂る 廣川記 藤ふ似て樹ふつく通草のごとし

穂 字彙 抹再び生る稚苗

吉会 川まる田ふ植る苗ちのわふ出ぬ世と今ちらふあきもてゆとう

七月

百子姫 捌機七姫の内ふ百子の池より名くとい、百子の池 七子花 の部

二条ふ出川、紅葉の橋 [古今]天の川もみぢをはしにわたせばや、たなばたつめの秋をしも待つ
まま川、真淵翁云もみぢをはしとやくせむふや秋を待て
まさうとりふのこゝ、紅葉の橋ハ秋ハもみぢを尊とすれバまず
初秋のて紅葉せぬ比ゆもうつらで允の秋のさまおもてりふ
のこゝ中略此紅葉と橋ふとりるるところ得るかるよのぞ
今ふむむかなやまりさるが多し○青藍云此古今集の言の
より天の川原ふもみぢの橋なる趣ハ古くよりいゝまめりを、
又棚機のまつまんとするとき、紅涙とおとしたと、
もみぢのちりしといふ説ハ、後ふ設けるあるべし、紅葉
の帳 [藻塩草]紅葉の戸帳とハ錦の戸帳と七夕ふいひ
よせていへり、[夫木]かさゝぎの河風さむみたえぬらんの、
もみぢの戸なり浪や
うくらん、後九条内大臣、文珠會 八日 [公事根源]是ハ泉
寺西寺ふて行るゝ、
仁明天皇天長十年七月八日、大法師泰善ゆじめて文珠会
と修せ、[大政官府]其略曰、文珠会ハ畿内郡邑廣く此会
を設け、飯食などを弁じて貧者ふ施しめよ、是又文珠涅
槃經の文ふ依るとぞ、云ゝ若衆生ありて文珠師利の名を聞ん
ふ十二億劫生死の罪を除却せん、若礼拝供養
まる者ハ生々の處恒ふ諸公の家ふ生まれん云ゝ ともかゞ
し
[秘蔵抄]ふ出 稲妻をいふ、桃の子 時珍曰桃の性早ふ花道安く
して子繁し、故字木兆ふ
従ふ十億を兆しいふ
其多きをいふなり、
兼三秋物 望月 [説文]望
八月の満
るゝ日と相望む、君ふ朝するが如し、月ふ
从ひ臣ふ从ひ壬ふ从ふ壬ハ朝するなり、 紅葉鳥 鹿の異名
之[蔵玉]もみぢする川田の山のかげ
ち鳥かとちもの衣きてやあくらん、 桃吹 との部木綿
の条ふ出川、
藻ふ住虫音ふ鳴 [本草約言]紫菜其中ふ小螺螄
あり [大和本草]約言ふいへる古
哥ふよめるわれからなるべし、藻ふ付て殻の中ふある螺也、
分殻の意、[古今家雅抄]蜑の刈藻ふ付て此むし我から
と身をほろぼすとかきて名づくるとぞ、[古今]蜑の刈る藻ふ
すむ虫のわれからとねをこそなかめ世をハうらみし 直子
朝臣○御傘 鵙 [和漢三才図会]鵙音臭 兼名苑又鶪字
ふハ雑とあり、と用ふ日本紀百舌鳥と用 未詳 鵙形

鳩ふ似て小く、頭背尾ふ至て黄褐色眼及び紫顔の容小き
鶏ふ似て、眼の辺ゑ黒く眼上の白き條一線ふ引紫黒くして
末曲る類臆白く腹黄赤黒き横彪あり、翮白く羽黒し脛
掌黒く爪利して毎ふ小鳥と搏て是ど食ふ其声高く
喧しく奇異ならざるなし

鵙の草莖、鵙の早贄

奥 俄

○秋ふ至てよく鳴く、

抄 むかしある男、野と行て女あひぬとのく加ざらへつき
て其家をとふふ、女鵙のおくる草ぐきをさして曰、我家ゑ
の什草莖のもぎふ付たりける里ふ行ることふ男渡
おれらぎとうるぬぐさと契てさうぬ、その後心ふかるも
ひあぐらおかけふつうまろり、私とうりうる浮ぐふと
まれて、ゆるぎまりぬ、次のとしの春、こぬくありし野ふ行
てとくく草とうるふ、霞こらくく聳てまぐく見えず
ぬれもまあぐるとむあく帰さるといりこれ故將作の
傳あり、

袖中抄 鵙の草莖とも鵙の草くぐとらふまり、

奇林良材 鵙の草莖ハ鵙ハ時鳥の沓ゑふのそ有るが
沓手と取てうくぐくふうて其うくふ名のやうの
物と、草の莖ふ寄ものるとらふとつり是と鵙の早

贄とのつ人、

藻塩草 鵙早贄とふとをしてとろの草
莖ふ付ることるかくふ蛙をとりて刺て時鳥の為ものく
ものみハうくとつりハ雲の御説ふ説々あり、此説ふ過べの
らぐ、

日く仕と 鵙の性くて必蛙或ハとうけまぐと取く、
草木の立枝ふ刺貫き晒ふくまりこれを鵙の早贄とふ
人気疎き別荘とふまくあり、

○諸説くくふる本説ふとつくも後の人取用ひくとある
哥ことあるて、こおむとろの説ふまぐひて句作あるべ、

鵙落 紀事 山林の間四ふ鵙の目と縫ひ架頭う
居傍ふ鵙竿と設て鵙鳥と熟る是と鵙を落と云、

八月

木犀

花の条ゑ出、

部桂の

九月

百夜草

菊の異名まり

藏玉 名十〜

ゆ人翁が庭の百夜草花ときてこそ白妙まるれ 大和物語三篇
の里ふ老翁あり、彼庭ふ一本の菊とうもて此翁もてぐ人の
菊秋冬まぐて、春夏まぐも花も葉もうくぐ、所の者不審
して委くくぐ聞ふ七月一日より毎夜菊の下露と器物すう
くとし百夜あり、毎月此花と並ぶれる故
て此菊四季ふくまぐ、仍百夜草と号く、

糸葉

和訓類聚 紅葉とるる又

紅出しの義なりしの反ちぐくゆくしいもみぢ葉といふべきを略して もみぢ〳〵のといふなり 中略 ずるともみぢとも
もみぢのいとみぢらをみるなりしが子の反づなりしもとなどハおとし ちらをあり〳〵が子の反たなり〇もみぢする木ハ楓櫨 白膠木 蔦 檀 柏 櫧 栭 梅 櫻 正木など各頭字の部にちかく註を〇楓のもみぢもじあまたる故花といへハ櫻とあるがごとく もみぢといへハ楓の事なり 又もみぢハ山より染て里へ来る 下る花ハ ... 麓の方をさ こぶかきにまで庭のせな うつろひもみぢ葉 玄音法師

紅葉の舟

和訓栞 源氏に紅葉をまさぐりて たる舟ともも紅葉のここで もみぢのをぶねともみえたり

紅葉かつちる

青藍云 俳諧歳時記に馬琴云 紅葉かつちるのかハのの色をまつ梅の花などいふかつにおなじく そぶまして花やきたるなり 又陸佃が埤雅に茶褐色ハ黄黒色といへり 樹々の下枝ハ早く色つきてるが 雨露のくまなきゆゑ 黄黒と茶褐色にみのてちるなどいふ也あらん 故にかつちると秋より下もみぢかつちる山の夕しぐれぬれてやひとり鹿の鳴らん

家隆 家兄罹維文云かつちるハ數々ちるにや 古〻 此説これおぼつかなし かつちるとかるハ盛に染るもみぢのちるかくいちりそむるといふまでなり のかつといふてよからんハ此心にて弁ずべし

紅葉狩 紅葉と狩

るを狩といふハ 俊頼集 あられゆくそのく原のもみぢ狩そのむ蕨あらくゆらし哉

紅葉衣 挑 華

菜葉 表黄 裏蘇芳 九月より十月まで 一説に面裏青 又黄紅葉面黄裏青 青紅葉表青黄裏紅 其外 櫨紅葉 紅葉 紅葉重 蝦手紅葉等品々これあり

紅葉土器

禁中重陽宴きごとにて土器によもいへりて紅葉 塵文云増山の井に重陽の下に出たる ほこ し御厨子所の預り高橋氏へもとひえるへて紅葉土器の名目あらとのうり 菊の盃に對しつつ名ふるべし

紅葉鮒

和漢三才図会 深秋その鱗くれなゐなりあらしるを紅葉鮒といふ

七月

施餓鬼

施餓鬼棚 川施餓鬼

紀事 此月朔日より十五日に至て寺院の意に任せて と修して その法門前に壇を四隅に構へて と須弥の四州に比す 寺僧その上に座し経を誦し 中央に種々の供

物と備ふ是ハ鬼子母神の子とう食ふ故ふ佛戒めて今よ
て洗ず食ハ別ふ子へんと誓ひふこの故ふ末世の仏子ふ
勅して毎日浄飯七粒づゝを供へその飢渇をもくいまむと云、
○一説ふ目蓮の母餓鬼の中ふ墮ちてこの功徳をまうけ
諸の餓鬼をして食と得せしむるとう

施餓鬼通覽

廣大施餓鬼の法浄き所と点定し地と掃ひ棚と作る長き
三尺ふ過ぐべからず、但桃樹柘榴の外用ふるところの花神ふそ
ゆゑてこれこと食ふことをえざる或ハ浄地の上大石の上或ハ泉池
江海流水中、これ川餓鬼ふ用ふ東ふ向うて施す、尤時と戌時定め
てこれこと行ふ大幡三本これふ咒謁と書て云、唵摩呼嚕唎
呼吃婆婆訶、これ空想閣經の咒ふ又七如来の幡とわぐ、
別ふ焦百鬼王と用ふるもれハ施食のうちの面前鬼ふ始ふ受、

倶舍論頌

鬼八月と日ゝとて、五百
人間の一月と一日として壽九百歳、

摂待

門茶

伝祖統紀

宗曉傳曰

義井と城南の樂社ふ鑿法華水とい以て行者ふ飲しむ、
亭をその上ふ作て施ふ湯茗を以て屋と結ぶ数楹
創て摂待とい〇往来の人
ふ茶と施ふ門茶も云、

洗車雨、洒涙雨

天中記七

月の六日の雨と洗車雨とい七日の雨と洒涙雨とい、

漢

塩草

車と洗ふ雨とい七夕の別とい〇この夕べ雨ふれば天
の川水漲て二星会ふまことをえず
俗説この洒涙雨となり詩ふ詠りしまく、

施火燒

大文字焼

鳥居の火

船形の火

紀事

七月十六日今宵東山浄土寺の山上
妙法の火　ふ薪を以て大字と点ず此字畫九畫の及ぶ
夏ふあらざ傳ふ室町家繁昌の日遠望遊觀の為これと
点ぜしむ故ふ一条通りと正面ともに〇一説ふ延德元年七月十
六日、相國寺横川和尚始てこれと作る是將軍義尚追悼
のゆゑ、凡この月六日より薪を伐点火をるふ至ふ至ることの
ふ預ふ數十家あり今日申の刻各伐乾ところの薪
を搭い山上ふ登ふ凡大文字一畫長さ百五十間余五又むうう
と隔て薪木と積事一堆その數四百八十余所各薪と積終り
て後日の没ふ至ると待ち同時ふ火と点ぜこの外北山松が崎ふ
妙法の火と点じ船岡山ふ船形の火と点じ愛宕山ふ鳥
鳥居形の火と点ず洛外所々の山岳ふ原野ふ諸人集て
枯麻の枝樹の枝破子ふ卿基の類と焼く、

善福寺童

うんと聖吳の送火とのひ又施火とのふ、

相撲 十五日 江戸麻布雑色町ふあり麻布山と号す、開山了海上人ハ親鸞上人の弟子にて今日開山了海上人の忌日なり故ふ寺内ふ祭る所の麻布権現の社前ふて童相撲あり報恩のこころなるべし、仙花

翁花 こうげ 剪紅羅 剪秋羅 剪秋花 花の形刻こ有てふ刀或ハ鋏とはさきうあせるがごとくし俗ふせんとりかへし秋深紅の花とひらく種類数品あり、松本セン 小倉セン ブシセン フレクロ 眼皮ハ二類異種こカンセ フレクロハ三四月ふ五六月ふ咲依て剪春羅とも云ふ、総て此花和種こ昔嵯峨清涼寺の北ふ寺ありて仙翁寺と云ふ其寺絶こ跡ふ珍花生ずる時人仙翁花とも云ふ、則前ふ羅紅あり又紅梅咲とも云ふ、

兼三 秋物

千秋樂 盤渉調の曲也 体源抄 千秋楽 柏子八又十六柏子○王子降誕七夜ふこれを奏す盤渉調ハ秋の野ふ萩女郎花風ふ吹くがごとく吹べきこと○俳書ふ千秋楽と出ずる万歳楽秋風楽と出さず秋風楽ハ漢の武帝の時出来て秋声の辞なりと、秋季ふハ分一ふあらざるべし、

八月

釋奠 献酢 続日本紀 聖武天皇天平二十八年八月癸卯釋奠服器及び儀式を改め定む○二月ふ同じ春の廿の部ふ見べし 公事根源 あるる日釋奠の胙とまゐらせ藏人持て朝餉の前ふそむ藏人答てふんやのつらさの奉まるる昨日の釋奠の胙音と文字とふくくしへて高く擎持て簾の中ふ入事こ此度ハ二月ふあるべきや胙と献をハ八月ふ限るなり兼ふ猶有職の人ふ尋ねべし○釋奠の翌日なる事こ胙といひしきのこと

鶺鴒 いの部 稲負鳥 千振 胡黄連こと の部ふ見し 千生 ひの部 瞿曇 の条ふ注す

九月

泉涌寺舎利會 八日 洛の泉涌寺舎利殿ふおいて毎年九月八日舎利会と行ふ音楽あり律師法海宋の白蓮寺よ り受持の仙牙あり 仙蔘 珊瑚こさ の部ふ出 梅檀の實 時珍曰其子金鈴の如し熟する時ハ黄色金鈴と名く形ふ象る○梅檀ハ揀こ夏のあの部ふ見べし

七月

硯洗 つの部 机洗の条下ふ出ず 水灯會

十六日、城州宇治郡大和田黄蘗山万福寺ふかり賞
八華人黄蘗隠元琦禅師明暦中の建立〻紀事〻今會
宇治川の船中すそこまと修〻水中施食の法事〻其
式船二艘と双へ申の刻むうふ岡屋の前ふ出先〻流ふ
沂つて宇治橋の下ふ至る暮ふ及で船中數个の燈臺
と点じ僧徒左右ふ座と列ね七如来の牌と安し供物と
備へ經巻と誦し音磬とうちて流ふ隨ひ下るもとして
後三百六十个の燈と宇治川ふ浮へ流ふもとひ水ふ瀕ひ
散乱すむ恰も蛍火の如しその灯白紙と以ふ蓮花と
造つ内ふ艾心と塹へその熟艾ハ焔硝と以て煮る火と
その末ふ点じ点ぜ或ハ流ふもとひ伏見豊後橋の
下ふ至るものうへ僧徒亥の刻むうふ岡屋の前〻帰
る其間遊覧の船數千之〔月令廣義〕南国の風俗中
元の夜家〻各羮飯と見へ齋供と門前ふ羅或ハ胴衢
の所傷亡の野鬼と祝祀一畢て水燈三千六〻ひけ
流水ふむうへて浮む名づけと度孤とのふ燈ハ紙燈あり

相撲

部頭使〔漢書注〕兩々相當て力と技藝射
騎ふ紙戲とも故ふ角紙とのふ〔事原〕

史記秦の二世甘泉宮ふ在て樂を角力戲俳優戲〻ひ
漢の武帝この戲と好む即今の相撲〻〔垂仁紀〕大和国當
麻蹶速と出雲國野見宿禰一力と撲一む蹶速野見ふ
勝〻あ〻ふ〻ぞ〻その腰と踏折〻て死さ〻野見ハ當家
の祖〻〔扶桑畧記〕柏原天皇の時〻代々天子皆悉〻相
撲と好む貞觀以後寂然〻て無事〻今聖主〻ひ〻稽
ぜ又集一〻ふ〻ぞや〻〇先〻二三月のとろ大將以下諸の座
ふ於て相撲使のとと定む諸国七道ふ遣一そ相撲人と
召ものこと部領使〻ふ〔八手根源〕相撲江次第ニ仁寿殿東庭の相撲と供御ハ相撲と奉行
あり裏昏ふ云南殿出御のとき〻是ハ諸国の供御人
仁寿殿〻於て召合の技出示あり
国の殿人側諸をもつてあつめて七月ふ相撲の節とひて天子
の御覧ぜ〻ものあり先十六日の間ふ召仰あり上卿勅と
奉〻て左右の次將ふ相撲あ〻ぎ〻と仰〻る左右の
近衛方と分て国々〻使と下して相撲と召もとれと万葉
ふこ〻ろ〻て使とい〻り廿六日ふ内取といふ〻ものあり仁寿殿江次
ハ裏昏ふ云大の月ハ廿六日小の月ハ廿五日仁寿殿ふ於てこれと行ひ
御物忌のとき清涼殿ふおいてこれと行ひ
美とのふ〻内取とハ〻ふ〻ぞ〻ふ出御〻ふ左右の角力人東
故ふ左と左右と右相撲あり〻故障あり近年御物忌と申とき〻の
ふて角力十五番ひ〻あるとき〻ハ仰ふ隨て進止を、犢鼻のとふ狩衣袴を着〻く

延元三年江記云角力人三十人次第行列その襷束烏帽子狩衣
積鼻褌〻差細狩衣の上ゑ帯を着て下衣襷を着を袴読谷三郎
ゑ〻〻〻

色細子あるべし、是ども、其莖扁〳〵強健長き六七寸小児莖を取て穂を結結て縫の如くし、二筒を用ひ一は其稽のふさ〳〵をとり、両人莖を持て相引く、切るる方輪となり、

透徹析 伽羅竹くきの部にあるべし、

すごのる もぐと鹿といふ誤なり、先板の諸抄をもてふもとがひて、秋の部に出もふようてこそふ贅して其とらりを注と、古今もぐらもちひ秋の萩原朝もちて旅ゆく人とのゝ 万葉云、真州公翁云もぐるは日本紀ふ螺蠃と書てもぐるとよめり、一説に、我蜂とも云、此蜂は糸の木の虫をみい来て、巳が巣を七日呪ひ、巳が如き蜂とするなり、其如く今別ゆきて又ひとつとも帰られぬ人まとは帰るをいつこうまこんとこちやがきこそあり、中暑此言何ども考られぬ、萩原とふふつきてもがい鹿の事くもど、けらぬ説とをいつて、云い俳諧の書は後の説ども ふるようく物をもどりくる誤又多し、

八月

胡

芋 芋の莖とらふ 大和本草 唐の芋の塩煮て食し、生にて酢とくして食へ、

鱸鉤 鮒鮎

大和本草 鮒魚大なる者二三尺、三月以後七月まで肥も著月脂多くして味よし、八月より肥もとる、夏秋さしこ絵〳〵

鮎 とあり、夏月腸の味より〳〵クモロタよりも腸あり、脂多く味よし、小ふるとヒイヅとふ、松江ふるで、中華松江の鮒は其大サ日本のセイゴの如し、云、河鮒味尤よし、暑月の雑品に海と河の間ふあるもの味よし、漁人これと釣或は戈ゆて突てとる、

鮗 鮗つる こゝろかなるらし〳〵 動つり半残

十三日 宝の市 拾芥抄 九月十三日住吉相撲会 社家記 神

九月 **住吉相撲会**

升市 興玉 出嶋頭宮へ渡御、傳々供あり、津守の神主勅使代とし宣命と讀畢て、相撲十三番、童相撲三番あり、瓚鼻褌の上ふ注連と纏ひて手合あり、是今日の神事、〇一説ふつるに、神前へ黄金の升と作て、新穀の稲と奉つるとよりて農家用ふる処の升と此処ふ持来て売りこゝを以て種々の市へ群集ふる故、宝の市とふ、只当社の新嘗会に尋べし、八神興と別殿へ迂し奉りて、五穀新嘗の神膳を奉る相撲会の事中頃より沙汰あり、宝の市升市是〇升買で

分別する月見るめ、芭蕉

住吉の神送

晦日 九月晦日、摂州住吉の神輿、玉出嶋の仮殿(渡御所)に移と修さそれと住吉の御菅の祝とふ、祝祠あり、又北条と称も出雲石といふ所あり、称宜出雲と遠ふ拝むこれと神送るを、今日四天王寺石の鳥居の邊ふかまこと神送つあり、坂所々の神社も又神送りの神支あり、

爵入大水為蛤

月令 此記、戌月之候爵為蛤、蛤飛物化為潛物、九月節

酔楊妃

百菊の内に、大白入薄紅のあそ万重大々輪、

芒散

其花老るありそ、風ふきとがひて散乱するとき我鳥毛の如、時絮の如く

追加

は 八月

朔梅 冬のふの部、冬の梅の条ハ注も、

ほ 七月

星草 大和本草 穀精草、沢中水田の中ふ叢生も、葉の中ふり一莖を抽んで其形其蘭ふ似て、莖の末ふ白花の円さあるを、俗太鼓のバチといふ、

り

琉球芋

大和本草 甘藷 菜の葉ふ似さり、根ハ瓜樓根ふ似さり、根の下ふ短き蔓あり、根の餘のひけあり、又鴨卵ふ似て大きさあり、鴨の卵ふ似て小さるものあり、七八重さ一斤あり、長さあり、四きさるとき、夏月蔓長く生ず、中暑此種元禄の末、琉球より薩州ふ渡る、後七ふよろし、寒地ふ植まそ生せるを、

ぬ 八月

鶉 大和本草 呂忠ツグミとの小常のつグミ、大あり、ほ一多し、山中ふあり、鶉の字順の和名抄ふ唐韻を引けるを中華の書ふハ怪鳥と、といへり、

ち 九月

万年青九前おき 此詞僧山の井ふ出ス万年青のまんちき、牡丹の脈松の脈として立花ふ用ふるあり、但し池の坊三ケの傳受あるハ委しくふ、

し 八月

鴫の羽盛 鴫の羽あり、千鳥の羽あり、料理ふとる事あり、切るる頭翅を以て全体のさまと作りそ、その脊のところへ焼くる肉を盛るこれと鴫

の羽盛
とりふ

増補歳時記拾草秋之部終